伊能忠敬研究

史料と伊能図

二〇二二年　第九十七号

伊能忠敬研究会

史料と伊能図「伊能忠敬研究」

二〇二二年　第九十七号

伊能忠敬研究会

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.97 2022

表紙解説

国立国会図書館蔵 伊能大図97相模　甲斐（大月周辺）

伊能隊は、第七次（九州一次）測量の帰路に甲州街道を測量している。文化八年年五月一日（１８１１年６月）に中初狩宿（現山梨県大月市）を出立した忠敬ら本隊は、二日に猿橋駅（大月市）、三日に甲州の最東端上野原町（山梨県上野原市）に宿泊した。そして、五月四日には、小仏峠を越え武蔵の国の最西端小仏宿に到着する。しかし、甲州街道上で甲斐と武蔵は直接隣接していない。間に相模国が入る。伊能図では、上野原村と關野の間に甲斐国と相模国の国境の地名が記載されている。甲斐国側の郡名は都留郡だが、相模国側は郡名ではなく「津久井県」となっている。この図は明治初期に模写されたものであることが知られているから、廃藩置県後の県名が記載されたものかと思う人もいるかもしれないが、「津久井県」の地名は、測量日記にも記載されており、江戸時代から存在する。「県」はもともと「郡」より小さい単位の地域を示す用語であった。明治４（１８７１）年の廃藩置県直後には多くの小さな県が誕生したが、同年中に府県統合が行われ県は複数の郡の範囲を管轄することが明示され、県と郡の範囲の広狭が逆転した「津久井県」は、鎌倉幕府の御家人三浦一族の津久井氏の所領が小さかったことから名付けられた江戸時代では珍しい「県」名である。伊能隊は、第八次（九州二次）測量の往路でもこの地を測量している。伊能隊が第八次測量に出発したのは、第七次測量から江戸に帰って半年あまりの文化八年十一月の末（１８１２年１月）である。江戸を出立して、東海道を横浜、藤沢、平塚へと進み、そこから本隊は、大山町（伊勢原市）、田原村（現秦野市）、関本村、矢倉沢村（南足柄郡）、竹下村須走村（静岡県小山町）を通り、甲斐国に入る。下吉田（富士吉田市）から本隊は北東に向かい、上谷村（都留市）、初狩宿（大月市）を測量して、甲府街道を石和駅（石和市）、甲府へと進み、甲府から市川大門、身延山、南部宿（南部町）、万沢宿（富沢町）を通り、駿河国に入る。一方、下吉田で本隊と別れた支隊は、河口湖畔の川口村から西北へ向かい、藤野木村（御坂町）を通り、御坂山地を越えて黒駒村（御坂町）、黒沢村（市川大門）を通り、そこから富士川沿いに南下して岩淵村（富士市）から駿河国に入る。忠敬にとって最後の長旅の始まりである。第八次測量を終えて、江戸に戻ったのは、文化十一年四月半ば（１８１４年６月）で、足掛け三年におよぶ伊能隊最長の旅となった。

（表紙題字は伊能忠敬の筆跡）

菱山　剛秀

目次

表紙解説
国立国会図書館蔵
伊能大図97号相模　甲斐（大月周辺）　菱山　剛秀　1
●国土地理院長から感謝状贈呈
研究と話題
●門谷清次郎『薩隅見聞之覚書』　平田　稔　2
●江戸府内第一次測量の記録（六）
―文化十二年二月十日の『日記』―　玉造　功　10
●土佐の伊能測量５　土佐清水―宿毛編　福田　仁　18
●伊能図に描かれた「現存十二天守」（三）
松本城　河崎　倫代　23
姫路城　室山　孝　26
●国宝紹介　幕臣としての伊能忠敬　玉造　功　29
資料
●「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」
連載第三十回　渡辺　一郎・井上　辰男　33
忠敬談話室
●金沢八景散策
忠敬さんが歩いた金沢八景　大沼　晃　60
足裏に忠敬の足跡を記憶する　広瀬　登　62
金沢八景散策紀行　稲葉　末明　63
「一覧亭」の今昔を歩いてみた　前田　幸子　64
●「富岡八幡宮奉納目録」―渡辺一郎さん―　玉造　功　66
●学士院中図公開　68
●書籍紹介
平井松午・島津美子編『伊能図研究図録』　星埜　由尚　69
平井松午編『伊能忠敬の地図作製』　菱山　剛秀　70
梅田うめすけ著『汐さいの地図』
会員だより・お知らせ
くらしと地図・測量展に参加　事務局　71
大河ドラマ化の取り組み　木内　信次　72
忠敬を詠ふ　伊能　洋　72
特別展『地図最前線』のお知らせ　事務局　72
二〇二二（令和四）年度総会報告　事務局　73

97号

感謝状

伊能忠敬研究会　様

貴団体は長年にわたり伊能図と伊能忠敬事跡の調査研究を行い後の地図作成に長く影響を与えた伊能忠敬の実績や実像を広く普及することで地図や測量の普及啓発に多大な貢献をされましたその功績は誠に顕著でありここに深く感謝の意を表します

令和四年六月三日

国土交通省国土地理院長

飛田　幹男

国土地理院長から感謝状贈呈

平成元年に6月3日の「測量の日」が制定された以降、測量・地図に関する普及・啓発に顕著な功績のあった個人又は団体に対し、国土地理院長から感謝状が贈呈されている。令和4年度は、伊能忠敬研究会に贈呈されることになり、国土地理院長から感謝状と記念品を受け取った。

感謝状授与
飛田国土地理院長　菱山代表

【贈呈理由】

伊能忠敬研究会は、伊能図と伊能忠敬事跡の調査研究を行い、伊能忠敬の実像を普及して社会に貢献することを目的に平成8年に設立され、昨年25周年を迎えた。これまで設立の目的を達成するため、研究発表会、講演会、見学旅行などの開催、年3回の会報「伊能忠敬研究」の発行、その他研究会の目的達成に必要な事業を積極的に行っている。

昨年は、「大日本沿海輿地全図（伊能図）」の完成から200年目にあたることから、伊能忠敬の業績を顕彰するとともに、日本の近代化を支えた伊能図を末永く守り伝えるため、伊能図完成200年記念事業推進協議会を組織し、伊能図完成200年記念の各行事を主催者として開催している。また、落語家であり名誉会員である立川志の輔氏の創作落語「伊能忠敬物語―大河への道―」を原作とした映画「大河への道」（中井貴一氏主演、5月20日公開予定）にも「協力」として携わっている（国土地理院は「撮影協力」）。

これらの取り組みは、近代測量の礎となり、その後の地図作成に長く影響を与えた伊能忠敬の実績や実像を広く普及することで、地図や測量の普及・啓発に多大な貢献をしており、その功績は極めて大きい。

記念品の電波時計

門谷清次郎の「薩隅見聞之覚書」をよむ

平田　稔

はじめに

本誌九十六号「史料紹介」で玉造功会員が「門谷清次郎『薩隅見聞之覚書』」を紹介し、末尾に「どなたか翻刻を御願いします」と呼びかけたのに誘惑され、無謀にもやってみた。ちなみに私は鹿児島県大隅の出身なので乗り気になった次第である。

構成としてはまず全文を翻刻で紹介し、続けて口語訳を載せ、最後に解説と感想を加えた。原文は「鶯宿雑記」四六三巻の一部であり、国会図書館デジタルコレクションから画像（９６～１０３コマ）を取り出し、閲覧した。

『薩隅見聞之覚書』原文　国会図書館デジタルコレクション

【凡例】

・翻刻にあたり、できるだけ常用漢字を用い、適宜、読点（、）と並列点（・）を加えた。

・ザボン・サボテンなど名詞、及び「三ツ四ツ」等の助詞を除き、仮名の表記は原則、平仮名とした。

・合字の「ゟ」は「より」とした。

・原文に付けられた振り仮名はそのまま記した。

・二文字以上のオドリ字記号は用いず、文字で示した。

・二行割りの部分は（　）に記入した。

・測量に関係した箇所は**青字**で示した。

一、「門谷清次郎薩隅見聞之覚書」翻刻　室山 孝 校訂

大隅国大隅郡辺津加（ヘツカ）村の内、佐多の岬は日本第一南に出し土地也、すへて薩州は日本の南海の果也、就中此地暖気成事、たとへは此地正月上旬頃は、東都にて三四月頃にも時候あたるへし、去に依て、吾妻には絶てなき樹木多し、又此辺蘇鉄山有、凡卅里斗の間おしなへて蘇鉄也、中には何れもいまた見聞もせぬほとの大木数千本あり、此地辺鄙なれは、村に住人たり共行さる者多し、誠に人跡も絶し南山の果成幽谷也、こたまの外あらて、おほつかなくも呼子鳥さへ見へもせす、青海原をかへり見れは、和田の原やら天の原やら雲と水との果もなし、かの俊寛法師の流されし鬼界か嶋はかしこにや、霞をおひし浪間より顕はれわたる屋久の嶋、あつまみやけにあるものは、是も咄の種子（タネ）か嶋、其荒波の辰巳の方、琉球国の別世界、是を世にいふわたつみの都とやいふならし、実に果もなき遠つ国、波の底成都成らん、

おほやけて行も我身の屋久の嶋是も咄のたねか嶋也　腰折、

同所に檳榔樹多し、さぼてんの大木（高さ一丈有余枝しけし）、蕃椒の大木、ザボンの大木（くねんほの大きなるもの、味よし、世にしやかたらみかんといふ、）是等も東都にはなき珍木なり、尤檳榔樹暖気にあらされは産せす、就中此辺甚多し、沖に檳榔（ビロ）嶋といふあり、是ビンロウ多き故に名つく、又サボテンの大木大小の枝茂りて甚面白し、是等東都にも有へけれと、年々の寒気にたへずして、きゆる成へしと察せらる、

さほでんや独活の大木なといふ事は、東にも多く聞つれと、未とうからしの大木を不聞、又琉球国の綿の木は皆大木也とそ、木綿（キワタ）とて日本綿より丈夫成よし、爰を以て考見れは、かの近頃戯述せし弓張月となんいへる草紙に、茄子の大木有て、階子を懸て是を取図あり、思ひ合すれは、左も有へし、すへて九国の暖気成事、**二月初つかた肥後国熊本に至りし**に、はや桜の花盛にてしかも八重たに散時也、**又同月の中頃薩摩路に入し**に、もはや桜の花はかげもなく桃の花さへ散はて、見る花とてはなしの花、牡丹の花盛也、池の蛙の鳴さまもいとめつらかに覚ゆ、

同国同郡桜島（鹿児嶋の湊にある焼山の嶋也、）周回十里斗、村里も多く、又人家も多し、此嶋の形駿河国富士山に能似たり、年中頂きより煙りを吹事信州浅間山より猶甚し、此嶋養老年中海中より涌出すといふ、又和銅年中大に

荒て、近国へ石砂ふりしよし、其時より今に至て、山上の焼る事たへす、又烟を吹出す事甚し、其後又安永八亥年大に荒て、同年十月朔日、新たに七ツの嶋涌出る、其中の大なるを猪ノ子嶋と名つく、廻り凡一里斗有て、今は人家八軒、田畑も有也、其外に小嶋六ツ有、又此島の埼に温泉多く湧出る、右安永年中の煙出は近来の事成故、夫を見し人はめつらしからす、実に天のなせる工み大なる事、ふしき共又奇也とも謂つへし、

人王七代孝霊天皇五年、近江国地さけて水海と成る、同時駿河国富士山湧出るといへる説も思ひくらふれは、無にしも有へからす、

又鹿児嶋風景を詠る歌に、桜嶋をよむ、

嶋に富士こゝか清見か寺なれは洲先の方は三保の松原　読人しらす、

或人此歌を遊行上人のよみしといへり、是非をしらす、

開門か嶽を詠、　　近衛関白殿

さつまかた穎娃の郡のうつほたけ是そつくしの富士といふらん

当国穎娃の郡に開門か嶽といふ高山は、世に所謂さつまふしといふ、是也、又沖の方より回船の目当とする高山也、かこ嶋よりもよく見ゆる、

薩州桜嶋の間に五、七日風待し、夫より同州なる山川の湊に又八、九日風待しけるに、此嶋の民家の家造を見れは、屋根を石にて畳み、其上をひしと漆喰をもて塗しもの也、雨ふれは屋根へ登り、たはしをもて洗ふかことくす、江戸抔にてかゝる屋ねの真似をせしならは、寒中忽凍われて、一年限の屋根成へかりしを、暖気なれは其難はなしと見へたり、又右前にいひし檳榔の木、此辺甚多し、かの蕃椒の大木も民家に植て有、この地温泉所々より湧出る、就中浜辺に多し、砂地を穿て其中へ入りて湯にて躰を蒸なとあり、是は江戸の炊釜風呂の心か、田畑の中まて湯わき出る、されと五穀はよく実のるよし也、又三月上旬成に諸人ひとへ物を着るを見れは、肝潰かし事也き、以上の言説をもて東人に斯と語らは、よも実事とは（思はさらめ、）

三月廿八日といふに、漸薩州山川の湊を出帆し、其夜六ツ半時頃、屋久嶋へ着岸、今日は海上静にて、余り浪なく心よく渡海いたし候、しかしなから唐国と琉球の外ならて国もなき海原ゆへ、波の高き事は山のことし、

大隅国駅謨（コノ）郡屋久嶋、（周回廿五リ、村数廿四ケ村）

（家数千三百四十軒、高九百三十六石八斗九升八合）

京大坂の流人、此嶋に流さる、伊豆国八丈嶋、其外の七嶋より近に辺鄙とてこそ覚ゆれ、此嶋の沖に十八、九里にして硫黄嶋といふ有、是は前にもいひしことく俊寛僧都の流されし鬼界か島なり、此訳末に委く記す、此薩州へ随はさりし已前に、屋久嶋王と称し自立せしといふ、其後薩州の手につくとそ、

屋久嶋産物

屋久杉（是は尤大木と也、木理面白し御留木也、嶋中はあまりに多き故、さのみ良材ともせさると見へたり、）

ヘゴ　東都抔にては石菖なとの様に小さきは植てあり、これは他国になし、皆此嶋の産物也、此嶋の山中に在るを見れは大木あり、其葉は裏白のことし、又蕨の葉の大きなるに似て尤長し、凡八、九間斗にて、其形蘇鉄のことし、又此嶋中にては民家の木戸なとに用ゆ、是等甚珍しく覚ゆ、

主馬判官盛久之墓

平家の落人也、其ころ乱を避て此嶋に逃れ来りて住居せしと見ゆ、其由来愚民ゆへ詳に知かたし、

唐芋（又琉球芋、江戸にてさつま芋といふ、）多く作りて夫食とす、田畑少し芋畑斗也、又此芋の能有事かそえかたし、葛を作る、しやうちうを造る、飴をつくる、此外いろいろ用いかた多し、

此嶋にて女のわらはさんさぶしといふを唄ふ、其二、三を注す、（尤言語あつま人には通しかたし、）

屋久の権現むすぶの神よ三度参れはつまたもる　ざんざ　ヲ、引

やくに下らはわらじかうて下れ屋久は石原小石原　ざんざ　ヲ、引

さんさ我身かから竹ならはをれて見しよもの三ツ四ツに

あんほ川（村の名也、）口二か瀬がござる思ひきる瀬ときらぬ瀬と

屋久じや宮の浦（島也、）たねてはあこぎ名所ところはかごが嶋

あいは瀬にすむとりや木にとまる人はなさけの下にすむ

さまは川上わしや川下よかいて流しやれ恋のふみ

さまをおもへはてる日もくもるさへた月夜もやみとなる

やくの八重だけやくそくしたかかるやうにかをらしらぬ

さまは野にたつぬしなし花よおらば今おれちらぬまに

さまはもみちばかはらはかはれわしはかはらぬ松の色

此外多けれといつれも心は同し事也、是をうたふふしは何とたとへん様もなし、只江戸にて白酒をひく歌か、又は越後のしんくにも似たり、詠歌と唐人の繰言をよこしにごちやごちやとこねまぜたる事也、併是はよほと屋久の嶋

もしやれてきて、近年のはやり歌なれは、その文いやしからす、あだなる歌也、又おかしきは、山のくやうといふ歌有、其一、二、

○ 一にや善次どん二にや半へおとる　エ、引
　　ならか長一どんにみせほれた　ヨイヨイ

○ やくと種(たね)のあいに松のはしよかけた
　　ひのきからかさくわのつへ　ヨイヨイ

○ しよんかはき女(みよ)はやきもちずきじや
　　よんべ九ツけさ七ツ　ヨイヨイ

是等は何と注の付やうもなきちんふんかんにて、やうやう女のわらはのかたりを聞、うたふ時は猶わからす、去なから思ひの外此嶋辺鄙にもあらす、随分男女の物いふ事も分らぬといふまてにてもなし、

右嶋、浦廻り凡十二、三りにして終る、四月十四日安房村といふに暫く風待し、同月廿六日順風にて種子か嶋へわたる、

大隅国熊毛郡種子嶋周回三十八里、

薩州の家臣種子嶋佐渡領分、

高五千二百五石七斗四升五合（家数弐千百拾五軒、外三百十五軒、種子嶋佐渡家来、）

此嶋も薩州の手に入らさりし以前は、種子嶋王と　称して自立の嶋也、古へより今に至りて其子孫の名　を上妻七兵衛と云、今猶連綿たり、此嶋鉄炮の元祖なる事、世の人の知る処也、

当嶋は人物風俗も屋久の嶋にさしてかはる事なし、しかし当嶋は種子嶋佐渡の領地なれは、屋久よりは開し嶋也、尤佐渡代替りに一度ツヽ此嶋回浦する事、古例成よし、去に依て嶋人等生涯に薩州藩中の人たにも見る事稀成に、此度我等　台命に依て来嶋せし事、誠に種子嶋開闢以来なりき、去故に近郷近在より東(アツマ)人を見んとて、老若男女おしつどひ、かの異国人の来朝を見るかことく、爰の浜辺かしこの山の手に見物人出て、我らを見る事騒々し、又此方よりかなたを見るに、何れも男女の風俗にかはりもなけれ共、たゝおかしきは中にも七十有余の老姥示(平カ)伏し合掌して拝むこと、興ありげに覚ゆるに、又此嶋へ東男のわたりし事、古今にありと聞は、是又増りてめつらしくこそ覚ゆるならんかし、是等の説は此嶋に生れし男女、種子か嶋より外に世界に国なきと思ふほとの愚民律義の誠より出て、只　台命の難有を拝するとこそとおもへは、左も有げなるなりき、又種子か嶋・屋久の嶋の遠近に見ゆる嶋は、

高嶋　硫黄嶋　黒嶋　口の永良部(エラブ)嶋

七嶋、是は薩州の内なれと甚遠し、此嶋に至るならは、琉球の嶋々も見んと思ふほとの遠嶋也、尤七ツの嶋あり、夫より先は段々琉球の嶋々も有、尤屋久嶋・たねか嶋よりは是等は見へす、右に記す嶋々見ゆるのみ、

硫黄か嶋の説、昔時軽野大臣といふ人遣唐使の役を蒙り、唐にわたるの時、志那の人是に不言の薬をあたへて唖となし、身に彩画し、頭に燈台を載て夫へ火を燈し、則是を名つけて灯台鬼といふ、其子参議春衡、又遣唐使と成り、于時斉明天皇二年丙辰の年也、志那の人これを貴重す、帝も猶然り、夜に入に及て、灯台鬼を出す、鬼灯はるかに春衡を見て、我子なる事を知るといへ共、言ことあたはす、涙を流し嗚咽して指頭を噛切、血書して曰、

　我ハ元日本華京客、汝ハ是一家同姓人、為子為爺前世ノ契、隔山隔海恋情辛シ、経年流傍蓬高宿、逐日馳恩蘭菊親、形破他郷作燈鬼、争力帰旧里寄此身、

又、歌に、

　灯火の影はつかしき身なれとも子を思ふやみのかなしかりけり

春衡是を見て我父也と知りて、遂に灯鬼を求め得て日本に帰る、同日薩州硫黄嶋の辺に没す、其葬る処の地を鬼界と名付と、保元の頃俊寛流されしも此嶋也、又屋久嶋へも今以京都・大坂辺の科人流され来るなれは、俊寛此嶋に流されしも拠所有に似たり、されと其頃は彼嶋開らけされは、人里もなき様に、平家物語に記せり、今は能開け村も有よしなれと、海路遠くへたゝりし故、孤嶋なれは薩州の人たに行く人はなし、

五月廿三日といふに順風故、種子嶋を出帆し、かの硫黄（鬼界の事）・竹嶋の辺をひと走りにて、佐多の岬も打越て、つくしの富士も跡になし、薩州山川の湊に船つく頃は、日も西海に没しぬれは、其夜は舟に赴、翌廿四日早朝より出帆し鹿児嶋へ着、各再ひ日本の地に帰りし事を祝ひあふも道理也、

（奥書）

右之書は、文化九年申、測量御用伊野勘解由門人門谷清次郎、彼地へ差添罷越、鹿児嶋へ帰着之翌廿五日出之宅状に申越候見聞之趣也、

門谷清次郎は御細工所同心組頭門谷富五郎倅にて、天文方へ出役しもの也、

二、「門谷清次郎薩隅見聞之覚書」口語訳

平田 稔・室山 孝

大隅国大隅郡辺津加村(1)の内、佐多の岬は日本最南端の土地である。すべて薩摩藩の支配地は日本の南海の果てである。とりわけこの地が暖かい気候であることは、例えばここの正月上旬頃は、東都（江戸）では三、四月頃の季節にあたるのだ。これによって、吾妻（関東）には絶えてなくなった樹木が多い。またこの辺りに蘇鉄山が有る。およそ三十里ばかりの間すべて蘇鉄である。中には今までに見聞きしたこともない大木が数千本もある。この地は辺鄙な所なので、村の住人すら行ったことのない者が多い。まことに人跡も絶えた南山の果ての幽谷である。こだまの外何もなく、おぼつかなくも呼ぶ小鳥の姿さえ見えない。青海原を振り返って見ると、和田の原（大海原）や天の原（大空）など雲と水との果てもわからない。かの俊寛法師が流された鬼界が島はどこにあるのだろうか。霞に覆われた浪間より姿を顕わさんとする屋久の島、吾妻土産にあるものは、これも咄（はなし）の種子が島、その荒波の辰巳（たつみ）の方（南東、実際には南西方向）には琉球国の別世界、これを世にいう「わたつみの都」というのであろうか。実に果てもない遠い国、波の底にあるような都ではないだろうか。

おほやけて（公で）行くも我身の屋久（役）の島　これも咄のたねか島也

腰折(2)

同所（大隅国）には檳榔樹（ビンロウジュ）が多い。さぼてんの大木（高さ一丈有余で枝が茂る）、蕃椒（唐辛子）の大木、ザボンの大木（「クネンボ」の大きなもので味はよい。世に「ジャガタラミカン」という）これらも江戸にはない珍木である。もっとも檳榔樹は温暖な気候でなければ育たない。とりわけこの辺りが特に多い。沖に檳榔島という島があり、これはビンロウが多いことから名付けられた。またサボテンの大木は大小の枝が茂って甚だ面白い。これら東都にも有るだろうが、年毎の寒気に耐えられず、消えていくものと察せられる。

サボテンやうどの大木などは、吾妻でも多く聞いたことはあるが、いまだ唐辛子の大木とは聞いたことがない。また琉球国の綿の木はみな大木であるという。木綿（キワタ）と云い日本綿より丈夫なものであるという。このことを考えて見れば、近頃読み本として出版された「椿説弓張月」（曲亭馬琴の著）とかいう本に、茄子の大木があって、階子を懸けてこれを取る図がある。考えてみれば、もっともなことだ。

すべて九州が温暖な気候であること、**二月初め頃肥後国熊本まで来ると、はや桜の花盛りで、しかも八重桜すら散る時期であった。また同月中頃、薩摩路に入ると**、もはや桜の花は影もなく、桃の花さえ散り果てて、見る花とてはなし（梨）の花、牡丹の花盛りである。池の蛙の鳴く様子もたいへん珍しく感じられた。

同国同郡桜島（鹿児島の湊にある火山の島である）、周囲は十里ばかり、村里も多く、また人家も多い。この島の形は駿河国富士山によく似ている。年中頂きから噴煙を吹き出す様子は、信州浅間山よりなお甚だしい。この島、養老年中、海中より涌出したという。和銅年中大いに荒れて、近国に火山灰が降ったとのこと、その時から今に至り、山上から噴火すること絶えず、また噴煙を吹き出すこと甚しい。その後、また安永八亥年（西暦一七七九年）大いに荒れて、同年十月一日、新たに七ツの島が涌き出し、その中の大なるは猪ノ子島と名付けられた。廻りおよそ一里ばかりあって、今は人家八軒、田畑も有る。その外に小島が六ツ有る。またこの島（桜島）の麓に温泉が多く湧き出している。右の安永年中の噴火は近来の事なので、それを見た人は珍しくない。実に天のなせる工みの大いなる事、不思議ともまた奇なりとも謂うべきであろう。

人王七代孝霊天皇五年、近江国の地が裂けて水海となった。同じ時、駿河国富士山が湧き出したという伝説も、思い比べてみれば、無きにしも非ずである。

また鹿児島風景を詠む歌に、桜島をよむ、

島に富士　こゝが清見が寺(3)なれば　洲先の方は　三保の松原

読人知らず、

ある人はこの歌を遊行上人が詠んだものというが、是非はわからない。

開門が嶽（開聞岳、標高九二二メートル）を詠む、

さつまかた　頴娃の郡の　うつぼ岳　是ぞつくしの　富士といふらん

近衛関白殿

当国頴娃の郡にある開門が嶽という高山は、世にいわゆる薩摩富士という。また沖の方より回船が目印とする高山である。鹿児島からもよく見える。**薩摩の桜島付近で五、七日間風待ちし、それから同州の山川の湊にまた八、九日間風待ちしていた**が、この島の民家の家造りを見ると、屋根は石で葺いており、その上をひし（泥）と漆喰で塗ったものである。雨が降れば屋根へ登り、タワシで洗うようである。江戸などでこのような屋根の真似をすれば、寒中

にたちまち凍ってしまい、一年限りの屋根になってしまうが、温暖な気候なのでその難はないと思われる。また、前述の檳榔の木、この辺りも甚だ多い。かの蕃椒の大木も民家に植えてある。この地は温泉が所々より湧き出ており、とりわけ浜辺に多い。砂地を掘ってその中へ入り、お湯で身体を蒸す。これは江戸の炊釜風呂と同じものか。田畑の中まで湯が湧き出している。しかし五穀はよく実るという。また三月上旬というのに、人々がみな単衣物を着ているのを見れば、肝も潰れる思いになろうというものである。以上の言説を東人（あずまびと）にかくかくと語っても、よもや実際の事とは思うまい。

ヘゴ自生群落　鹿児島県観光サイト かごしまの旅

三月二十八日という時、ようやく薩州山川の湊を出帆し、その夜六ツ半頃、屋久島へ着岸した。今日海上は静かで、あまり波もなく快く渡海できた。しかしながら唐国と琉球のほかは国土もない海原であり、波の高さは山のようであった。

大隅国馭謨郡（この）（4）屋久島、（周囲は二十五里、村数二十四ケ村）

（家数千三百四十軒、高九百三十六石八斗九升八合）

京都や大坂の流人はこの島に流された。伊豆国八丈島、そのほかの（伊豆）七島より近いのに辺鄙な所だと感じた。この島の沖十八、九里のところに硫黄島という島が有り、これは前にも言ったように俊寛僧都が流された鬼界島である。この島の伝説はあとで委しく記そう。薩摩藩に従わない以前、屋久島王と称して自立していたという。その後薩州の手に治められたということだ。

屋久島の産物

屋久杉（これはもっとも大木となる。木理が面白く、御留木（5）である。島中にあまりに多いので、それほど良材ともしていないと見える。）

ヘゴ（常緑木生シダ）　東都などでは石菖などの様に小さいものが植えてあり、これは他国にはない。皆この島の産物である。ここの山中に在るのを見ると大木があり、その葉は裏白のようで、またワラビの葉の大きなものに似てとても長い。およそ八、九間ばかりもあって、その形は蘇鉄のようだ。またこの島中では民家の木戸などに用いている。これら甚だ珍しく思われた。

主馬判官盛久の墓

平家の落人である。その頃乱を避けてこの島に逃れ来て住居したと見える。その由来は（住民が）愚民なので詳かに知ることはできない。

唐芋（また琉球芋、江戸ではさつま芋という）　たくさん作られており、それを食べている。田畑は少しながら芋畑ばかりである。またこの芋（の加工品）がいろいろ有ることは数えがたい。葛を作り、焼酎を造り、飴をつくる。このほかいろいろ加工の仕方は多い。

この島では女の童が「さんさぶし」を唄っている。その二つ、三つを記録する。（しかしその言語はあずまびとには通じないだろう。）

屋久の権現　むすぶの神よ　三度参れば　つま（妻）たもるざんざ ヲ、引
やくに下らば　わらじかうて下れ　屋久は石原小石原　ざんざ ヲ、引
さんさ　我身が　から竹ならば　折れて見しょもの　三ツ四ツに
安房川口　二か瀬がござる　思いきる瀬と　きらぬ瀬と
屋久じゃ宮の浦　種子ではあこぎ（赤尾木）（6）名所どころは　鹿児が島
あい（鮎）は瀬にすむ　鳥や木にとまる　人はなさけの下にすむ
さまは川上　わしゃ川下よ　書いて流しゃれ　恋のふみ
さまをおもへば　照る日も曇る　さへた月夜も　闇となる
屋久の八重だけ（八重岳）　約束したか　かかるやうにか　おらしらぬ
さまは野にたつ　ぬしなし花よ　折らば今折れ　ちらぬまに
さまはもみちば　かはらばかはれ　わしはかはらぬ　松の色

このほかにも（歌詞は）多いけれども、いずれも心は同じ事である。これを唄う節は何にたとえ様もない。ただ江戸では白酒をひくときの歌か、または越後の甚句にも似ている。詠歌と唐人の繰り言を「よごし」（和え物）にし

て、ごちゃごちゃとこねまぜたようである。しかしほどよく屋久島も洒落てきて、近年のはやり歌なので、その歌詞はいやしくなく、あだなる歌である。また面白いものに「山のくよう」という歌が有る。その一つ、二つ。

○ 一にゃ善次どん　二にゃ半べおどる　ヱヽ引
　　ならか長一どんに　みせほれた　ヨイヨイ

○ 屋久と種子のあいに　松のはしょかけた
　　ひのき　からかさ　くわの杖　ヨイヨイ

○ しょんかはき女は　やきもち好きじゃ
　　よんべ九ツ　けさ七ツ　ヨイヨイ

これらは何と注の付けようもない、ちんぷんかんにして、ようよう女の童の語りを聞き取り、唄う時はなお分からなかった。しかし思いのほかこの島は辺鄙でなく、決して男女の話すことが解らないという程ではない。

右の島、浦回りおよそ十二、三里にして（測量が）終った。四月十四日、安房村という所で暫く風待ちし、同月二十六日、順風になったので種子が島へ渡った。

大隅国熊毛郡種子島（周囲三十八里、）

薩摩藩の家臣種子島佐渡守の領分、

高五千二百五石七斗四升五合（家数弐千百拾五軒、外三百十五軒、

種子島佐渡守家来、）

この島も薩州の手に入る以前は、種子島王と称して自立の島であった。古えより今に至り、その子孫の名を上妻七兵衛と云い、今なお連綿と続く。この島が鉄炮の元祖であること、世の人の知るところである。

当島は人物・風俗も屋久島とそれほど変わる事はない。しかし当島は種子島佐渡守の領地であるので、屋久よりは開かれた島である。もっとも佐渡守の代替りに一度ずつ、この島を回浦する事が古例となっているという。それによって島人など生涯に薩摩藩中の人すら見る事も稀であるところに、この度我ら台命（幕府の命令）に依って来島したこと、誠に種子島開闢以来のことである。そのことから近郷近在よりあづまびとを見んとして、老若男女が押し集い、かの異国人の来朝を見るかの如く、ここの浜辺かしこの山の手に見物人が出て、我らを見る事騒々しく、またこちらから彼方を見るに、何れも男女の風俗に変わりもないけれども、ただおかしいことは、中でも七十有余の老姥が平伏し合掌して拝む様子が特に興あるように感じられたが、またこの島へあずま男が渡ったこと、古今にあると聞けば、これまた増々珍しいことと思われるのだ。これらの伝説は、この島に生れた男女は種子島よりほかに世界に国はないと思うほどの愚民ながら、律義の誠より出たものであり、ただ台命のあり難きを拝するとこそと思えば、さも有りなんと強く思う。また種子島・屋久島から遠く近く見える島は、

高島　硫黄島　黒島　口の永良部島

七ツ島、これは薩州の内であるが甚だ遠い。この島に到達すれば、琉球の島々も見えると思うほどの遠い島である。本当に七ツの島があり、それより先は段々琉球の島々が有るのみである。ただし屋久島・種子島からはこれらは見えない。右に記した島々が見えるのみである。

硫黄が島の伝説。昔、軽野大臣という人が遣唐使の役を蒙り、唐に渡った時、志那の人が彼に不言（口が利けなくなる）薬を与えて唖となし、身体に彩画し、頭に燈台のような造り物を被せてそれに火を燈し、すなわちこれを名づけて灯台鬼と称した。その子参議春衡がまた遣唐使となった。時に斉明天皇二年丙辰の年である。志那の人これを尊び重んじた。帝もなおそうであった。夜になると、（人々は）灯台鬼を（春衡の前に）出した。灯台鬼は離れた所に春衡を見て、我が子であることを知ったが、言葉に出すことが出来ない。涙を流しむせび泣いて指先を噛み切り、血書して言うことには、

我ハ元日本華京客、汝ハ是一家同姓人、為子為爺前世ノ契、隔山隔海恋情辛シ、経年流傍蓬高宿、逐日馳恩蘭菊親、形破他郷作燈鬼、争カ帰旧里寄此身、

また、歌に（記して）、

灯火の影　恥ずかしき身なれども　子を思ふや　身の哀しかりけり

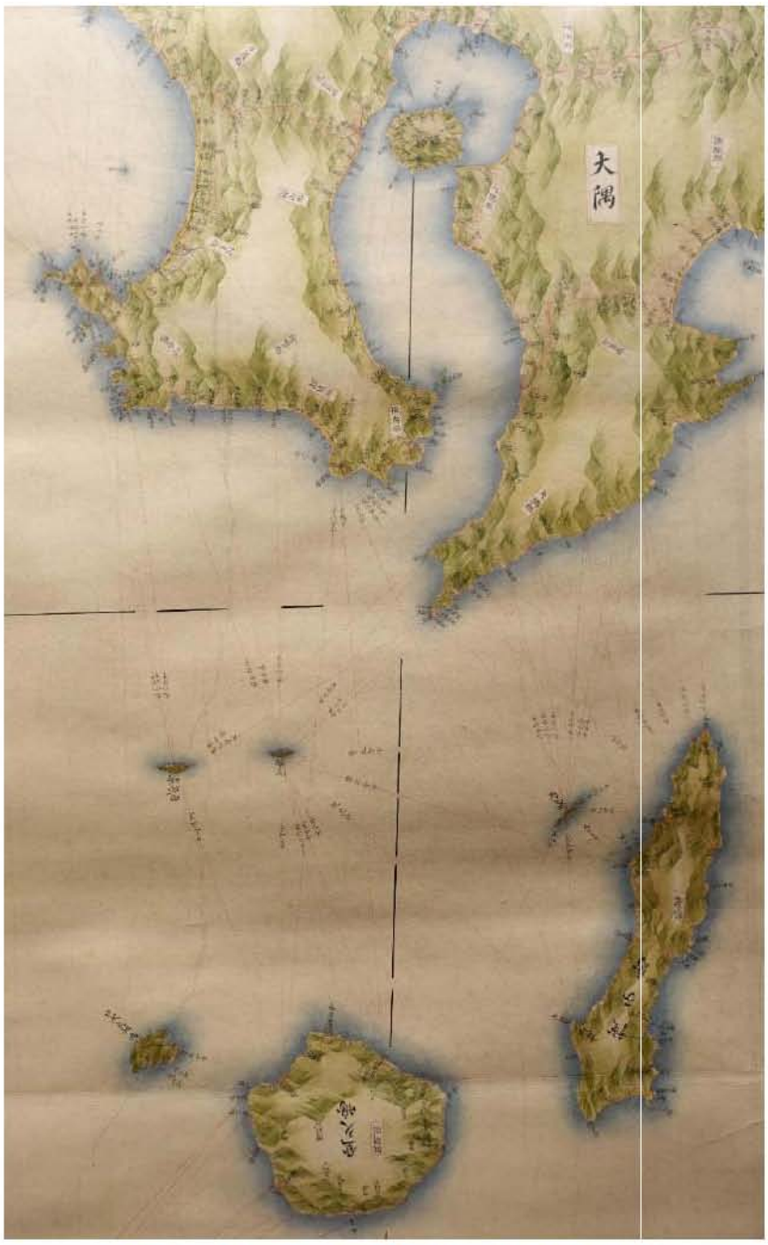
春衡これを見て我が父であることを知り、遂にこの灯台鬼を譲り受け、（同行して）日本に帰った。同日、薩州硫黄島の辺で（灯台鬼は）亡くなってしまった。それを葬ったところの地を鬼界と名付けたという。保元の頃、俊寛が流されたのもこの島である。また屋久島へも今もって京都・大坂辺の科人が流されて来るというのも、俊寛がこの島に流されてきた理由が有ることと似ている。しかしその頃は、かの島はまだ開かれていないので、人里もない有り様として、平家物語に記されている。今はよく開かれ、村も有るということであるが、海路遠く隔たっており、孤島でもあるので薩州の人すら行く者はいない。

五月二十三日まで待って順風になったので、種子島を出帆し、かの硫黄（鬼界の事）島・竹島の辺をひと走りで航行し、佐多の岬も打越え、筑紫の富士（開聞岳）も後にして、薩州山川の湊に船が着く頃、太陽も西海に没してしまったので、その夜は舟に宿泊し、翌二十四日早朝より出帆し、鹿児島へ着いた。皆おのおの再び日本の地に帰ってきた事を祝い合ったことも道理である。

（奥書）

右の書は、文化九年申、測量御用伊能勘解由の門人門谷清次郎が、かの地に付き従ってまかり越し、鹿児島へ帰着の翌二十五日に出した自宅宛ての書状に書いて寄こした見聞の記録である。

門谷清次郎は御細工所同心組頭門谷富五郎の子息で、天文方へ出役していた者である。



日本沿海輿地図（中図）九州南部　東京国立博物館蔵

三、解説と感想

『薩隅見聞之覚書』は、奥書にあるように、伊能忠敬の第八次測量の文化九年（一八一二）五月二十五日に、伊能測量隊の一員、門谷清次郎が鹿児島から江戸の自宅に出した「宅状」に添えた「（薩摩藩領）薩摩・大隅の測量時の見聞記」である。今日、私たちが閲覧できるのは、久松松平家の家臣、駒井乗邨が拾い集めた膨大な資料集『鶯宿雑記』に収載されたことによる（7）。

今回は、最初に全文の翻刻文を載せた。古文書になじみのない人でも内容はそれほどむずかしくない。測量作業に直接関する記事は一条もないが、測量日程・距離、当地の石高・家数等に関する部分を青文字にした。次に、読み物として楽しめるように、口語訳にしてみた。

内容は大隅半島最南端・佐多岬一帯の珍しい樹種、桜島の地理と風景美、薩摩半島南端の開聞岳や山川の風景と砂風呂温泉の見聞記など（ただし、大隅半島や桜島の測量は、文化七年の第七次測量の時なので、門谷は行っていない）。ここから船で屋久島と種子島に渡り、現地で見た産物（屋久杉、ヘゴ、唐芋とその副産物など）、大まかな両島の歴史、当時世に知られた説話などが続く。初めて訪ねた地のことを書き送るには、自然や植物など目にした物・ことから書き始めるしかないのが分かる。

測量と風待ちで屋久、種子に相当日数滞在したとはいえ、特産品や説話の情報をどのようにして入手したのか、興味が湧く。おそらく、島に乗り込む前に、藩の役人を通じて「何と何を調べて準備しておけ」と伝達が届いていたのではないか（8）。桜島の噴火の歴史、島唄の長い歌詞や、両島に近い喜界島の俊寛僧都、硫黄島の「燈台鬼」などの説話が詳しく紹介されていることから、測量隊を迎える側の、事前の準備調査を真っ先に感じたことだった。

面白いのは、種子島の島民が初めて東（江戸）から来た測量隊一行を見物しようと群をなし

た様子を興味深く記していること。薩摩藩の役人の顔さえ見たことがない島民が、測量作業よりも、隊員の容貌や仕草、言葉遣いに関心を持ったことは十分に頷けるし、おそらく日本全国、同じような風景が見られたのでは？

念のため、「薩隅見聞之覚書」（**青文字**）に出ている文化九年の月日を時系列で並べ、『伊能忠敬測量日記』と比較すると、以下のようになる。なぜか三月二十八日と五月二十三日、二十四日の記述に一日のずれがある。

二月初旬　肥後国熊本に至る
二月十六日　肥後国熊本城下着
二月中頃　薩摩路に入る
二月二十六日　薩摩入国
三月三日　鹿児島城下着
三月十四日　山川湊着
三月二十七日　山川湊出帆、屋久島安房村川湊へ着
三月廿八日　山川湊を出帆、其の夜六ツ半時頃、屋久島へ着岸
四月十四日　屋久島測量を終え、安房村に逗留（二十五日まで）
四月廿六日　（屋久島安房村から）種子島へわたる
四月二十六日　種子島に至るも逆風にあい、島間村へ上陸
五月朔日　種子島の測量開始
五月二十二日　種子島赤尾木出帆、山川湊着
五月廿三日　種子島を出帆し…山川の湊に着く
五月二十三日　山川湊出船、鹿児島城下着
五月廿四日　早朝（山川湊）より出帆し鹿児島へ着
五月二十六日　江戸への書状を託す
五月二十七日　鹿児島城下出立

四、本資料を役立てるとすれば？

資料には、今から二百年以上前の薩隅の自然、風土が具体的に記されている。熊本、佐多岬、山川と江戸の樹木や桜花の開花時期を今と比べれば、昨今の「温暖化の流れ」が浮かび上がるか？　蘇鉄、シダ、ビンロウやサボテンは今も一帯に生き残っているか？　屋久島の「さんさ節」は今も唄われているか、その歌詞はどのように変わっているか？など、筆者でもいくつか気になる。どなたかチャレンジを！

【注】

(1)大隅半島を測量した第七次測量の『測量日記』(文化七年五月三十日条)に、「山崎村佐多岬」とある。佐多岬が辺津加村に属していたとあるのは門谷の誤解であろう。玉造功「失われた風景」(本誌九十五号) 38ページの地図で「辺津加村」や「佐多岬」の位置を確認できる。

(2) 自作の和歌などをへりくだって言うときなどに使う。

(3) 清見寺は、今も静岡市清水区清見寺町にある臨済宗妙心寺派の寺院。当時、三保の松原とともに、富士山眺望の名所であったようだ。

(4)「駅謨郡」という郡名は『測量日記』にも記載があり、屋久島は当時、大隅国に属していたことがわかる。

(5)「留め木」には「伐採を禁じられた木」の意味がある。

(6) 赤尾木は種子島の中心地である西之表にあり、役所が置かれていた集落である。

(7) 玉造功会員の紹介文（本誌九十六号）から引用。門谷は忠敬の内弟子で、忠敬の供侍として測天量地作業に従事。推算の要員でもあった。絵が得意で地図仕立てにも参加した。

(8) 御用測量隊を迎える現地の事前準備などについては平田稔著「御用測量　熊本県資料集」(平成二十九年発行、たまきな出版舎) に詳しい。また大谷亮吉『伊能忠敬』(一五五～一五七頁) によれば、九州測量の際、沿道の村役人に命じて提出させた参考事項として、石高・家数等のほか、名所・旧跡・名産が挙がっている。

【追記】

「門谷清次郎覚書」に紹介されている屋久島の民謡について、屋久島町立屋久島歴史民俗資料館（職員黒飛淳さん・竹之内隆さん）におうかがいしたところ、「さんさ節」・「山の供養」とも今は歌われていないとのことであった。ただ、屋久島の民謡は、他の地域から入った旋律に屋久島独自の歌詞を付けたものが多いこと、また、山仕事に従事した人々の唄ったケースが多いのではないかとのことであった。

（室山　孝）

江戸府内第一次測量の記録（六）

― 文化十二年二月十日の『日記』―

玉造 功

前日の九日の測量は、筋違御門・上野山下を経て下谷道を千住宿へと向かうものであったが、十日の測量は、図1に朱線で加筆したように、浅草御門を経て奥州街道（日光街道）を千住宿へと向うルートであった。

二月十日　（本）町二町目四辻昨日残し　本印始奥州街道測量　此所ハ（東海道　木曽街道　奥州街道）追分也　本町□□目　左横町（左四丁目　右三丁目）

本町四町目（左右横町　惣名大横町という）　本町一町目（左右横町　前之側）　大伝馬町二町目（右横町）　通旅籠町（左右横町）

（又左右横町　大門通りという）　通油町（左右横町　通油町通り）　緑橋（渡長五間）　通塩町（左右横町　通塩町という）　横山町（一町目　左横町）

同二町目（右横町　左横町）　横山町三町目（右横町）　右両国橋通三ツ辻（ヤ印を残す）　一十二町二十一間　馬喰町四丁目

（左馬喰町本通り　右ニ自身番）　浅草御門（左二丁ばかりより　柳原土手通り）　冠木御門（浅草橋渡　長十二間）　是より浅草茅町一丁目

十日の測量は本町二町目の日本橋通りと本町通りが交差する（本）印からであった。本町は徳川家康が江戸で最初に地割を行った町人地で、江戸で初めて造られた大本（おおもと）の町ということから本町という。西は本町一丁目から東は横山町三丁目までを本町通りと呼び、日本橋通り（北は神田須田町から南は新橋まで）とともに、呉服商や薬種問屋などが店を連ねる繁華な通りとして知られていた。

図2の南側の日本橋川沿いの河岸地に伊能三郎右衛門家の江戸店二店が店を構えていた。小網町一丁目には忠敬の娘の稲と婿養子の盛右衛門に任せた店があり、同じく伊勢町には加納屋新兵衛が預かる伊能店が位置した。図3を見ると、手前の伊勢町堀に面して蔵が建ち並び、船荷を桟橋から直接蔵に入れることが出来るようになっている。

北西部の冨山町、後に松枝町には時計師大野弥五郎（規定）と弥三郎（規行）の親子がいた。彼らは幕府暦局出入りの職人で、忠敬の測量器具を製作した。渡辺慎の『量地伝習録』でも、小方位盤・象限儀等は内神田松枝町に住む時計師大野弥三郎に造らせるのがよいと紹介している。

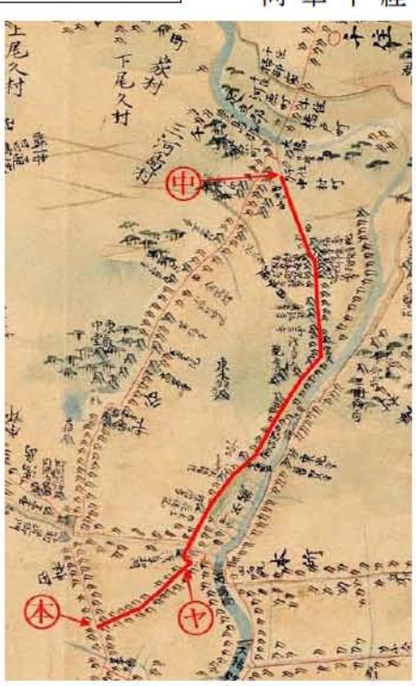


図1『大日本沿海輿地図』大図90号に加筆

図２『江戸実測図（南）』に加筆

図２東側の浜町の山伏井戸は伊能茂左衛門景良（楫取魚彦）が第二の人生を送っていた場所である。魚彦は忠敬より二十二歳年長であったが、第一の人生と第二の人生を全うした点で忠敬の手本となった人物である。魚彦は伊能七家の一つ茂左衛門家の当主であり、名主であり、俳諧、絵画、国学を学び、忠敬が入婿して二年後の明和元（１７６４）年に隠居して山伏井戸の賀茂真淵の家の近くに居を構えた。彼は国学者・歌人として賀茂真淵の四天王と呼ばれ、『古言梯』という歴史的仮名遣いの辞書はロングセラーとなった。忠敬も出府した際には魚彦宅に立ち寄っている。

村松町には忠敬の妻ミチの叔父にあたる伊能三郎右衛門家第七代当主の伊能昌雄の隠宅があった。昌雄も四十一歳で隠居し、村松町で能囃子、茶道、俳諧などの遊芸三昧の日々を送った。

・**本町□□目**…虫損箇所は「三町」。本町三町目は各種問屋、特に薬種問屋が店を連ねた。

・**大伝馬町**…馬込勘解由が家康に道中伝馬役を命ぜられ、名主を兼帯してこの地に屋敷があったことに由来する。道中伝馬役は江戸府内から品川・板橋・千住・内藤新宿までの幕府公用の人馬を提供し、それにともなう先触をつかさどった。月の前半は大伝馬町、後半を南伝馬町が担当した。第三次測量を前にした忠敬は、自分の先触と休泊触の二通を「先触　伊能勘解由」と記した箱に入れて、大伝馬町の馬込平八（九代目の馬込勘解由惟賢は平八と称した）方に届け、請取を受領して『測量日記』に記録した。

・**馬喰町**…関東郡代の役宅もあったため、公事宿が多かった。公事宿は訴訟関係者の宿泊だけでなく、訴訟手続きの一端を担っていた。文化八（１８１１）年に佐原河岸の河岸問屋株をめぐる訴訟が始まり、忠敬の嫡男で伊能三郎右衛門家当主の景敬が村方後見として対応を迫られた。その際、佐原村の公事宿が馬喰町三丁目の近江屋善兵衛であった。

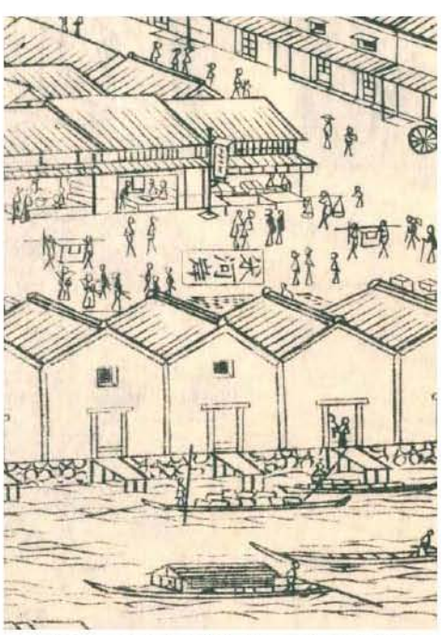
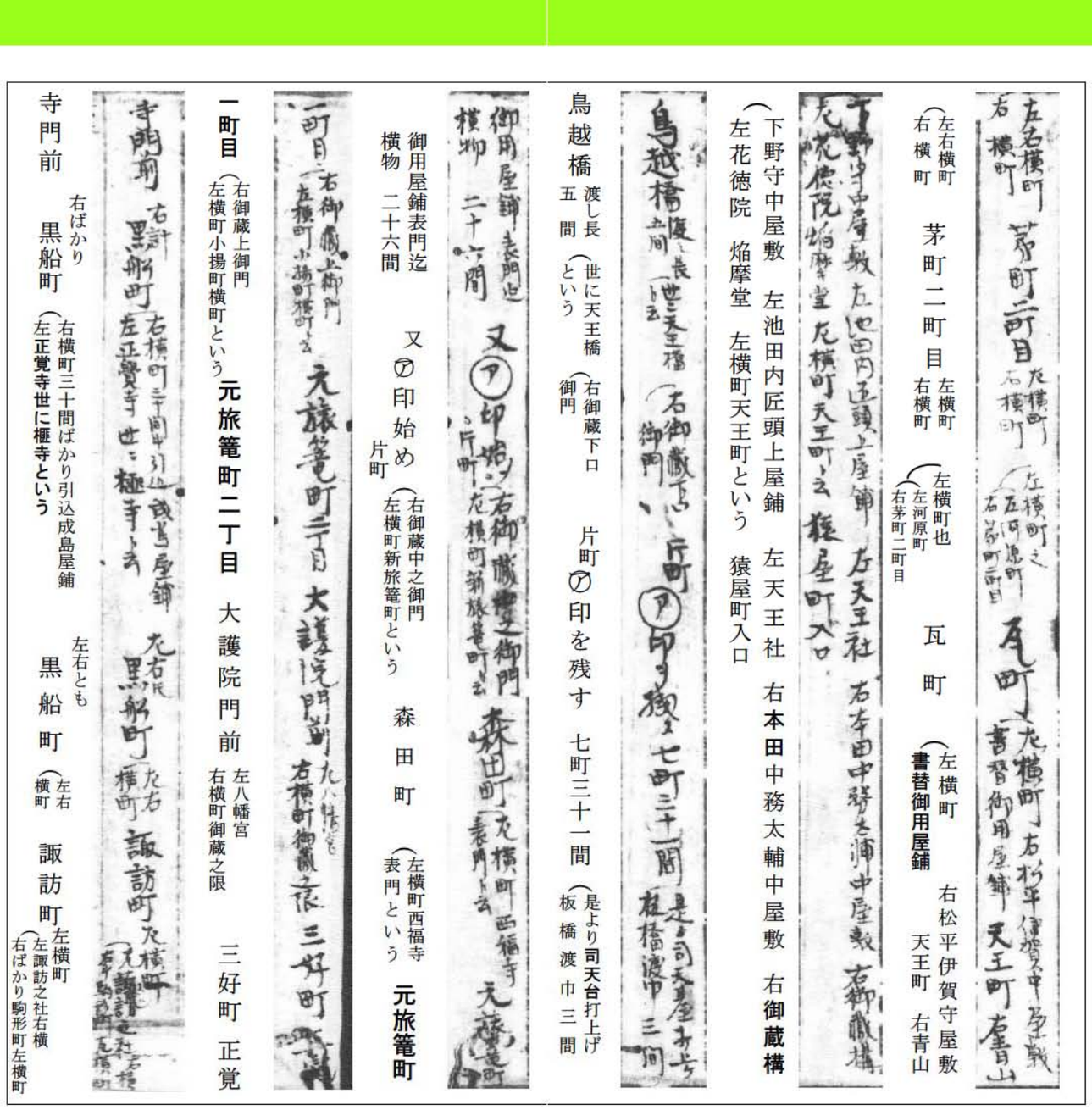


図３　伊勢町河岸通『江戸名所図会』



測量隊は浅草橋を渡り北上を続けた。浅草橋から神田川が隅田川に合流する柳橋にかけては船宿や料理茶屋が集まっていた。茅町・河原町の町家を過ぎると広大な御米蔵が姿を現す。『御府内備考』には、浅草橋より北へ達する大路の東側で御構の内二万七千九百坪あり、里俗ではこの大路を蔵前通と称していると記されている。図4のように一番堀から八番堀までの堀割があり、船が直接米蔵に着岸できた。日本各地の幕領の年貢米が四、五十万石前後納められ、幕臣に俸禄米として支給された。

・**書替御用屋鋪**：勘定奉行支配のもとで書替奉行（切米手形改）二名とその下僚が蔵米手形の確認事務を担当していた。忠敬は文化元（1804）年九月十日に

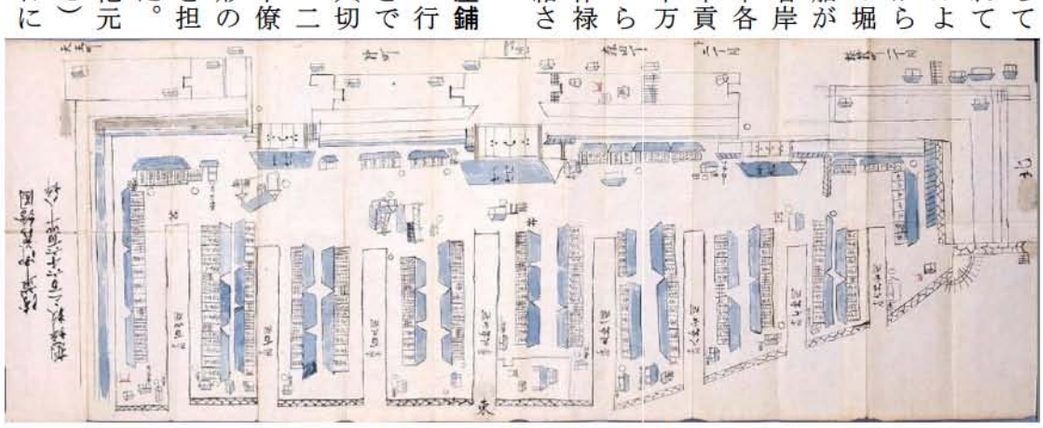


図4 浅草御蔵絵図 江戸東京博物館蔵

十人扶持の幕臣となったので、始めて扶持米を受け取ることになった。その際に忠敬が書替奉行の中嶋宇右衛門と安井平十郎に提出した文書の控え「請取申御扶持方之事」が国宝となっている。別稿の「国宝紹介」を参照されたい。

・**本田中務太輔中屋敷**…本多の誤記。三河岡崎藩本多中務太輔忠顕の中屋敷。

・**司天台**…『御府内備考』では、頌暦調所また測量所、里俗で天文台と呼ぶと記し、測量日記などでは暦局と呼んでいる。荻原哲夫「浅草天文台の詳細図を発見」（会報48号）によると約三千坪の敷地中央に長円形の測量台（図6）が築かれていた。『寛政暦書』によると、台高は三丈（約9m）で上に簡天儀、象限儀を置くと記されている。また南側と西側に各五十段の石段があった。測量台を囲むように天文方の居宅兼役宅（高橋御役所などと呼ぶ）や、御先手組などから下役として出役している御家人の居宅や長屋が配置されていた。

国宝の文書・記録類316の「手附伊能勘ヶ由家作引移之儀ニ付尚又奉願候書付」という文書によると、高橋景保は文化五（1808）～七（1810）年と忠敬の黒江町の家作を測量所内の空地に引き移したいと願い出ているが、実現しなかった。忠敬の嫡孫の忠誨は文政六（1823）年に足立左内（信頭）の役宅の下屋という名目で暦局内に六畳と三畳の家を建て、年に三ヶ月ほど星図を作り、残りは佐原に戻り天体観測を行った。

・**元旅籠町一町目、二丁目**…蔵前通西側の各町内には幕臣の俸禄米の受取と売却、また高利貸でもあった札差や米問屋が集まっていた。

図5『江戸府内図（南）』に加筆

忠敬の扶持米を扱った札差が旅籠町二丁目に店を構えた溜屋庄助である。溜屋が毎月発行した「覚（○月分御扶持米払代金差上）」という文書が十九通残っており国宝に指定されている。溜屋庄助が文化七（1810）年に廃業したあとは、元旅籠一町目の板倉屋助次郎が札差を務め、同様に三十二通が国宝になっている。別稿の「国宝紹介」を参照されたい。

・**正覚寺世に榧（かや）寺という**…境内に榧の大木が茂っており、火災から寺を守ったという逸話から、江戸時代には「榧寺」と呼ばれていた。昭和二十七（1952）年には正式名称も「榧寺」に変更した。

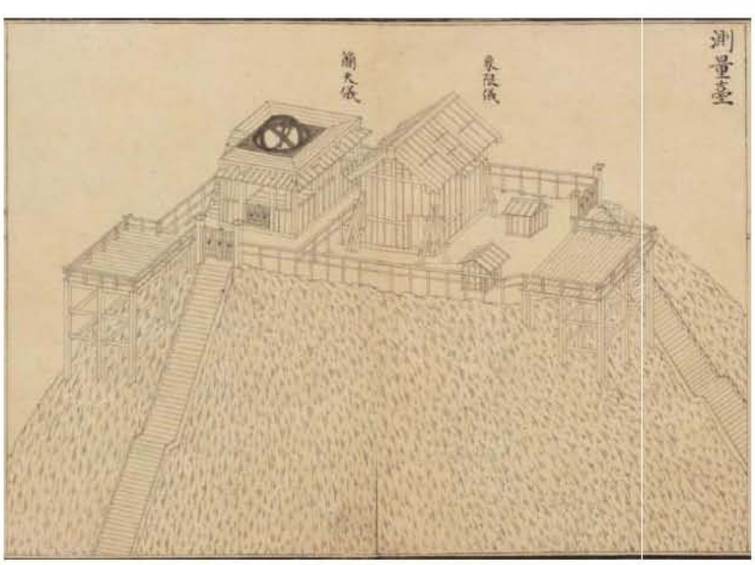
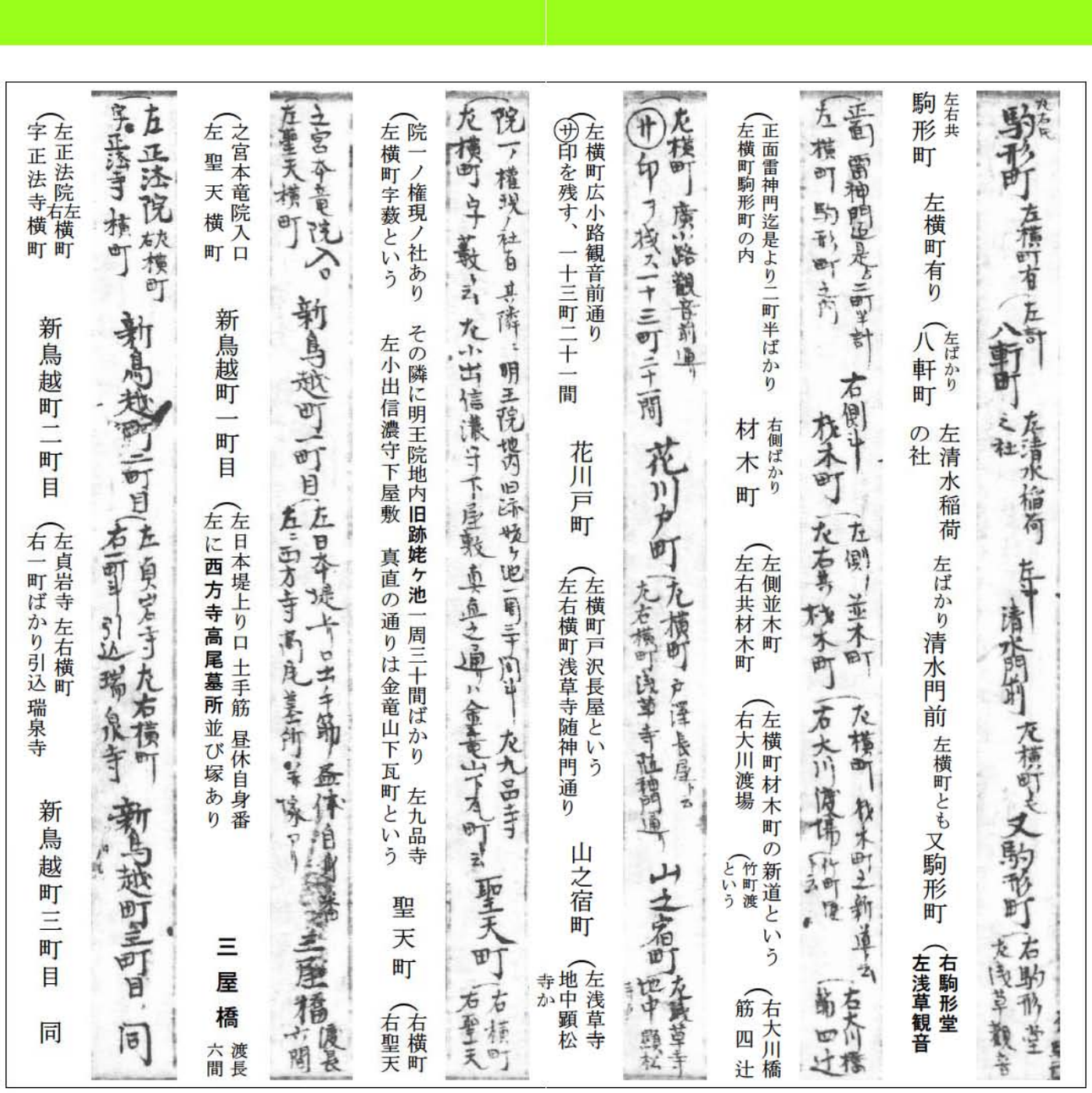


図6　測量台　『寛政暦書』巻十九



『日記』に「右駒形堂、左浅草観音」とあるように、駒形堂から左側に進むと正面の浅草寺雷門（『日記』では雷神門）まで二町半の参道が続く。図8にも雷門らしきものが描かれている。雷門前は広小路になっており、図7に描かれたように江戸でも最も繁華な地であった。駒形堂は浅草寺の本尊の観音像を隅田川から拾い上げて最初に祀られた地である。この日の測量隊は浅草寺には

図7 浅草雷門前 亀屋 広重 高名会亭尽

向かわず、大川橋から花川戸町へと進んだ。大川橋は隅田川に架橋された五つの橋としては最後の安永三年に架橋され吾妻橋とも呼ばれていた。奥州街道は花川戸町、山宿町を経たところで隅田川を離れて追分を左手に進む。聖天町と隅田川の間には図9の待乳山（真土山ともいう）聖天宮があり、北に筑波山、西に富士山を望む眺望佳絶の地として知られていた。

図9　鶴岡蘆水『東都隅田川両岸一覧』

・**旧跡姥ヶ池**　…　『日記』には「明王院地内旧跡姥ヶ池」と、図8では「妙音院姥ヶ池」と記し、寺院名が異なっている。幕府に提出した『浅草寺書上　弐』では「妙音院」に「姥ヶ池広サ百坪」とあるのでこちらが正式な名称である。往古、旅人を泊めては殺して池に捨てた鬼婆伝説で知られていたが、十方庵敬順は『遊歴雑記』に「今は下水の溜の如し」と記し、『日記』も「旧跡」とことわっている。

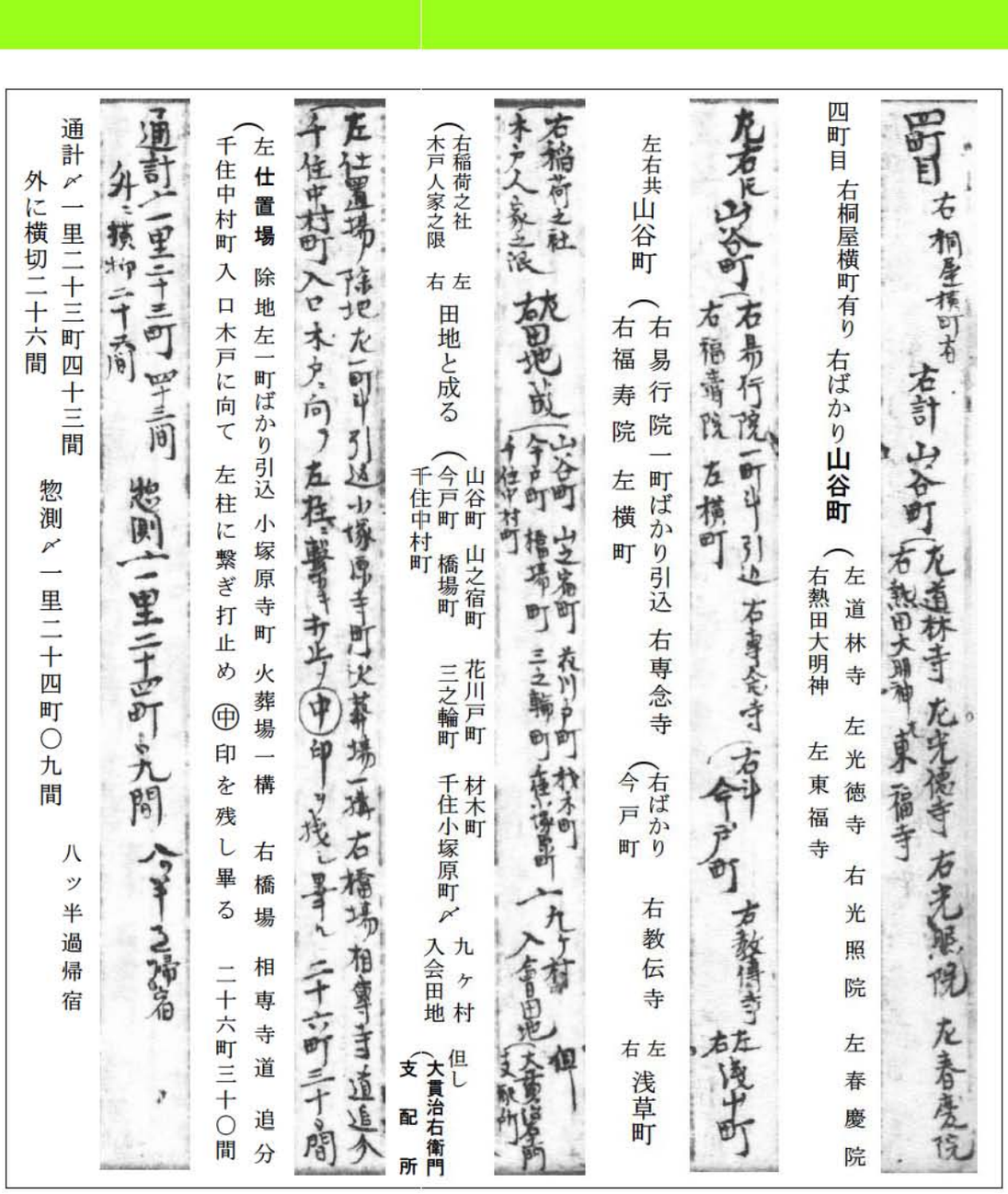
・**西方寺高尾墓所**　…　『浅草寺社書上　甲四』所収の西方寺が提出した書上には、開基を刑死者や吉原の遊女を弔ったとされる道哲としている。『遊歴雑記』では好事家が歌舞伎の先代萩などによって、欺いて近頃建てたものだろうと断じている。現在は豊島区西巣鴨に移転。

・**三屋橋**　…　図8では山谷ハシとしている。山谷堀を渡ると新鳥越一町目から四町目と町場が続くが周りは田園地帯に変わっていく。

新鳥越一町目に八百善、二町目に八百半という料亭があり、特に八百善は文人墨客や将軍家も訪れたという。大田蜀山人(南畝)の狂歌に「詩は詩仏、書は米庵に狂歌おれ、芸者小万に料理八百善」と読み込まれたことでも名高い。

る。また本尊などの次に「転誉妙身信女、三浦屋傾城高尾」について触れ、辞世の句や高尾塚などについて書き記している。もっとも

図8『江戸府内図(南)』に加筆



奥州街道は山谷町、山谷浅草町を北上するが途中で左折すると日本堤を横切って新吉原の大門に至る。町場が途切れると奥州街道の両側は『日記』のとおり左右田地となる。小塚原の刑場と火葬場を過ぎると奥州街道最初の宿場である千住宿の南端の中村町に着く。測量隊は図11の入口の左側の木戸に測線を繋ぎこの日の測量を終えた。八ッ半過ぎというから三時過ぎに帰宿となった。

・**山谷町** … 「山谷」という地名について、『新編武蔵風土記稿』では「元より平衍（へいえん）の地ならば山谷など名つくべき所にあらず」として、三野、三谷、三屋などの説を紹介している。

・**日本堤と山谷堀** … 『新編武蔵風土記稿』では、日本堤について「荒川の大堤なり。南の方聖天町より、北の方三之輪に至る。…日本国の諸大名集りて築給う江戸水除の土手なればかく名付けし」とあるように、荒川（隅田川）の洪水対策のものであった。但し地名の由来については諸説ありわからないとしている。この堤はおよそ八丁あることから「土手八丁」「八丁縄手」などとも呼ばれた。

この土手の北側が山谷堀で、石神井用水から隅田川へと流れた。吉原の遊郭が明暦の大火後に浅草寺裏手に移転し新吉原となると、日本堤も山谷堀も吉原通いで賑わうことになった。

・**大貫治右衛門支配所** … 幕府代官の大貫治右衛門が支配を担当する幕府直轄地。大貫治右衛門は武蔵、下総、相模の幕領を担当。

・**仕置場** … 小塚原は鈴ヶ森と並ぶ刑場である。『新編武蔵風土記稿』では「間口六十間餘、奥行三十間餘、本所回向院の持地なり」と記す。この地で明和八（1771）年に杉田玄白、前野良沢、中川淳庵が刑死者の腑分けに立ち会い、オランダ語の解剖学書『ターヘル・アナトミア』と比較しながら観察した。『蘭学事始』によると、その帰路、医術の基本とすべき人体の真形も知らずに医業を務めてきたことを「面目なき次第なり」と嘆息し、『ターヘル・アナトミア』の翻訳を決意したという。『解体新書』への道は小塚原刑場から始まった。

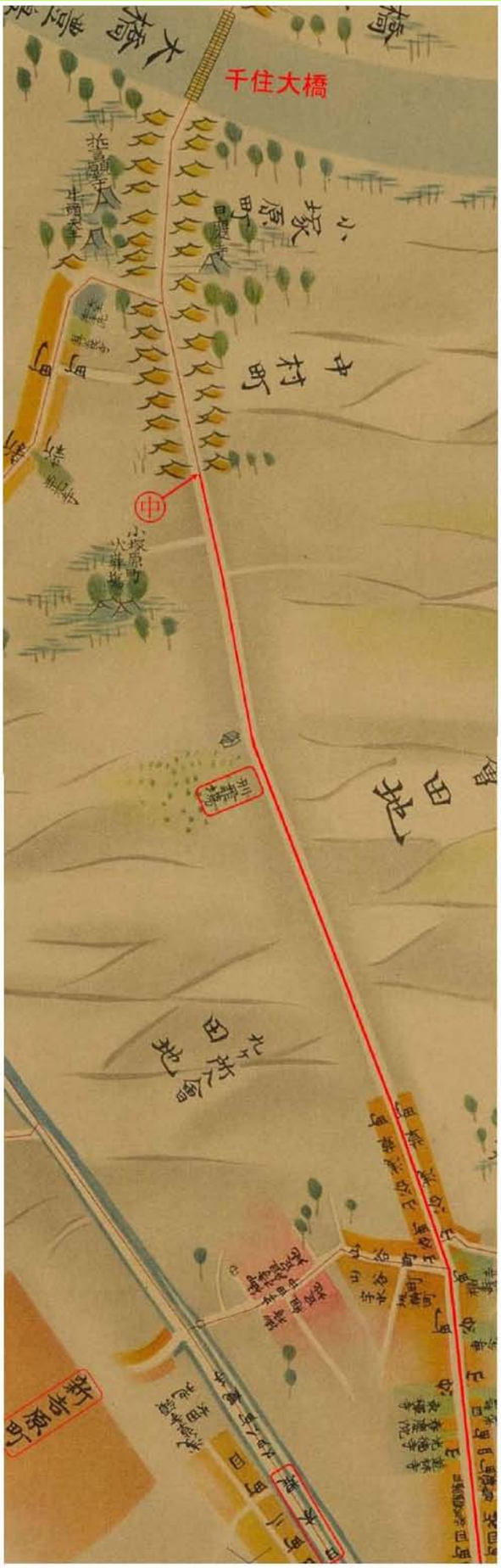


図１０『江戸府内図（北）』に加筆

図１１　千住宿中村町入口木戸
『日光道中分間延絵図』に加筆

古地図コレクションによる。

・『江戸府内図（北）』は『東京市史稿市街篇　附図第三』による。

・図1、3、6、7、9は国会図書館デジタルコレクションによる。

・図11は東京国立博物館所蔵である。

【参考史料】画像を公開しているウェブサイト

国立国会図書館デジタルコレクション（国会）

国立公文書館デジタルアーカイブ（公文書）

東京国立博物館デジタルコンテンツ（東博）

・『御府内備考』（国会）

・『新編武蔵風土記稿』（公文書）

・『町方書上』『寺社書上』（国会）

・『札差株帳』（国会）

・『遊歴雑記』（公文書）　平凡社東洋文庫

・『武鑑』（文化十一年・十三年）（国会）

・『江戸名所図会』（国会）　ちくま学芸文庫

・『日光道中分間延絵図』（東博）

・『蘭学事始』　岩波文庫

【参考文献】

・『楫取魚彦資料集』岩沢和夫　たけしま出版

・『江戸幕府の御家人』戸森麻衣子　東京堂出版

・『旗本・御家人の就職事情』山本英貴　吉川弘文館

・『江戸の旗本事典』小川恭一　角川ソフィア文庫

・『江戸の高利貸』北原進　角川ソフィア文庫

・『江戸・町づくし稿下巻』岸井良衛　青蛙房

・『江戸名所図会を読む』川田壽　東京堂出版

・『江戸庶民の四季』西山松之助　岩波書店

・『江戸の町かど』伊藤好一　平凡社

・『都市 江戸に生きる』吉田伸之　岩波新書

【図版の出典】

・『日記』の図版は伊能忠敬記念館に架蔵されている写真帳による。無断流用禁止。

・『江戸実測図（南）』は国土地理院ウェブサイトの

土佐の伊能測量５　土佐清水―宿毛編

福田　仁

土佐（現高知県）の伊能測量ルートを自転車でたどるシリーズも、いよいよ最終回。ぐるっと足摺岬を回り、離島・沖の島に渡った後、旧土佐・伊予の国界に向かう。

【土佐清水市】

下茅（しものかや）浦（幡多郡）は、大火が相次いだことを受けて、燃えやすい「茅」の字を避けて、下ノ加江（しものかえ）と表記されるようになった。伊能図には「下茅」とある。

平成３０年１月５日付高知新聞「伊能忠敬没後２００年特集」に、伊能隊の土佐での宿泊先一覧を掲載した。これを受けた読者からの情報提供の一つが、下ノ加江の脇宿となった「飴屋嘉兵衛」のご子孫に関するものだった。

同地区ではつい最近まで、苗字よりも「屋号」で呼び合うのが一般的だった。この集落で「飴屋」といえば、旧家である森家を指す。

森綾子さんはこの下ノ加江に嫁入りして以来、「飴屋の嫁さん」と呼ばれてきた。近くの墓所を案内して頂くと、少なくとも3基に「飴屋」の文字を確認できた。墓石群のうち伊能隊宿泊の３８年後に死去した「二代・森嘉兵衛」は、年代的にみても、忠敬の「測量日記」に記された「脇宿・飴屋嘉兵衛」と同一人物だろう。綾子さんは「まさか私の先祖が…」と驚かれると同時に、「本当に誇りに思う。墓を大事に守り伝えたい」と感じ入った様子だった。

伊能隊は下ノ加江から南下して窪津浦へ。本陣となった「海蔵院」は、小高い丘の上にある。かつての施設がどうだったかは分からないが、今は小さな無人のお堂だ。古びたお地蔵さんの台座には「鯨供養」「へんろみち」などと刻まれている。「文化九」の文字もあるから、伊能測量と同時代の建立だ。

窪津浦の本陣「海蔵院」にあるお地蔵さん
（土佐清水市）

清水浦は天然の良港。忠敬が記した「測量日記」に「上湊なり。深八間」とある。「蔵掛山へ登て山嶋を測」と記された鞍掛山は、清水漁港に面した市街地から間近に望むことができる。

三崎浦では、脇宿として医師・泥谷（ひじや）孝達の屋敷が選ばれている。これもありがたいことに、紙面に目を通したご子孫の泥谷和利さんから連絡があり、三崎集落の外れにある孝達の屋敷跡を案内して頂いた。屋敷跡から谷を隔てた南に、海を見下ろす墓所がある。孝達の墓も、医師らしくなかなか立派だった。和利さんは「孝達は忠敬と縁があったように幼少期、聞いた記憶がありま

清水漁港から、忠敬が登った鞍掛山を望む
（土佐清水市）

三崎浦の脇宿のあるじ、泥谷孝達の墓石
（土佐清水市）

す。ただ家に資料も残っておらず、詳細は分かりませんでした」という。

測量日記に、「竜串の浜の景色異岩を一覧す」とある。竜串の奇岩を含む「土佐清水ジオパーク」は令和3年、「日本ジオパーク」に認定され、その価値が大いに見直された。

【大津浦・わが先祖の地】

以下、文化5（1808）年6月8日の測量日記より引用する。

夫より乗船、四ツ頃に大津浦へ着。本陣、大津郷浦庄屋代、上岡弁之丞。仮亭主、俵屋鉄之丞。別宿、粟津屋直兵衛。暦局より高知届用状（五月十五日相認）七ツ頃に届。

私の母は上岡姓で、その祖先は、この大津・上岡庄屋から江戸期に分家した。ちなみにタレントの上岡龍太郎氏、そのおいに当たるお笑いコンビ「ミキ」の昂生さん、亜生さん兄弟も、この上岡庄屋の系譜につながっている。

上岡庄屋の屋敷が撤去された跡地には、一族の墓石群が移設されている。つまり今の墓所が、伊能隊宿泊の地だ。夜間には天測も行われたと知れば、遠い子孫の一人としてはなおうれしい。太平洋に面して開けた、小さな谷間の集落。庄屋屋敷跡は特に見通しが悪いため、海の近くまで出て天測したと思われる。

伊能隊を受け入れた庄屋代・上岡弁之丞は、墓石によると文化5年10月、38歳の若さで亡くなっている。伊能隊を受け入れた、わずか4カ月後。仮に病死とすれば、一家は跡取り候補の看病などで大変な時期に、伊能隊を受け入れたことになる。「仮亭主」を立てたのも、そうした事情からかもしれない。

大津浦の本陣、上岡弁之丞の屋敷跡
（土佐清水市）

この上岡庄屋の江戸期を中心とした文書90点の存在が近年、明らかになり、今は私の手元にある。資料の一つ「当家代々年譜控（ひかえ）」には慶長から幕末まで、藩からの賞罰歴を含む代々の事績が記されている。「宿毛・大島浦に琉球船が漂着した際、御用を首尾良く務め、御褒美の銀を頂いた」「江戸・増上寺の修復に寸志を差し出し、御挨拶を頂いた」といった具合。しかしこの「年譜」を含め、伊能測量への協力について言及した文書は、少なくとも現存しない。庄屋サイド、また藩サイドからみて「重要ではあるが単発、一過性で、数多くある事務事業の一つ」といった位置づけだったのだろうか。庄屋第13代の上岡昭夫さん（平成30年死去）に生前お聞きしたところ、同家にいくつかの伝承が伝わる中で、伊能測量に関連したものは、やはり皆無だったとのこと。

上岡家文書の一つに「先年、大地震大潮之時、先祖書流失」とある。これは「宝永地震」（1707年）の津波を指すとみられる。宝永地震は平成23年の東日本大震災に次ぐ日本最大級の地震。土佐での死者は1844人に達し、少なからぬ沿岸の村が津波で「亡所」となった。

この宝永地震が、伊能測量のほぼ100年前。伊能隊の全国測量が実現した背景には、社会を揺るがす大災害が直近になかったことも挙げられるだろう。

【大月町】

土佐清水市大津を過ぎて大月町に入ると、それまで後方にちらちらと見えていた足摺半島が、山影に入って見えなくなる。

隊員の一人、柴山伝左衛門の日記に「ホウノ岬と言、大難所を経て」とある。これは現在の朴崎（ほおざき）だろう。この大難所の写真を掲載しておく。さらに西へ進んだ古満目（こまめ）の漁村は、忠敬の測量日記には「能湊なり。しかし当国の端なれば通船も少、（略）繁盛も少し」とある。「海岸絶壁、難測量」とも。

柏島は、伊能隊が沖の島へ渡航する拠点となった。これが最短コース（約6キロ）だからだ。伊能図（大図）で柏島に引かれた朱の測線を見れば、

南岸は険しいので、海岸線から少し離れた稜線上を通っている。その稜線の形状は、現地ではっきり視認できる。本陣となった法蓮寺も確認できた。

大難所「ほおの崎」（朴崎）
左手奥に沖の島（大月町）

【鵜来島・沖の島】

高知県に有人離島は数少ないが、そのうち最大の島が宿毛市・沖の島。今日、この島に渡る唯一の定期航路が、市営フェリー。同市片島港から、船内に自転車を積み、約２５キロ南西の沖の島を目指した。およそ1時間半の船旅だ。

途中、鵜来島（うぐるしま）に着岸する。鵜来島は当時、伊予領。伊能隊は6月２６日、伊予の深浦からこの島へ渡航している。当時は「卯来島」と表記されたようだ。

当時、沖の島は一つの島が土佐・伊予に2分されていた。忠敬ら本隊は土佐側の弘瀬集落、支隊は伊予側の母島（もしま）集落に宿泊している。

柏島の遠景（大月町）
伊能隊は、島の左手に見える稜線を測量

沖の島から西の姫島を望む（宿毛市）
遠くには九州の山並み

いずれも急斜面に要塞のように石垣が築かれ、狭い路地が入り組んだ集落だ。坂部らの支隊が泊まった徳法寺を、母島集落で確認した。

【宿毛市】

宿毛での本陣は大庄屋・小野久治右衛門。大庄屋の屋敷跡を示す石碑と看板の存在が、ネット検索の結果、分かった。

沖の島で坂部隊が泊まった母島・徳法寺
（宿毛市）

宿毛村の本陣、小野大庄屋の屋敷跡を示す碑
（宿毛市）

測量日記によると忠敬一行は6月25日朝、藻津（もくず）を出発して「土州・予州国界に至る」。土佐の役人らはここで伊能隊を送り出し、伊予の役人らが一行を出迎えた。

この脇本海岸は、現在も高知県・愛媛県の県境である。砂浜の真ん中あたりに堤防の切れ目があり、海岸への入り口となっている。その先にある岩が、正確な境界である「傍示碆（はえ）」だ。遠く宿毛湾の向こうに、沖の島が見える。伊能測量をしのびながらの計約720キロの自転車旅が、ここで幕を閉じた。

土佐測量の終点となった国界の「傍示碆」
（宿毛市）

古い墓石が人知れずやぶに埋もれたり、「墓じまい」などで次々と整理・撤去されているのも、気がかりだ。「測量日記」に記載された宿泊先亭主の名前を、墓石で確認できる事例は少なからずあった。その時代、その人物がたしかに存在した、まぎれもない証しだ。多くの場合、墓所は集落を外れた山中にある。そこまで案内してくれる地元の方がいて、初めて調査が成り立つのだが、それもいつまで可能だろう。

新聞紙面で地域の読者と双方向のやりとりをしながら企画を進め、子孫の方々から情報提供を頂けたのは、これがぎりぎりのタイミングだったのかもしれない。

筆者は歴史、地理いずれも門外漢だ。ただ、祖先が伊能測量に協力していた事実が分かり、いわゆる「ファミリーヒストリー」の延長線上で、にわかに伊能測量に関心を抱いた。当初は休日の趣味としての「訪ね歩き」を考えていた。それが「没後200年」のタイミングで、職場の理解もあり、高知新聞の年間企画の一つとして成立した。ほかの取材も抱えているとはいえ、業務で取り組むとなれば、進展のスピードが格段に違う。もっとも毎月締め切りに終われ、文字通り「自転車操業」の1年となった。

その結果、既存の何かをくつがえす大きな発見があったわけではない。この会誌への投稿を含め、地方在住の一人として、小さな一石を投じることができていれば…と願うばかりである。

（高知新聞編集委員）

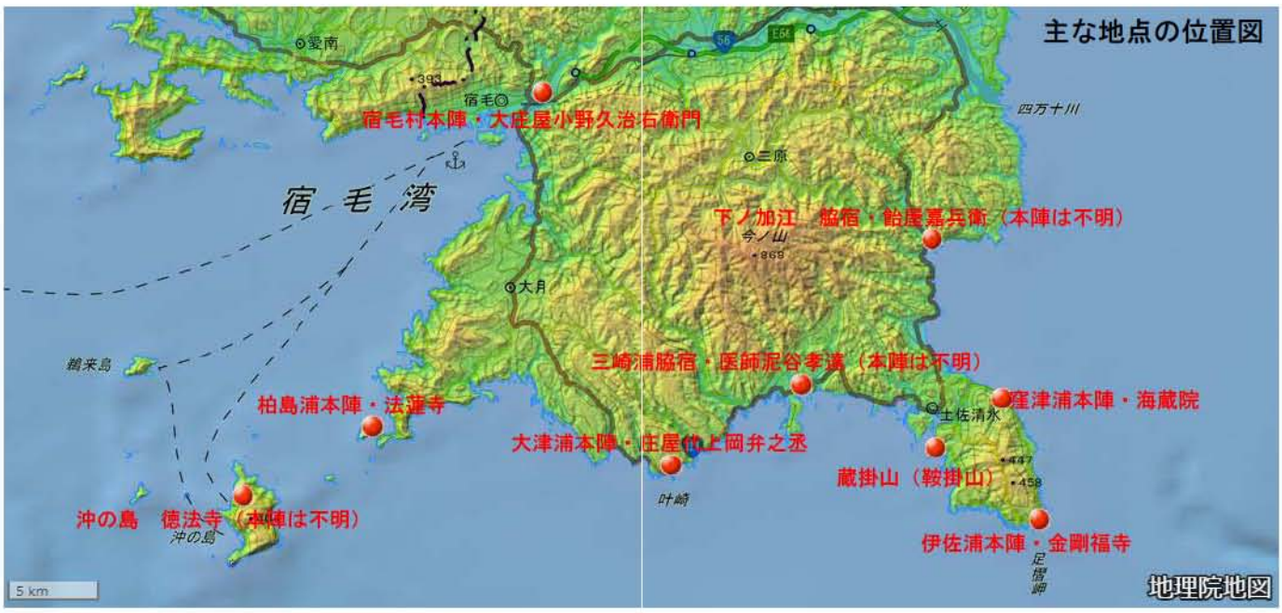
【終わりに】

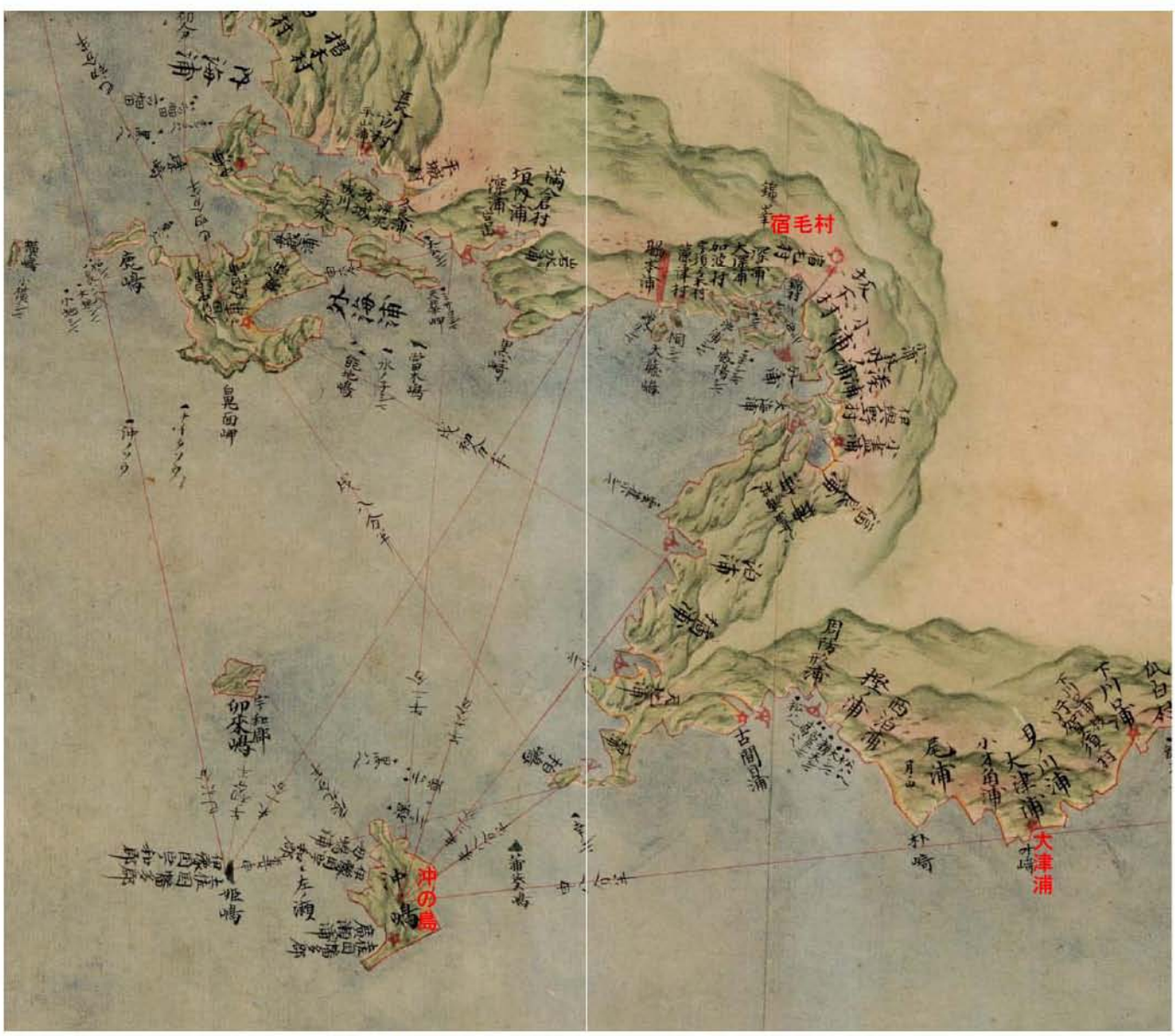
沿岸の各集落でも過疎・高齢化が進み、土地の伝承や歴史に通じた古老を探し出すのは、予想よりもはるかに難しかった。10年、20年前であれば、さほどの苦労もなかったかと思う。

主な地点の経緯度

場所	伊能隊が計測した緯度※	緯度	経度
下ノ加江　脇宿・飴屋嘉兵衛（本陣は不明）	32度52分半	32度51分55.62秒	132度57分19.25秒
窪津浦本陣・海蔵院	32度48分	32度47分10.70秒	132度59分46.61秒
伊佐浦本陣・金剛福寺	32度44分	32度43分33.63秒	133度01分06.74秒
蔵掛山（鞍掛山）	――	32度45分43.41秒	132度57分27.10秒
三崎浦脇宿・医師泥谷孝達（本陣は不明）	32度48分	32度47分34.61秒	132度52分42.68秒
大津浦本陣・庄屋代上岡弁之丞	32度46分	32度45分11.32秒	132度48分04.22秒
柏島浦本陣・法蓮寺	――	32度46分19.63秒	132度37分33.93秒
沖の島（宇和島領）　徳法寺（本陣は不明）	32度43分半	32度44分17.82秒	132度33分00.28秒
宿毛村本陣・大庄屋小野久治右衛門	32度57分	32度56分15.76秒	132度43分36.64秒

※大日本沿海実測録による





徳島大学附属図書館所蔵「大日本沿海図稿（南海）」

（徳島大学附属図書館館ホームページ「貴重資料高精細デジタルアーカイブ」で閲覧可能）

URL：https://www.lib.tokushima-u.ac.jp/~archive/z/z013.html

伊能図に描かれた現存十二天守（三）

松本城（長野県松本市）

河崎　倫代

一九四九年（昭和二十四）一月二十六日、法隆寺金堂の火災により金堂壁画が焼損した。これをきっかけに翌年「文化財保護法」が発効されると、まず姫路城が、続いて松本、彦根、犬山の三城が国宝に指定された。この「国宝四城」の時代が長く続いたが、二〇一五年七月、六三年ぶりに松江城が加わり「国宝五城」となった。今回はこのうち、松本城と姫路城を紹介する。

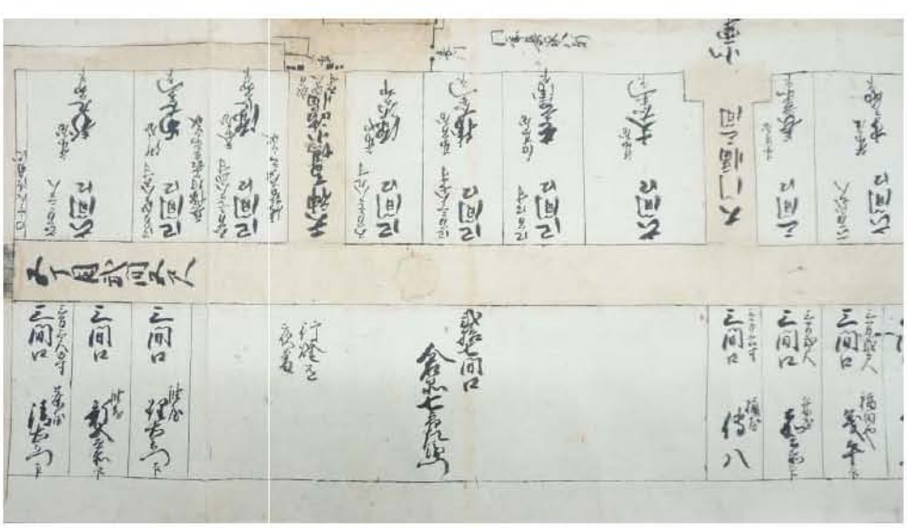
伊能図に描かれた城は、伊能隊が城下の街路から見上げて実写したものではないが、『測量日記』の記述や実際に訪れて撮った写真などと共に、今回もちょっとした「旅」気分を味わっていただければ幸いである。

『伊能図大全』（河出書房新社）第３巻　117p

伊能忠敬一行が松本城下に入ったのは、第八次測量（九州二次測量）の帰路、文化十一年四月二十五日（一八一四年六月十三日）だった。忠敬最後の測量行は九一四日にも及んだ。種子島・屋久島・五島列島の島々、中国地方の内陸部を測量。中部地方に入って高山・古川（岐阜県）まで測量して反転。標高一六七二ｍの野麦峠（測量隊の最高到達地点）を越えて中山道に出て、さらに塩尻から北上して松本城下に至った。

『測量日記』には「止宿本町倉品（倉科）七郎左衛門、家作よし。此夜星測。当城主より我等（忠敬）、今泉、門谷へ贈物あり。」とある。善光寺道、糸魚川（いといがわ）街道、野麦街道が集まる本町にあった倉科家は本陣と問屋を兼務し、「元禄九年本町町並絵図面」（松本城管理事務所蔵）によると、間口二七間（約四九ｍ）の長大な店舗を構えていた。明治五年（一八七二）七月、ここに「松本郵便取扱所」が設置されたことから、現在は跡地（松本市深志二丁目）に「郵便局発祥の地」の記念碑が建っている。

倉科家跡地に設置された
「郵便局発祥の地」記念碑



間口27間（約49ｍ）の倉品七郎左衛門家
「元禄九年本町町並絵図面」（松本城蔵）

『測量日記』には、この日宿所に挨拶に来た人物二〇数名の役職と名前が記されている。相変わらず多忙な忠敬であったことがうかがえる。

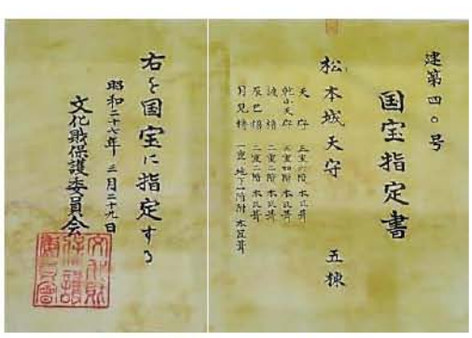
ところで、松本盆地の中央には「糸魚川―静岡構造線」が通っており、いわゆるフォッサマグナの西端にあたる。さらに、西に北アルプス、東に美ヶ原高原を望む地形、女鳥羽川と薄川からなる複合扇状地に貯えられた豊かな水が、自然にろ過されて市中の至るところに湧き出ている。このことが、平城（ひらじろ）でありながらも内堀、外堀、総堀の三重の水堀に守られた堅固な防御を誇る松本城を可能にした。

現智の井戸
毎分約 230 リットルの水が湧き出ていて、現在でも多くの人々が訪れ、飲料水として利用している

測量隊一行に贈物をした当時の城主は戸田光年だが、天守を築き城郭・城下町を整備したのは、天正十八年（一五九〇）に入封した石川勝正とその子康長である。その後、小笠原氏、戸田氏、松平氏、堀田氏、水野氏と城主は変わり、享保十一年（一七二六）から明治維新までは再度入封した戸田氏が城主を勤めた。

私が松本城を訪れたのは、二〇一九年四月のことだった。本丸御殿跡の広場の向こうに乾小天守、渡櫓、大天守、辰巳附櫓、月見櫓が横一列に並ぶ壮観な景色が待っていた。朱色の廻縁・高欄をめぐらした月見櫓以外は、壁の下部に取り付けた漆塗りの下見板が城全体を黒く見せている。壁の下部は黒漆塗りの下見板、上部は白漆喰仕上げのシックな装いとなっている。大天守は五層六階、各階には二の丸御殿跡発掘調査で出土した遺物や鉄砲、甲冑などが丁寧な解説とともに展示されている。階段についても、「四階の床と天井の間は四メートル弱あります。この高さの所へ、柱と柱一つ分の間に階段をかけるので松本城では最も急な六一度の階段です。」との解説があり、急こう配の階段を納得しながら慎重に登った。

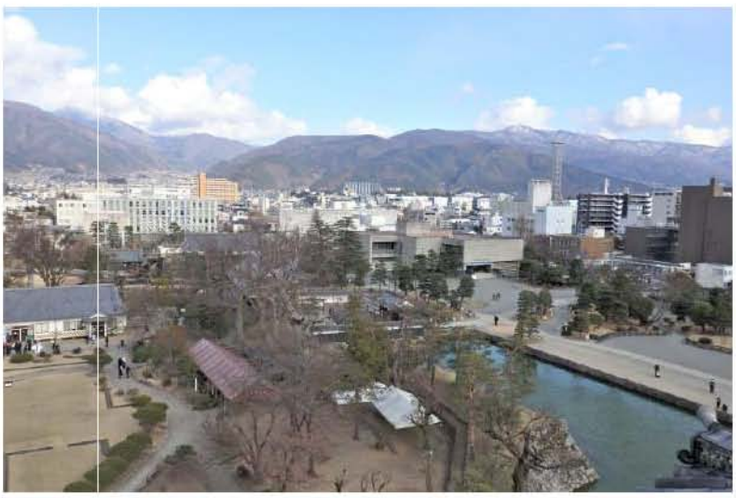
国宝　松本城



国宝指定書　松本城天守

市川量造のレリーフ

中でも取り分け興味深かったのは、初めて見る「国宝指定書（写）」だった。また、「天守櫓拝借懇願書」と「建言書」（ともに複製）には、明治維新期に松本城が二三五両あまり（米価比較で約四〇〇万円）で落札され、取り壊しの危機にあったが、下横田町の副戸長、市川量造が天守を守るため五回にわたって松本城天守で博覧会を開き、その収益と寄附金で天



天守西窓からの眺望

守を買い戻したと解説されていた。市川量造のレリーフ像が本丸庭園入口にある。これらの展示を通して、時代の波に翻弄されながらも「現存十二天守」としてあり続けてきた偶然と必然の歴史が垣間見えたように思えた。

もう一点、大天守で発見したものを紹介したい。それは、松本市民が誇る「旧開智学校」である。大天守の北窓から何気なく外を眺めていて気づいた。コンパクトカメラの望遠機能を最大限に使って撮ったのがこの写真である。明治九年に完成した旧開智学校は、地元の大工棟梁立石清重が設計した、洋風とも和風ともいえない不思議な建築で「擬洋風建築」と呼ばれ、文明開化の時代を象徴するとされる。私が松本を訪れたおよそ半年後に「国宝」に指定された。現地を訪れる時間が無かったので、天守からの眺めはラッキーな出会いだった。午後から訪れた松本城だったが、曇り空が晴れてきて、城の正面で撮った空と西側から見た空が、同じ日に撮った写真とは思えないのも不思議だった。

国宝「松本城」の大天守から見えた国宝「旧開智学校」

伊能忠敬とはまったく関係無いのだが、松本市立美術館も楽しみにしていた。そこには、同市出身の草間彌生さん(現在九三歳)の作品群があり、美術館外観も前庭のオブジェも、草間ワールドの外装を施した自販機・空き缶回収ボックスも、すべてが楽しめた。

松本市立美術館前庭と美術館壁面が、色彩豊かな草間ワールド。
館内の自動販売機や空き缶回収ポストも。

【参考文献】
・山下景子著『現存12天守』幻冬舎新書　二〇一一年
・西ヶ谷恭弘『日本の城 ポケット図鑑』主婦の友社　一九九五年
・男の隠れ家ベストシリーズ『古地図で読み解く城下町の秘密』三栄　二〇二一年

姫路城（兵庫県姫路市）

室山　孝

『測量日記』によれば、伊能忠敬は姫路城下に、第五次測量（畿内・中国測量）の文化二年（一八〇五）十月十六日に一泊、第七次測量（九州第一次測量）往路の文化六年十一月十五日と復路の文化八年三月三日に各一泊、第八次測量（九州第二次測量）往路の文化九年正月六日に一泊と、復路の文化十年十二月二十九日より翌十一年一月三日まで越年して五泊している。

しかし実は忠敬、隠居する前年、第一次測量より七年前の寛政五年（一七九三）、津宮村の名主久保木（窪木）清淵らとともに伊勢参りと関西旅行の折、播磨国まで足を伸ばし姫路に宿泊していた。この時の様子を、忠敬の「旅行記」で見ておこう。

伊能中図 第６図（姫路）
『伊能図大全』（河出書房新社）第５巻　183p

一行は当初一〇人、安永年中に結んだ伊勢参り「太々講」の連衆（の半分）であった。三月四日、江戸を出立。東海道沿いの名所・旧跡、神社・仏閣を訪ね、三月二十三日から二十九日まで伊勢の外宮・内宮に参詣、また「神楽修行」を体験した。その後、奈良・吉野・高野山・和歌浦・堺・大坂・京都を巡り、さらに大坂から西、須磨・明石に遊んだ。四月二十九日、忠敬ら七人は加古川河口の高砂（高砂市）から讃岐金比羅参りを目論み乗船したが、強い南風で海が荒れ、逆波で船は西の酒越湊（赤穂市坂越町）まで流され、三人が京都に帰っている。

金比羅行きを諦めた忠敬らは、翌三十日、姫路の北にある書写山円教寺に参詣し、下って姫路城下に着いた。福井町（姫路市福居町）の井筒屋太兵衛方に宿泊している。

この「旅行記」で特に興味深いのは、忠敬はおそらく携帯用の磁石・方位盤と象限儀を持参しており、一四カ所で方位を測定、二カ所で「北極出地度」（緯度）を測定していたことである。独学ながらすでに天文・測量家としての下地を備えていた。ちなみに四月三十日、酒越から小豆島〃巳六分五厘〃、姫路書写山から淡路島〃辰二分〃と小豆島〃午八分〃と方位測定値が記されている。

このことに関して、玉造功氏が本誌九十四号で紹介している国宝「携帯用磁石」（器具類番号５０）が、寛政五年の旅行で忠敬が使用したものである可能性は極めて高いと思われる。掲載の写真をよく見ると、方位盤を備えた磁石が箱の蓋に据えられ、また箱の中の木製部材を組み立てると、簡便な象限儀として使用できそうである。磁石の目盛りは五厘単位で、「旅行記」の記載と一致している。

一方、志の輔師匠の落語を原作として最近出版された小説『大河への道』を読むと、忠敬の友人で津宮村の「綿貫善右衛門」（久保木清淵がモデルであろう）の話として、伊勢参りに出発の際、江戸のある店に立ち寄り、忠敬が前もって注文していた象限儀と小さな羅針盤を購入し、旅行中至る所で山や島をこれらで測定していたとしている。

モデルとなった清淵はこの伊勢参り旅行に漢文の「西遊日記」を残しており、その読み下しの抜粋が出版されているが、出発地江戸での話は残念ながら中略されていて事実は確認できない。

さて、五月一日、忠敬は姫路城下を出立、西国街道を大坂へ戻るが、途中、御着村（姫路市御着町）から一里中ほどの「まめ坂」途中にある「阿弥陀が池」を見る。ここは姫路城天守が見える限

界で、「姫路城替之節、天守を見て名残をおしむゆへ、涙が池とも云」とあり、「城替」で姫路を去る武家が天守を遠望し、涙を流すほど名残を惜しんだので「涙が池」ともいうとある。のちの『測量日記』では姫路城に全く触れていないので、貴重な記述である。

現存する姫路城の姿は、慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原合戦のあとに入城した池田輝政に始まる。翌年から築城にかかり、五層六階の大天守が落成したのは同十四年であった。「白鷺城」とも呼ばれる城の姿はこの時からである。しかし大坂の陣のあと元和三年（一六一七）、三代池田光政は鳥取へ移封となり、代わって入城した本多忠政が三の丸・西の丸を整備。さらに寛永十六年（一六三九）松平忠明に交替。以後、榊原氏、再び松平氏、また本多氏、次いで再び榊原氏、三度目の松平氏と城主がめまぐるしく交替し、寛延二年（一七四九）酒井忠恭が入城以来、幕末まで酒井氏が姫路城主であった。

「涙が池」の故事は、「城替」で姫路を去る人々それぞれの、忘れがたい天守への思いがあったことを物語る。

【飾万津御泊十八日御献立】

御座付　三宝熨斗蛸

本膳　皿　いり酒　わさび　汁　松露　香物　御飯
鯉糸作り　くだき柚
うどんせん〔せん切りカ〕
海そうめん
菓子椀　とり　平皿　巻玉子　焼物　金頭
三ツ葉　長いも　ひゞき焼
しゐ茸

御夜食

朝漬〔膳〕　汁　かぶら　ちょく　たゝき午房　御飯
摺ごま　山枡〔椒〕ふり
皿　さけ　引而　平皿　薄くず
ミそ漬　鴨・土佐麩・木たけ

さて幕府直轄事業として最初の第五次測量では、『測量日記』によれば、文化二年十月十五日、忠敬らは姫路の外港にあたる飾万津（しかまつ）（姫路市飾磨区）に宿泊。宿所は大年寄三木太一郎方であった。夜は晴天で天文測量を行った。この飾万津宿所での測量隊の食事献立が、愛媛県岩城島（上島町）の伝存文書に残っている。「飾万津御泊十八日御献立」とあるのは十五日の誤記であり、また「朝漬」とあるのは「朝膳」の誤記であろう（表）。

十六日、飾万津からほぼ直線的に城下まで伸びる街道を測量しながら、姫路城下竪町（姫路市立町）に到着。宿所は本陣三木与惣五郎方であった。一二年前に宿泊した福井町（福居町）は姫路城の東側にあったが、竪町（立町）は南側、現在のJR姫路駅前から城へ真っ直ぐ伸びる大通りの西側に立地する。この夜は曇っていたが、晴れ間に天測を行った。翌日、測量隊は飾万津へ戻って海辺を西へ進み、室津（たつの市）から姫路藩の船で家島諸島を測量している。

第七次測量の往路、文化六年十一月十五日の宿所も竪町の本陣三木与三五郎（与惣五郎と同一人物であろう）方であったが、復路の同八年三月三日は、やや城に近い福中町（姫路市福中町）の井上庄兵衛方に替わり、以後、宿所はここであった。

第七次測量の復路、測量隊は岡山城下より内陸の街道を無測量で姫路を目指し、文化八年三月二日、書写山円教寺下の東坂本村に宿泊（中屋文右衛門方・大門屋弥左衛門方・見付屋源兵衛方に分宿）、夜は晴天で天測した。東坂本村は書写山の東の参道登り口にあるが、寛政五年に参詣のときは、西の参道登り口にある西坂本村で中食をとった。

翌三日朝、東坂本村から円教寺本堂（摩尼殿）前まで測量、また輪番僧三人の案内で参詣した。伊能中図に、瀬戸内沿岸や家島諸島から書写山（標高三七一㍍）への方位線が描かれているが、寛政五年、忠敬は書写山から淡路島と小豆島の方位を測定していた（前述）。書写山円教寺（天台宗）は「西の比叡山」とも称される平安時代創建の古刹で、『測量日記』に「朱印高八百三十三石余、寺院三十坊、東坂本村一村残らず御朱印」とある。

その日、東坂本村から測量しながら姫路城下に向かい、途中、広嶺山（廣峯神社）、増井山瑞巌寺（随願寺）（伊能大図に「増住山」とあるのは誤記）に立寄り、南下して北から城下町に入り、福中町の宿所井上庄兵衛方に到着。この日は大曇天のため天測できなかった。

伊能大図 第141号（姫路）
『伊能図大全』（河出書房新社）第３巻
130p

第八次測量では復路に五連泊し越年しているが、『測量日記』に詳しい記事はなく、文化十年十二月二十九日は「手分と出会、一同一宿」とあり、姫路藩役人と町方役人の挨拶を受け、天測したこと、晦日は「逗留、越年」、年が明けて正月朔日も「越年逗留」、二日は江戸への書状を町年寄に預け、姫路藩役人と町方役人の年頭挨拶を受けたこと、三日は「両日も逗留」とあり、各所の町役人・村役人等から挨拶を受けたことのみである。

なお、城下宿所での天測は、文化二年十月十六日（堅町）と同十年十二月二十九日（福中町）の二回行われているが、伊能図にある☆印の位置は、おそらく福中町であろう。

姫路市は昭和二十年（一九四五）、二度の空襲で城下町の多くの町並みを焼失したが、大天守など城の建造物は奇跡的に戦災を免れた。城郭建築の最高傑作として国宝となり、また世界文化遺産にも登録されており、昭和と平成の二度の大改修によって、美しい姿を今に伝えている。

三の丸から見た大天守と西小天守

本丸入口の菱の門

はの門へ向かう通路から見た大天守西面

筆者が平成の大改修後に初めて姫路城を訪れたのは、昨年四国旅行の帰路、桜の開花から間もない穏やかな晴天に恵まれた日であった。時間が限られていて町を歩くゆとりはなく、JR姫路駅前から天守は見えたが、往復タクシーを使った。

内堀にかかる橋を渡り、桜門から三の丸に入ると、正面に白く輝く大天守の姿があった。大天守の高さは四六・三メートル、天守の建つ姫山は標高四五・六メートルというから、総じて九二メートル近い高さである。また、このまぶしい白さは、白漆喰が壁全面と屋根瓦の目地すべてに塗り込まれているためであり、説明によると三〇年位の周期で塗り替えられるとのことだった。菱の門から二ノ丸方面に入ると、「はの門」に続く細い登りの通路は、正面に大天守の西面を仰ぎ、通路右手の白壁に穿たれた△や□の狭間も見どころである。薄暗い「にの門」をくぐると天守台となる。天守閣の内部は四国で見てきた城より遙かにゆとりのある広さで、階段の昇降も楽だった。最上階からの眺めは素晴らしく、姫路の町の緑の豊かさを実感できた。

大天守最上階南側から見た三の丸と姫路市街

【参考文献】

・香取五郎解読『寛政五年癸丑三月　伊勢参宮関西旅行記　伊能忠敬記』（私家版）一九九一年

・窪木清渕「西遊日記」『史料京都見聞記第二巻紀行Ⅱ』法蔵館、一九九一年

・『兵庫県の地名Ⅱ』平凡社、一九九九年

・伊藤栄子「岩城島の伊能測量文書（二）」『伊能忠敬研究』三十二号、二〇〇三年

・『伊能忠敬　日本列島を測る―忠敬没後二〇〇年（後編）』伊能忠敬研究会、二〇一八年

・玉造功「国宝紹介（器具類番号５０）携帯用磁石」『伊能忠敬研究』九十四号、二〇二一年

・立川志の輔原作『大河への道』（河出文庫）河出書房新社、二〇二二年

国宝紹介　幕臣としての伊能忠敬

玉造　功

御家人となった伊能忠敬

伊能忠敬は文化元年九月十日に江戸城内の焼火之間に召し出され、若年寄堀田摂津守から、その方儀これまで国々海辺測量御用並びに地図骨折りあい勤め候。以後も右筋御用仰せ付けられ候につき、十人扶持下し置かれ、小普請組仰せ付けらるという幕臣登用辞令が伝達された。翌十一日に小普請組支配の佐藤修理（信顕）の組に属し、天文方高橋作左衛門（至時）の手附・手伝として出役することを命ぜられた。

小普請組に属し天文方に出役するというのはどういうことか。当時、高橋至時ら五名の天文方は暦の編纂や改暦、そのための天文観測に従事し、儒者、医師、歌学方、神道方などと同様に専門家として幕府御用を務めることで、旗本として処遇されていた。そのため支配下に与力や同心などが配置されているわけではなく、坂部貞兵衛、市野金助、青木勝次郎、柴山傳左衛門が御先手組の同心から、永井甚左衛門が大御番組の同心から、下河辺政五郎が西丸御書院番組（後に大御番組）の同心から、それぞれ天文方高橋至時や景保の下役として出役することで業務が成り立っていた。

一方、小普請組は十組あり、旗本の一部や御家人で、無役のものを管理した。各組の支配は役高三千石の旗本が勤め、その下僚として組頭一名と世話役三名が補佐した。忠敬は天文方に出役を命ぜられたので無役ではない。それにもかかわらず、身分支配のために小普請組に編入され、そこから出役するかたちとなった。

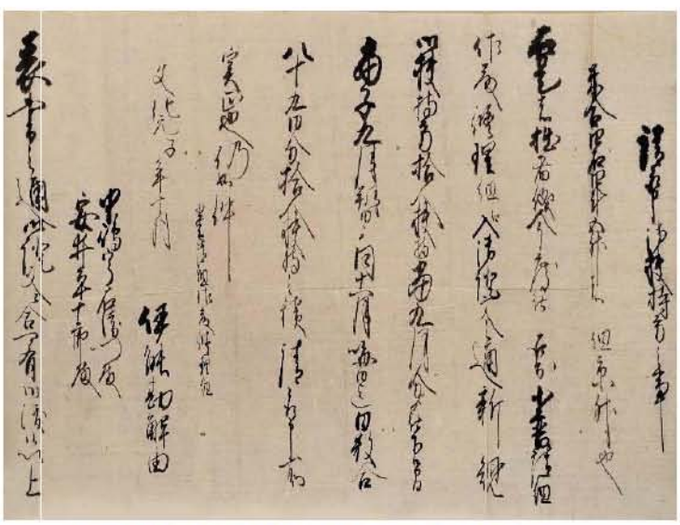


図１　「請取申御扶持方之事」（文書・記録類 373）
伊能忠敬記念館所蔵　無断流用禁止

〈図１の書き下し文〉

請取り申す御扶持方の事
米合せて四石四斗五升といえり　但し京升なり
右是は拙者儀今度召し出され、小普請組
佐藤修理組へ入り、御証文の通り、新規
御扶持方十人扶持、当九月分より下され候間、
当子九月朔日より同十一月晦日まで日数合せて
八十九日分、十人扶持の積り請け取り申す所
実正也、仍って件の如し
小普請組佐藤修理組
文化元子年十月　伊能勘解由
中嶋宇右衛門殿
安井平十郎殿
表書の通り御証文に合せ、御渡し有るべく候、以上

戸森麻衣子（２０２１）によると、江戸幕府諸役における上司と部下の関係は、職掌面での監督である「役支配」、家や身分に関わる支配である「身分支配」の二つの側面があったという。文化二年二月に高橋景保から「測量諸事申渡」（国宝：文書・記録類２７２）を伝達されたように、測量御用については天文方高橋景保の役支配のもとで指示命令を受けた。一方で、第五次測量における内弟子たちの不始末に対して、忠敬自身の監督責任についての差控（謹慎）伺の書付を提出した先は、天文方ではなく小普請組組頭であった。『江戸日記』の文化三年十二月一七日の記事によると、小普請組支配の佐藤修理から、老中の牧野備前守忠精に伺った結論として「差控に及ばず」との申し渡しがあった。このように身分に関わる様々な届や願が組頭を通して小普請組の支配に提出された。

初めての給料

○「請取申御扶持方之事」（文書・記録類３７３）

忠敬は「測量御用並び地図骨折」という技能を活用するために御家人として処遇されたこともあって、高橋至時の百俵五人扶持、市野金助の三十俵二人扶持のような禄高＋扶持という一般的な幕臣の俸禄ではなく、十人扶持という付加給部分だけが支給されるという特殊なものであった。他には御医師や朝鮮種人参製法御用などに例がある。

新規に扶持米を受け取ることになった忠敬が、始めて切米手形改（書替奉行）の中嶋宇右衛門と安井平十郎に提出した扶持米請取申請文書の控えが図１の文書である。

一人扶持は、一日玄米五合として年間一石八斗、俵に直して米五俵として計算された。俵に直して計算すると、高橋至時は年間百二十五俵、忠敬は五十俵、市野金助は四十俵となる。禄米は年棒のため、春（二月）に四分の一、夏（五月）に四分の一、冬（十月）に二分の一の三回に分けて支給された。閏月があると十二ヶ月分の禄米で十三ヶ月間生活することになる。一方、扶持米は毎月支給され閏月にも支給された。

忠敬はこの扶持米請取手形で合計四石四斗五升を請求しているが、その積算根拠は次の通りである。忠敬は十人扶持であるので一日に米五升となる。文化元年は九月が小の月で二十九日、十月、十一月は大の月で三十日のため、この三ヶ月では八十九日となる。五升×八十九日ということで四石四斗五升を請求した。忠敬の場合は最初の扶持米だけは三ヶ月分をまとめて請求している。

この文書に小普請組支配が「表書の通り御証文に合せ、御渡し有るべく候、以上」と裏書きして確認印を押し、浅草御米蔵の書替奉行のもとでの確認をへて、御米蔵の管理や蔵米支給を担当する御蔵奉行のもとで扶持米が支給されることになる。

扶持米を現金化する

○「覚（閏八月分御扶持米払代金差上）」（文書・記録類４１７）

幕臣たちは浅草御米蔵で米を受け取ることや自家消費分を除いた米の換金を蔵前の札差に請け負わせた。忠敬の場合、佐原から飯米を送らせているので、扶持米は全て札差によって現金化している。忠敬の札差は元旅籠町二丁目の溜屋庄助で、文化七年五月に廃業するまで務めた。溜屋が毎月発行した「覚（○月分御扶持米払代金差上）」などの文書が十九通残っており国宝に指定されている。

図２は文化二年閏八月分の忠敬の扶持米売却代金の覚書である。図２には「丑」としか記載が無いが、「閏八月」とあり、忠敬が活動した時期のうち、丑年で閏八月に該当するのは文化二年だけであり年時が確定できる。

以下支給額の計算となる。忠敬は十人扶持なので一日あたり五升となる。文化二年閏八月は小の月のため二十九日である。五升×二十九日分で一石四斗五升が御蔵奉行から支払われる。「差料」は札差の手数料の意味か。その二升を引き、残りが一石四斗三升となり、これが手取りの分である。

図２　「覚（閏八月分御扶持米払代金差上）」（文書・記録類 417）
伊能忠敬記念館所蔵、無断流用禁止

次には手取りの扶持米を現金化する計算である。「直段」は「御張紙値段」のことで、江戸城内の中之口に張り出され、幕府の公定米価として禄米の換金レートとなり、百俵（三十五石）あたりの値段を金貨単位の両で表示した。このときの御貼紙直段が三十五石あたり二十八両二分（二十八・五両）であったので、一石四斗三升は一・一六四四四二八五両となり、両以下は銀で表記して米代金は一両と銀九匁八分六厘とする。銀九匁八分六厘を更に金と銭に換算すると金二朱と銭二百六十一文になる。米一石四斗三升が金で一両二朱と銭で二百六十一文に換金された。金遣いと銀遣いに銭が加わり江戸の通貨事情は複雑である。

〈図２の書き下し文〉

覚

一、米一石四斗五升　閏八月分御扶持方
　　内米二升差料引く
　　残米一石四斗三升
　　直段二十八両二分也
　　代金一両と
　　九匁八分六厘
　　此代　二朱と
　　二百六十一文

右の通り閏八月分御扶持方御払
代金差し上げ申し候　御受け取り遊ばされ下され候　以上

丑閏八月五日　　溜屋庄助　㊞

伊能勘解由様
御取次

初めての出張旅費

「覚（旅御扶持米代金勘定）」（文書・記録類４２２）

第五次測量では忠敬は「是までとは違い、御家人として扶持や手当を頂き」（保柳睦美１９８０）出発することになった。御家人としての忠敬に支給された旅費と手当金は大谷亮吉（１９１７）によると次の通りであった。

・旅扶持　一日　一人五合、五人扶持一倍即ち五升宛但し京升にて
・雑用金　一ヶ月　金三両二歩宛
・宿代　一ヶ月　銀一枚（四十三匁）宛
・別段手当金　一日　銀十四匁宛

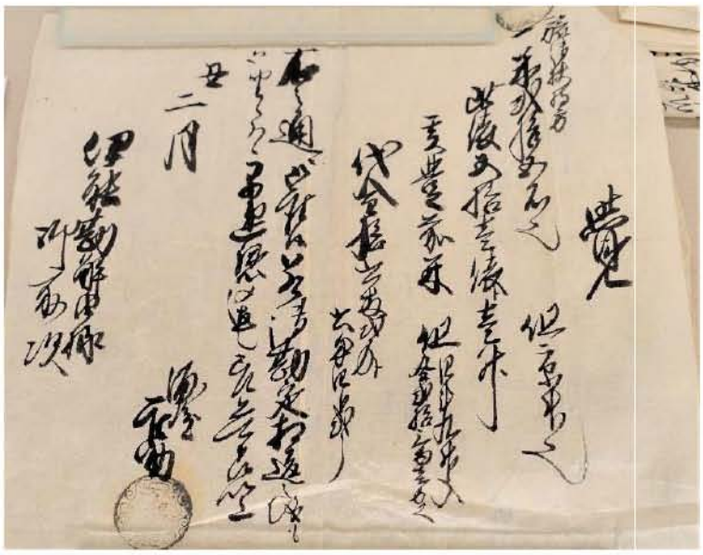


図３　「覚（旅御扶持米代金勘定）」（文書・記録類 422）
伊能忠敬記念館所蔵、無断流用禁止

図３は札差の溜屋庄助による旅扶持の換金計算書である。旅扶持の二十五石は四斗九升入りの福岡県東部の豊前米で五十一俵一升が支給された。但し丑年に亥年米の支給であるから古古米である。貼紙直段の三十五石あたり二十三両一分により、金十六両二分と銀六匁四分二厘と計算している。旅扶持二十五石を一日分の旅扶持五升で割ると、五百日分を概算払いしていたことがわかる。しかし第五次測量は六百四十日かかったので、途中で旅費切れとなる。出発から四百八十九日目の文化三年六月十一日の『測量日記』の記事に、幕府直轄地石見銀山領を支配する大森代官の手代が江戸表からの為替金を届けたとある。これが追加の旅費支給であろう。なお第五次測量から帰府した後の文化四年四月二十四日の『江戸日記』には「旅御扶持方返納」とあり旅費精算をしている。

〈図３の書き下し文〉

覚
旅御扶持方
一、米二十五石也　但し京升也
　此の俵五十一俵一升
　亥豊前米　但し　四斗九升入り
　　金二十三両一分也
　代金十六両二分と
　　六匁四分二厘
右の通りに御座候、若し御勘定相違の儀も
御座候はば早速認め返し差し上げ申すべく候、以上
丑二月　　溜屋庄助　㊞
伊能勘解由様
御取次

死ねない忠敬

「覚（五月分米払代金差上）」（文書・記録類４２７）

図４は卯年の五月の三十日間分の扶持米一石五斗を、札差の坂倉屋助次郎が金一両と銭八百十九文に換金して支払ったというもので、図２と同様な内容である。元旅籠一町目の板倉屋助次郎は溜屋庄助が廃業してから、代わって忠敬の札差を務め、同様の文書三十二通が国宝の指定を受けている。図４で興味深いのは「卯閏四月二十九日」という部分である。卯年に該当するのは文化四年、文政二年、天保二年などがあるが、閏月があるのは文政二年閏四月だけであるので、この文書の年

図４「覚（五月分米払代金差上）」（文書・記録類 427）
伊能忠敬記念館所蔵、無断流用禁止

時が確定できる。周知のように忠敬は文化十五年四月十三日（四月二十二日に文政に改元）に没したが、その死を届けること無く亀島町の地図御用所で地図仕立が続けられた。死亡届が出されていない以上、扶持米も支給され続けることになる。忠敬死後のものと思われる坂倉屋の米払代金差上文書は十数通に及ぶ。

小川恭一（２０１６）は死亡届けを遅らせる慣習が黙認されていたとする。浜田義一郎（１９６３）や沓掛良彦（２００７）によると勘定奉行所の役人であった大田直次郎（南畝）が文政六年に七十五歳で亡くなったが、嫡孫が出仕を認められるまで二年間、死を届けなかったという。沓掛は「理解ある上役たちのおかげで、南畝は死してなお二年間、子や孫たちを養っていたわけである」と記す。もっとも著名人であった大田南畝の死はすぐさま世に広まっていたようである。『藤岡屋日記』第一巻には、文政六癸未年四月六日の記事に「大田南畝翁卒、七拾五、…狂歌をよくし…戯作の書数十部あり、世の知る所なり、白山本然寺葬す」とリアルタイムで伝え、辞世の句も載せている。

忠敬の場合に死を伏せるとなると、地図御用の上司である天文方だけで済むことではない。忠敬死去の時点で死亡届を提出すべき小普請組支配は松平岩見守正トであり、文政三年には本多大和守繁文に代わっている。かなりの範囲の了解が欠かせないのではなかったか。

文政四年七月十日に『大日本沿海輿地全図』が上呈されると、忠敬の死の公表に向けて手続きが始まる。八月に「当春以来、痰咳差しおこり相い勝れ申さず候」（『兼々奉申上置候心願之趣申上候書付』国宝：文書・記録類３７８）と発病を、九月に「此節絶食に罷り成り」（『奉願候覚』国宝：文書・記録類３８４）と病状の悪化を、忠敬の名前で小普請組組頭渋江新之助に届け出た。九月四日に図５の「養生相叶わず、今四日未之中刻、死去仕り候」という『伊能勘解由病死届』が嫡孫の伊能三郎右衛門（忠誨）と下河辺政五郎の名前で提出された。幕臣伊能忠敬は漸く終焉を迎えることができた。

図５「伊能勘解由病死届」（文書・記録類 381）
伊能忠敬記念館所蔵、無断流用禁止

史料の解読に当たっては佐原古文書学習会代表の酒井右二氏、金沢支部の室山孝会員にご教示頂いた。記して謝する。

〈図５の書き下し文〉

下総国香取郡佐原村
長百姓　伊能三郎右衛門
大御番
安藤出雲守同心
下河辺政五郎

……御組
伊能勘解由

右勘解由儀　久々病気の処　養生
相叶わず　今四日未の中刻　死去仕り候
之に依り　此の段　御届け申し上げ候　以上

伊能勘解由孫
下総国香取郡佐原村
長百姓
伊能三郎右衛門㊞

巳九月四日

伊能勘解由由緒
大御番
安藤出雲守同心
天文方
高橋作左衛門手附
測量御用下役
下河辺政五郎㊞

伊能勘解由病死御届

【参考】
・『伊能忠敬』大谷亮吉（岩波書店１９１７年）
・『伊能忠敬の科学的業績』保柳睦美（古今書院１９８０年）
・『江戸幕府の御家人』戸森麻衣子（東京堂出版２０２１年）
・『旗本・御家人の就職事情』山本英貴（吉川弘文館２０１５年）
・『江戸の旗本事典』小川恭一（角川書店２０１６年）
・『江戸の高利貸』北原進（角川書店２０１７年）
・『大田南畝』沓掛良彦（ミネルヴァ書房２００７年）
・『大田南畝』浜田義一郎（吉川弘文館１９６３年）
・『近世庶民生活史料藤岡屋日記』（三一書房１９８７年）
・『札差株帳』国会図書館デジタルコレクション

「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第三十回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

監修　渡辺一郎　　編著　井上辰男

【第八次測量】（九州第二次）　下関～広島～米子　　自　文化10年10月14日　至　文化10年閏11月8日

【本隊】

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
文化10年10月	（1813）					
14	昼休	下ノ関町	山口県下関市		赤間ヶ関渡海、下ノ関町着。	一七八
（　6）	小月宿	同　下関市	一向宗明円寺		長府城下を歴て清末領小月宿へ日入に着。無測	一七七
15	後手昼休	西中山村	同　下関市	西念寺	【後手】小月宿制札より萩街道を測。左に止宿（一向宗明円寺）、枝上小月、滑坂、田部村、田部峠、田部本村、田部市（駅場）、田部川仮橋、下岡枝村字荒小田、枝船場、中山村枝湯ノ原、本村内字東中山、西中山村人家前、先手の初に繋。【先手】中山村より、城戸村字西長野、左下ケ山道追分、字手洗、城戸川、中村、中村川、矢田村内西市駅に打止。	一七七
	先手昼休	城戸村字西長野	同　下関市	百姓又治郎		一七七
（　7）	矢田村西市		同　下関市	本陣中野新左衛門 宮田屋丈助		一七七
16	後手昼休	地吉村法ヶ原	同　下関市	一向宗西派光雲寺	【後手】西市より普済寺川土橋、殿敷村、長正寺町、矢田村枝楢原、曹洞宗泰雲院、今出村、字岩鼻、殿敷村枝石原、枝岩上、今出村枝大河内字百合野、地吉村枝深堀、地吉川板橋、今出村枝中河内、地吉村本村字法ヶ原、一向宗西派光雲寺前先手の初に繋。【先手】地吉村法ヶ原より萩街道測、右に旧跡丸尾山、安徳天皇の御陵並二位の尼墓。左に網掛の森、枝大石字長焼坂、俵山村字小峠、字大峠、枝八幡台、左に八幡宮社、出会川仮橋、俵山本村人家駅場温泉あり、字湯町、止宿入口打止。	一七六
	先手昼休	俵山村枝八幡台	同　長門市	百姓為右衛門		一七六
（　8）	俵山村字湯町		同　長門市	庄屋福山嘉兵衛 百姓貞右衛門		一七六

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
17	後手昼休 （　　9）	深川庄村枝原門前	同　長門市	曹洞宗瑞雲山大寧寺	【後手】湯町止宿入口より、右に温泉壷二ッ、右に制札、枝上正村字宮ノ台、字竹ノ上、字福王子峠、枝木津村字藤原、字西木津、左に一向宗西念寺、右眼下に滝あり字大滝と云、字笹ヶ峠、字北小原、字大寧寺峠、俵山、深川庄村界、先手初に繋。【先手】俵山、深川庄村界より深川庄村枝原門前内字柿ノ木、三谷川土橋、大寧寺門前迄測る。、街道より本堂迄一町計（盤石橋、虎渓橋、門前の流に懸る橋也）。惣門額、海西法窟。山門額、福玉閣。山門の前に小池あり白蓮池と云。（此池に掛橋を無明橋と云。中国にては此寺を西高野と云と）。能登国総持寺末曹洞宗瑞雲山大寧寺、（大内義隆討死の寺なり。境内に墳墓あり、辞世に、討人も討るる人も諸ともに如露亦如電応作如是観、と陰徳太平記にありと云。其側に近臣の墓おほし、此地は実に粛々たる幽谷なり）。枝原門前の内字猪ノ尾野、板持川仮橋、枝板持、本川仮橋、深川庄村正明市（駅場）、止宿迄測。恒星測定	一七六
	後手昼休	豊原村	同　長門市	越荷方酒井太三郎	【後手】深川庄村正明市、又深川駅より萩街道測、追分真直は瀬戸崎道、左に一向宗法蓮寺、右に溜池（字帰堤）、海辺入江奥に出、字沢江浦と云。此より街道海辺一同、三隅庄村枝沢江村内字中山、（左入海向、白潟浦人家一群、此入海にて鯨を取）、字潟江浦、小川石橋、海辺を離迄重測。此より海を遠ざかり谷間を測。浅田川土橋、枝浅田村字三本松、厳島大明神社あり、枝豊原村、右に二条窪道追分あり、三隅川、三隅庄本村、（駅場）三隅市、先手初に繋。【先手】三隅庄村三隅市より枝中小野、枝麓、枝宗頭、鎖坂峠、字鎖坂郡界、三見村字鎖坂、技床並、三見本村三見市（駅場）歴てそれより人家限迄測る。	一七六
18	先手昼休 （　　10）	三隅庄村枝宗頭	同　長門市	大庄屋山本惣右衛門		一七六
	昼休	大矢村	同　萩市	百姓権六	【後手】三見村（三見市）より枝蔵本、枝中山字玉江坂、三見村・山田村界、先手の初に繋。【先手】三見、山田村界、字玉江坂より山田村枝玉江村、左に鎮守安森の社、玉江川土橋、字中村、字石ヶ坪、字桜田（本川渡場、字中渡）。此より重測。椿郷西分、字桜井（本川渡場、字桜井渡）、右一町計引込臨済宗霊椿山大照院、萩侯菩提寺）、未年重測。此より新測、字青海、明木街道に出、字濁渕、萩市中入口、木戸左柱に繋。それより無測、椿郷西分字大矢村にて昼休、一同に明木駅着。恒星測定	一七六
19	（　　11）	明木駅	同　萩市	本陣長井与右衛門 百姓吉右衛門		

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
20	小休	佐々並駅	同　山口市	木村半兵衛	明木駅出立。無測、佐々並駅、夏木原を歴て山口町道場門前町着。	一七六
	昼休	夏木原	同　山口市	久右衛門		一七六
	（12）	山口町道場門前町	同　山口市	客館預主大年寄格 安部四郎右衛門		一七六
21 *	（13）	小鯖村 枝鯖山字門前	同　山口市	百姓半左衛門 百姓要助	大手分。支隊、石州津和野へ向。山口町道場門前板橋より石州街道重測、辻印を歴て米屋町、中市、大市の内右側制礼に繋。又辻印より宮市街道測、今市、右一向宗万徳寺、左同正福寺、右一向宗正善寺、左浄土宗善生寺、今道、鰐石町、市中限、鰐口川同橋、御堀村字鰐石、御堀本村字氷上門前、左に天台宗氷上山真光院興立寺、氷上川橋二ッ。如瀬田ノ橋、中を隔、板橋、枝矢田村字高芝、枝長野村、小鯖村、左曹洞宗福藤院、字柊、字鳴滝、鳴滝川石橋、字八反田、枝鯖山、字門前、左曹洞宗禅昌寺、測所門前に終。	一七五
	伊能	右田市	同　防府市	一向宗乗円寺		一七五
22 *	（14）	宮市町	同　防府市	本陣兄部盤右衛門	枝鯖山字門前出立。禅昌寺前より、字鯖峠郡界、下右田村字鯖峠、本村右田市。式内釼神社、打上、一向宗乗円寺、枝芝生村、枝渡村、鯖川端石州街道追分碑に繋。鯖川を渡、西佐波令枝舟本、西佐波令内宮市町、長崎街道に至、追分碑に繋。此より長崎街道筋重測。止宿本陣を歴て東佐波令内宮市町前小路、制札前、天満宮前打止。恒星測定	一七五
23 *	（15）	奈美村上村	同　防府市	本陣寿助 新吉	宮市町出立。下右田村枝渡村内鯖川端、石州街道追分より石州街道測、下右田村枝塚原村、上右田村枝上河原村、本村中村を歴て式内出雲神社へ打上。中村より枝田ノ口村、三谷川小流、枝和田村、鈴屋村、宮ノ原村、枝多以羅村、奈美村枝十七村、枝中塚村、枝中村、奈美村上村人家中迄測。恒星測定	一七五
24 *	（16）	西大津村	同　山口市	本陣曹洞宗深光寺 百姓半左衛門	奈美本村上村より霧ヶ峠、中山村枝経納村、枝林村、岸見村御坂神社前を歴て式内御坂神社へ打上。又神社前より岸見本村字和田、伊賀地村枝西大津村、止宿前を歴て仕越、堀村枝二ノ宮村、往来より引込、式外出雲社。枝庄方村、山口街道追分鯖川端にて打止。恒星測定	一七五
25 *	（17）	伏見村（伏野村）	同　山口市	本陣曹洞宗正福寺 百姓与左衛門	西大津村出立。堀村枝庄方村、山口街道追分より、山口街道漆尾越測、庄方村漆尾峠に緊、それより引帰し山口街道追分より枝庄方村、鯖川、庄方橋土橋、堀本村枝伏野村、人家前に打止、止宿打上。恒星測定	一七五

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
２６ ＊	（　１８）	串鯖河内村	同　山口市	本陣常吉 庄屋四郎兵衛	堀村枝伏見村より、山畑村、字向原、字下畑、字上畑、枝大野村、木引坂峠、串鯖河内村字元折、串鯖河内本村人家下に打止、止宿打上。恒星測定	一七五
２７ ＊	昼休	巣山村枝仁保津村	同　周南市	曹洞宗光雲寺	串鯖河内村より枝安養寺村、枝上角村、巣山村枝赤山村、枝杉ノ河内村、枝仁保津村、字栗ノ木、柿ノ木峠郡界、都濃郡鹿野中村枝今井村、中村本村字古野、枝田原村、田原川仮橋（岩国錦帯橋へ落）、鹿野上村、鹿野市（即本村、鹿野四ヶ村なり。上村、中村、下村、大潮村を合）、大潮街道追分を歴て、此より大潮街道を止宿へ向て測。右に二所大明神社、大潮道の止宿下に打止、止宿打上。萩侯より一同へ国産を被贈。恒星測定	一七五
２７ ＊	（　１９）	鹿野市	同　周南市	臨済宗 鹿苑山漢陽普済禅寺		一七五
２８ ＊	昼休	大潮村	同　周南市	森広太兵衛（侍分）	鹿野市逗留測。止宿下より大潮道を測、枝堤村字新市、堤川仮橋、字堤、鹿野中村枝狐原、石ヶ樋峠、大潮村枝西河内村字原、字沖ノ原、枝桶山村字柏木、字此野原、字柏原、字倉谷、倉谷川土橋、大潮本村分）字新原、字小潮、大潮本村（駅）、道先川端、字田原、別手残に繋。	一七五
２８ ＊	（　２０）	鹿野市	同　周南市	臨済宗 鹿苑山漢陽普済禅寺		一七五
２９ ＊	伊能	鹿野市	同　周南市	臨済宗 鹿苑山漢陽普済禅寺	金峯村止宿差支に付、我等並長持等、鹿野市逗留。【今泉他三名】鹿野上村鹿野市より鹿野下村枝大町村字郷ノ川村（下村の本郷）、郷ノ川土橋、金峯峠、金峯村、字金峯谷、字粟尻、字奥谷、モチ河内峠、字松枝、字郷（駅場）、止宿測所を歴て金峯川土橋、萩領・徳山領界迄仕越測。恒星測定	一七五
２９ ＊	（　２１）	金峯村	同　周南市	役所		一七五
３０ ＊	（　２２）	須万村字宮ノ原	同　周南市	本陣八郎右衛門 新左衛門	金峯村萩領・須万村徳山領界より須万村字大下、字朴、字丹後兼、廻り峠、字中原、須万本村字宮ノ原（駅場）、須万川端を歴て此より止宿打上。又須万川端より仕越、須万川船渡、字北山、字三ッ森迄測。伊能は鹿野市出立、須万本村字宮ノ原に着。恒星測定	一七三

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
文化10年11月	（1813）					
1 ＊	（11．23）	広瀬村	山口県岩国市	本陣庄屋隅四郎右衛門 隅弥太郎	須万村字三ッ森より、字下長谷、字上長谷、玖珂郡野谷村枝三分一村字藤巻、字茶屋ヶ原、桑ノ枝峠、広瀬本村内字石切、字坂平、田ノ口川土橋、字田ノ口、枝須万地村、本村内字桜木、広瀬川船渡、川を渡、川端に打止。	一七三
2 ＊	昼休 （24）	府谷村字西村（駅場） 本郷村	同　岩国市 同　岩国市	医者養悦 浄土宗妙見山建立寺	広瀬村川端より、広瀬村（広瀬市。駅）、左に八幡宮、字下向、字出会（岩国錦帯橋より凡七里半計、小船通用）、宇佐川（舟渡、仮橋掛る）、府谷村枝五味村下出合、字西谷、道祖峠、府谷村字西村、府谷村駅場、早尾峠、枝渋谷村、本郷村（金峯村より府谷村迄を前山代と云。本郷村より芸州界迄を奥山代と云）、枝助光村字小栗須、三瀬川板橋、枝野尻村内字和田、右関戸宿街道追分、此追分八幡宮社前に有、本郷村内字放ヶ原、字鍛治屋町、鍛治屋川板橋、本郷村河原町、新町、本郷市（駅場）迄測。それより止宿へ打上、本谷川板橋（今市橋）、字今市測所迄測る。	一七三 一七三
3 ＊	（25）	秋掛村字亀尾川	同　岩国市	本陣国界の番所 百姓仁右衛門	本郷村新町、本郷市（駅場）より中市、字神田、物川土橋、引地坂、秋掛村枝中大田原村字金ヶ原、枝下大田原村、秋掛村（駅場）、同村字亀尾川、止宿を歴て亀尾川峠、防州萩領・芸州広島領国界領界。それより安芸国佐伯郡浅原村に打止。恒星測定	一七三
4 ＊	（26）	津田（林村）字内山 字林	広島県廿日市市	本陣阿部十吉 組頭嘉六	秋掛村字亀尾川出立。佐伯郡浅原村より市ノ川仮橋、浅原村字一ノ組、字成ヶ原、枝冷川村、冷川土橋、冷坂峠、浅原村字戸屋原、戸屋ノ尾坂、枝保曽原、津田村、大谷川仮橋、枝林村（即津田本村。駅場）、字水神木、拭川小流、林村内十王堂、石州街道追分三辻に打止。	一七三
5 ＊	昼休 （27）	河津原村字本谷 津田（林村）字内山 字林	同　廿日市市 同　廿日市市	一向宗正念寺 本陣阿部十吉 組頭嘉六	津田林村逗留測。林村止宿前より石州街道へ打出し、此より広島街道を測。字橋本、字横屋、字十王堂（駅場）、防州街道追分に繋、拭川小流、枝別府村、津田村字上市、字向、字脇ヶ峠、河津原村字中山組、字本谷、本谷川土橋、友田村枝岩国組大川端、友田村・峠村界に打止。それより引帰、帰宿。恒星測定	一七三 一七三

【支隊】　津和野向測。

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
10月21日	（11．13）	仁保市	山口県山口市	庄屋仁保半左衛門 百姓権右衛門	山口町出立。宮野村枝七房村、徳地道・津和野道追分より徳地道測、枝中村、宮野川土橋、字道々、右に地蔵、字大山路、字安宗、字椿、字仁保地、左に大歳宮、字仁保峠、仁保村字横谷、仁保本村（駅場、字仁保市）、止宿前打止。	一七五
22	（14）	引谷村	同　山口市	庄屋原田忠右衛門 百姓弥一右衛門	仁保市より浅路川、字野上、字白坂、左の方に諏方明神社あり、右に溜池上下二段、左に禅宗高野庵、右道端に名産土饅頭（高野饅頭）。字高野原、井開田川土橋、左に疫神の社、観音堂、天満宮社、枝井開田村字坂本、左に荒神社、字石坂、右に観音堂、字石坂峠、佐波郡引谷村、此より総名下徳地、字瀬戸、柚谷川、字大平、字ケリゲキ、字黒岩、本川、右庄方・左舟路道追分打止。	一七五
23	小休	枝川口字畑	同　山口市	弥一右衛門	引谷村出立。佐波郡下徳地内堀村字漆尾坂より引谷道を測。字漆尾峠、引谷村、引回し川石橋、字松尾、字木引、追分に繋。それより船路道を測。字下ノ原、引回し川、枝中村字戸根、引谷川、字焼ヶ谷、引谷川、字馬殿、字滝ノ下、字札ヶ峠、字戸倉、引谷川、字仮橋、枝川口字畑、引谷川土橋、升谷川、字升谷、本川土橋中央界、船路村、（右へ曲追分は八坂、小古祖、堀村行本道）、字深瀬、止宿前打止。	一七五
	（15）	船路村字深瀬	同　山口市	曹洞宗竜福山宗円寺		一七五
24	小休	枝御馬字屋敷	同　山口市	百姓林右衛門	下徳地内船路村止宿前より字前原を歴て式内御坂神社へ打上、本川土橋、枝下庄、御坂神殿迄測る。又字前原より枝御馬字御馬滝、字向屋敷、本川土橋、字屋敷、右川の向絶壁山・字長者ヶ岳、右に地蔵、字奈良峠、野谷村、右眼下・字ムクズ渕、野谷川土橋、字中山、右眼下・字グイ子渕、字ホクソ、字大原、古谷川板橋、野谷村止宿前打止。	一七五
	（16）	野谷村	同　山口市	庄屋田村長兵衛 百姓勘右衛門		一七五
25	小休	野谷村字中鶴山	同　山口市	百姓新助	下徳地内野谷村止宿前より、莇谷川、左に禅宗源徳寺、字下鶴山、釣ノ谷川、字中鶴山、字出合、字笹ヶ滝、字横山、夷ス谷川板橋、柚木村、鷹ノ巣道・山代道追分を歴て、左曹洞宗徳祐庵前、街道打止終。	一七五
	昼休	野谷村字中横山	同　山口市	百姓熊太郎		一七五
	（17）	柚木村	同　山口市	曹洞宗徳祐庵 百姓百蔵		一七五

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
26	小休	枝河内字戸根	同　山口市	百姓嘉平治	柚木村逗留測。都濃郡鹿野大潮村字田ノ原、一里塚前より柚木道測、田ノ原川、田ノ原橋、字葉ノ内、字河内峠郡界、佐波郡下徳地内柚木村、右人麿明神社、字一ノ渡瀬、枝川上内字鹿ノ路、字中村、枝河内、字長野、字戸根、左に鎮守、字飯迫、字妻ノ峠、字小河内、小河内川土橋、又同板橋、字高河内、本川土橋、右制礼、馬駅、問屋場、柚木村止宿前に繋終。	一七五
	（１８）	柚木村	同　山口市	曹洞宗徳祐庵 百姓百蔵	柚木村出立。鷹ノ巣・山代追分より鷹巣道測、字鬼ヶ平、字大土路、国境。長門国阿武郡地福村枝大土路字清丸、字追分、徳佐道追分、枝一井原字小山、清丸川仮橋、家河内川、字段ノ原、左に馬頭観音堂、枝鷹ノ巣字荒瀬、地福川、津和野街道に出、字掛、追分に繋終。	一七五
27	（１９）	地福村鷹巣	同　山口市	庄屋市川権之丞 百姓権治郎	地福村枝鷹巣出立。無測、徳佐市、野坂村、それより鹿足郡津和野城下横掘町に着。	一七五
28	小休	徳佐市	同　山口市	本陣椿又左衛門		一七五
	昼休	野坂村	同　山口市	大庭定右衛門		一七五
	（２０）	津和野城下横掘町	島根県津和野町	津守長左衛門		一七五
29	小休	篠山村	同　津和野町	領主茶屋	津和野城下出立。津和野中座村字四ッ角より吉賀道測、右家老屋敷、左八王子の社、字半牛、字竜ヶ越峠（駕籠立場）、字洞、右眼下に洞ノ滝、篠山村、小川土橋、左の山名所妹山、字木野、字杉ヶ峠（駕籠立場）、福川村字唐人屋、字折橋、右馬角山、字柿木峠、奥ヶ野川念仏橋、仏石、字馬路（馬立場）、古城跡、字三ノ瀬、字亀田、字伊豆原、柿木村字中原、柿木本村、止宿前打止終。	一七五
	昼休	福川村字馬路	同　吉賀町	庄屋長八		一七五
	（２１）	柿木村	同　吉賀町	庄屋下瀬兼蔵		一七五
30	小休	田丸村	同　吉賀町	庄屋幸治	柿木村止宿前より、馬立場、柿木川舟渡、字梁原、字夜討原、字犬戻、枝月瀬字松渕、右川中に島あり、木部谷村、木部谷川、大野原村字河津、字松原、字谷口。右吉賀川中に島あり、田丸村、左に河内の社あり（早田の森）、田丸本村（馬立場）、字塔ノ峠、七日市村字久数子、高尻川、左古城跡有（野見山）、七日市村人家限打止（立場）。	一七三
	（２２）	七日市村	同　吉賀町	酒屋藤左衛門		一七三

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
11月1日	小休	立戸村字宮ノ原	同　吉賀町	百姓与市	七日市人家限打止より、字小野、左に鹿大明神社あり、朝倉村字坂折、立戸村字森河内、左に禅宗宝大寺、字円入（立場）、繁谷川木橋、字宮ノ原、左引込八幡宮、広石村字大谷、指月古城、字平田、字河口、沢田村、右川中に島あり、六日市村（駅場、六日市宿と云）、左に恵美須社、人家限、鹿足河内川市頭橋手前にて打止。	一七三
	（11．23）	六日市村	同　吉賀町	庄屋七右衛門		一七三
2	小休	樋口村枝蔵木字重則	同　吉賀町	庄屋斎藤仁右衛門	六日市村逗留測。六日市村字六日市宿、鹿足河内川手前より市頭橋、枝野中、左に新宮権現社、枝有飯、吉賀川、右に古城跡茶臼山、九郎原村字畑詰、樋口村枝蔵木字重則、吉賀川、又吉賀川、右山上に鎮守小島大明神、星坂村字田ノ原（立場）、吉賀川、左右に口留番所（星坂番所）、字星坂峠、石見国鹿足郡星坂村・周防国玖珂郡宇佐郷大原村境にて打止。それより星坂村字田原へ引取、六日市宿へ帰宿。	一七三
	昼休	星坂村字田原	同　吉賀町	庄屋善左衛門		一七三
	（24）	六日市村	同　吉賀町	庄屋七右衛門		一七三
3	昼休	大原村枝宇佐郷字浜子	山口県岩国市	一向宗願行寺	六日市宿出立。星坂峠迄無測、国界より玖珂郡大原村枝宇佐郷字浜子、宇佐郷川渡、左に滝あり、字松ヶ峠（駕籠立場）、字下市、大原本村止宿前打止。	一七三
	（25）	大原村	同　岩国市	讃井沢右衛門		一七三
4	（26）	大原村	同　岩国市	讃井沢右衛門	大原村逗留測。止宿前より字中村、左に鎮守大原河内大明神社、字島ノ谷、左に厳島大明神社、生山坂、字沓打（駕籠立場）、字生山峠（此峠より温石出る）、字堺峠、防州玖珂郡大原村、芸州佐伯郡中道村国境に打止、帰宿。	一七三
5	昼休	中道村	広島県廿日市市	百姓与十郎	大原村出立。芸州佐伯郡中道村字境峠、国境より、左に地蔵堂、魚ノ谷川木橋、中道本村、字七曲り坂、小炭川、栗栖村字松ヶ峠、横井手越（駕籠立場）、阿久谷川、観音原川木橋、栗栖村本村止宿前打止。	一七三
	（27）	栗栖村	同　廿日市市	庄屋小田浅右衛門		一七三

【本隊】

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
11月6日	（　28）	津田（林村）字内山字林	同　廿日市市	本陣阿部十吉組頭嘉六	【本隊】津田林村逗留。支隊との出会を待。【支隊】栗栖村止宿前より枝下栗栖、岩倉川板橋、津田村枝岩倉、石州道追分を歴て字竹ヶ原、字内山、字林組、別手測所より打出し印に繋終。両手出会。	一七三
7 ＊	昼休	宮内村	同　廿日市市	一向宗専念寺	津田村出立。大手分。支隊、石州に向い測る。本隊、無測、友田村・峠村界より広島道を測、里地川飛石渡、峠村字下組、字中組、字峠組、峠坂界論所、宮内村、御洗川飛石渡、字赤石組、字畑口組、長崎街道へ出、追分に繋。それより無測、宮内村、佐伯郡平良村字上組、式内速谷神社。右社前より長崎街道へ打下。右森中岩城権現社、右古城跡三ヶ所。字平良川、浜田道追分（字川合）、長崎街道、川合川土橋手前に至る。此より長崎街道重測。川合町廿日市町（駅場）左に一向宗常念寺、左制札、右止宿前打止終。恒星測定	一六七
	（　29）	廿日市宿	同　廿日市市	本陣山田治右衛門		
8 ＊	（　30）	広島城下堺町四町目	同　広島市中区	山沢屋栄蔵	廿日市駅出立。無測。恒星測定	一六七
9 ＊	小休	府中村	同　府中町	大庄屋原田十兵衛	広島城下出立。無測、府中村字岩鼻、長崎街道鉄炮豊土手追分真中より寅年の鉄炮土手打初跡に繋。長崎街道巳年測追分迄重測。長崎街道追分より雲州街道測。府中村枝矢賀、惣社道追分を歴て惣社へ測。府中川仮橋、字中郷、右国分八幡宮道追分、此より八幡迄測遠を用、国分八幡宮、式内多家神社の事。惣社道、左畠中に奉幣使代田所勒負宅あり。木ノ華表、額惣社大明神とあり。神前に打止、惣社大明神、式内多家ノ神社なり。小休。惣社道追分より雲州街道測。中山川、温品村字小出組、字森ヶ市、字矢可部、字板屋組、右に温品古城跡（佐城）、高宮郡馬木村字今在、字羅漢谷、字板ヶ迫、字箕ノ越、字世上、字夫婦橋、小川土橋、字砥石場、右屋敷跡、石垣残る。字二ノ宮峠、字大原、福田村字大杖、字大石屋、街道打止、測所打上。恒星測定	一六七
	小休	温品村字板屋組	同　広島市東区	百姓茂平		一六七
	小休	馬木村字夫婦橋	同　広島市東区	百姓磯右衛門		一六七
	（12．1）	福田村	同　広島市東区	本陣一向宗福城山西善寺百姓甚三郎		一六七

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
１０＊	昼休（２）	狩留我村字湯坂	同　広島市安佐北区	小十郎	福田村字大石屋よりヲハチ川、字若宮、字道々、字一里塚、字新福庵、字砥石場、字寺分、小河原村字氏名原、左三次道追分、左に古城跡（越峠城）。左二十一面観音、字マゲ、狩留我村字湯坂、小川、左に加茂郡より諸色津出し道追分、字小丸子、左に岩立石、字湯坂峠（湯坂ノ切通）、加茂郡別府村、右に溜池上下二段にあり、字木ヶ原池、字下別府、右へ曲る小道、長崎街道の四日市道に至る、志和堀村字出口、地枝貞安、志和西村字馬宿、志和堀村字飛渡り川土橋、字宮ノ前、左山根に鎮守八幡宮社、大川土橋、字救橋、字後休市、東川土橋、字才崎、四日市道追分打止。此より測所打上、行先左に才崎城（古城）、止宿前に打止。恒星測定	一六七
		志和堀村	同　東広島市	庄屋小林惣左衛門 芥川政太郎		
１１＊	（３）	上竹仁村	同　東広島市	庄屋高橋清右衛門	志和堀村字才崎より、字中村、左吉田道、右古城跡字新城、杉谷川土橋、字行友、左二八幡社、左山に古城跡、字杉坂、杉坂峠、豊田郡上竹仁村字新開、左に王子権現社字惣田、本川土橋、字石木、左止宿入口を歴て此より仕越。字市川、左に恵美須堂、字泉原、小川川角橋、下竹仁村打止。	一六四
１２＊	昼休（４）	久芳村字大小路	同　東広島市	組頭保五郎	雪中に上竹仁村出立。下竹仁村より、字郷谷、谷川土橋、追分あり（右へ曲る小道竹原道）、字御園谷、左古城跡、字芦土、久芳村、本川板橋、枝西谷、押谷川土橋、枝六万堂、字郷、字宗行、字大小路、郷川土橋、字三本松、枝後谷、枝小松谷、枝松崎谷、乃美村字船迫、字為平、字表谷、鰻川土橋、大川土橋、字古寺谷、字乃美市止宿前に打止。	一六七
	（４）	乃美村	同　東広島市	本陣庄屋小島徳三郎 百姓勘兵衛		一六四
１３＊	（５）	吉原本郷枝西谷	同　東広島市	庄屋長満権右衛門	雪に乃美村乃美市止宿前より、鍛治屋村字板滝、右に八王子社、清武村、塩走り川土橋、右に鎮守（八幡社、厳島社）。左に古城跡、枝篠枝谷、右に古城跡字堀城、右に文殊堂、字六日市枝八木谷（国界）、備後国世羅郡広島領吉原本郷枝西谷止宿を歴て此より仕越。左に六地蔵、左に鎮守青竜社、字引地、下り松谷川、左谷間古城跡あり、字竜王。枝下り松谷、市分村打止。恒星測定	一六四

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
14＊	（6）中食共	津田下村	同　世羅町	百姓三吉（幼年） 仮亭主 小国村庄屋丈之助	雪中に吉原本郷出立。市分村より一吉原川土橋、枝上市分、枝矢原谷、吉原中村字鎌木峠、黒川村黒川土橋、左へ曲る、吉田道追分、高山道・吉舎道追分、津田上村、右に溜池字大池、左に地蔵堂、字桜場、右に小社一宮大明神社、左に吉田道追分、左に禅宗吉祥寺、津田下村止宿前迄測る。それより仕越。右へ曲る、高山道追分、左に古城跡、字明神山。字市左に恵美須小社、字石堂、長田下村、左に地蔵堂、字論田打止。	一六三
15＊	昼休	辻村字宗友	同　三次市	庄屋林平	津田下村出立。字論田より小川土橋、枝横坂谷、字長田川、徳市村字妻ノ神峠、三谿郡辻村字佐谷、字城山、字宗重迫、字宗友、右土橋、三原道追分、枝元広、吉舎川渡、丸田村、清綱村字唐樋、本村字吉舎宿（馬継左制札前、右に上下街道追分）迄測る。此ヨリ重測、止宿前打止。恒星測定	一六三
15＊	（7）	本村字吉舎宿	同　三次市	庄屋泉屋清十郎		一六三
16＊	昼休	知和村字千田屋	同　三次市	多四郎	本村吉舎宿止宿前より銀山街道重測。吉舎川字古市渡（土橋）、字古市、三玉村、吉舎川字昆沙門渡（土橋）、右古城跡字南天山、右山上に荒神社、金山川土橋（字落合渡）、銀山街道・田房市道追分迄重測。此より田房市道測。左に大歳宮、字胡麻迫、字金山谷、安田村字黒サヤ峠、左に六地蔵、字上谷、左に妙見社、右上下道追分、古城跡字ヲクビ山、字ヲゴリ、安田川土橋、甲怒郡知和村、安田村、字高谷、知和村字千田屋、左に鎮守厳島社、字下村、字鞍谷峠、木屋村字樽谷、太郎丸川、右太郎丸道、田房川飛石渡、字羽地、稲草村字彦ノ宮、字御調谷、左三郎坂街道追分、左古城跡字川平山、左に鎮守、左に曹洞宗五雲山竜奥寺、稲草村字田房市止宿前打止。恒星測定	一六三
16＊	（8）	稲草村田房市	同　庄原市	本陣麦屋兵三郎 酒屋三郎兵衛		一六三
17＊	昼休	峯村字赤川市	同　庄原市	庄屋久三郎	稲草村字田房市止宿前より右川向字郷原、左に金毘羅社、字森藤、森藤川土橋、右田房上市、右上下道、森藤川、枝大谷、三上郡峯村字粟石坂、字三角田、右古城跡字音掛山、枝片山、赤川土橋、字赤川市、右へ曲る、東条道追分、春田村字新田谷、左に溜池、是松村字内井原、字万福寺谷、左に吉備津宮、字恒守谷、小川土橋、新上村、左に真言宗延命山西光寺、新上川土橋、庄原村、左三郎坂道、左引込禅宗雲竜寺、右制札、庄原町字本町、右駅場、東条道追分迄街道を測る。此より重測、止宿前打止。恒星測定	一六三
17＊	（9）	庄原村庄原町	同　庄原市	本陣佐敷屋板倉周蔵 佐賀屋七左衛門		一六三

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
１８ ＊	（１０）	川北村伊勢町	同　庄原市	庄屋善右衛門	庄原村庄原町止宿前より左三次街道追分、此迄重測。此より雲州街道測。字ネギ田（恵蘇郡市村地先）、庄原川仮橋、又川手村、川北村、日和・宮内追分、此より日和道を測。吉備崎川土橋、字市場、左引込八幡社立派なり、左引込太神宮社立派也、字伊勢町（駅場・問屋）止宿迄測。此より仕越。字田ノ平、字森ヶ原打止、下役内弟子伊勢町にて恒星測定。伊能は伊勢町止宿差支日和町止宿。	一六三
	伊能	日和町（比和町）	同　庄原市	大庄屋三沢七郎兵衛		一六三
１９ ＊	昼休	木屋原村	同　庄原市	組頭小平	川北村伊勢町出立。字森ヶ原より字七曲坂、字木屋原峠、木屋原村、小川、左に地蔵堂、三河内川土橋、右に地蔵堂、元常川土橋、右に地蔵堂、右山上に八幡宮、比和村字比和町（馬駅）止宿前迄測。此より仕越。右に日蓮宗妙玄寺、比和川板橋、右に制札、右に一向宗円光寺、追分、右西条帝釈道・左高野山雲州道、高野山道を測。右鎮守八幡宮、森脇村字長原打止。	一六三
	（１１）	比和村字比和町	同　庄原市	大庄屋三沢七郎兵衛 隠居屋太郎兵衛		一六三
２０ ＊	昼休	湯川村字土井	同　庄原市	禅宗東明寺	比和町出立。森脇村字長原より右に地蔵堂二ヶ所、右真言宗城福寺、右に小森社、森脇川大橋、下八川土橋、字上組、右古城跡字土井城、右に古城跡字寸為城、左に山王社、小川土橋、右古城跡字尼子山、字大井峠、湯川村、左に荒神社、字上湯川、湯川々土橋、笹屋谷川土橋、字土井、尻無川土橋、右地蔵堂、左荒神小社、字中原、右に古城跡字蔀山、即名所歌あり、蔀山おろす嵐のはげしきに柴のとびらもあかぬ丁路かな。湯川々土橋二ッ、高山村、左に鎮守鶴岡八幡宮、字上市、字新市駅、右に一向宗金秀寺、左に同宗円正寺、右に制札、雲州街道・三次街道追分打止。	一六三
	（１２）	高山村新市駅	同　庄原市	本陣尾道屋平蔵 医師渡辺元慶		一六三
２１ ＊	（１３）	高山村和南原村	同　庄原市	庄屋唯三郎	高山村内新市駅出立。雲州道・三次道追分より功徳寺へ打上。三次道を行、右に浄土宗本誓寺、左三次道追分、古跡曹洞宗千秋山功徳寺。本堂迄測る。後鳥羽院仮の皇居跡、黒木の御所と云。同帝功徳寺御逗留に萬歳院と云勅額有。宝物、紫雲池硯、有敬卿の書百人一首。又追分より雲州道を測。右森の中に祇園社、丑の方に備後出雲国界毛無山と云あり。此辺の高山也、此山に熊多し。毎年に取得と云、枝岡大内、字半戸、字深渡原、深渡り川土橋、枝和南原村、奥見沢川土橋、字妻ノ神峠、字寸谷、枝和南原村本郷止宿入口迄測る。此より仕越。字深芝、稚椙大明神社、深渡川土橋、字篠原、字牧ヶ峠、備後出雲国界を歴て、上阿井村打止（国界より雲州地へ六間打入）。	一六三

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
22 *	昼休	上阿井村字延谷	島根県奥出雲町	鉄師の大家 可部屋勘左衛門	高山和南原村出立。上阿井村より木地谷川土橋、字奥木地谷、木地谷川四度渡土橋、字鉄山所、木地谷川三度渡木橋、字延谷、阿井谷川土橋、字一里松、阿井川土橋、字榎堂、字谷口、字米原、字上阿井町（駅所）止宿前測所迄測る。此より仕越。右に制札、福原川土橋、右阿井川向城跡字鳥見山、字平、字小迫、字横見、左当村鎮守大森大明神、阿井川板橋、下阿井村字荒堀打止。江戸御用状小倉より村継に送来る。此日曇州侯より国産を御贈被下。	一六三
	（14）	上阿井村字上阿井町	同　奥出雲町	可部屋勝太郎		一六三
23 *	昼休	堅田村字釜ヶ谷	同　奥出雲町	忠右衛門	上阿井町出立。下阿井村字荒堀より字井戸、右に禅宗太平山長永寺、字山根、奥湯谷川土橋、左に鎮守八幡宮、字矢谷坂峠、駕篭立場、右谷下見渡に尾白村あり、堅田村字釜ヶ谷、高尾川、右松江城下道追分、高尾川、鞍掛村、原田村字三沢町（駅場）、左止宿前問屋場打止。此より式内三沢神社へ打上、社前迄測る。恒星測定	一六二
	（15）	原田村字三沢町	同　奥出雲町	塗屋祐左衛門 酒屋半十郎		一六二
24 *	昼休	下布施村	同　雲南市	医師横山元格	原田村字三沢町止宿前より、右曹洞宗松雲山蔭涼寺、右松江道追分、上鴨倉村字駒馬坂峠（一里塚）、字妻ノ神峠、北原村、日野川北原橋（但夏は舟渡し）、下布施村、右杵築道・左湯壺道追分、下布施川、東日登村字篠坂、篠坂峠、字花立、字免畑（一里塚）、字一ノ段、左大森大明神社、久野川仮橋、木次村字寸地、右に古城跡、右引込鎮守正八幡宮、木次村本村字木次町（駅場）、字八日市止宿前に打止。	一六二
	（16）	木次町字八日市	同　雲南市	土屋半十郎		一六二

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
２５＊	昼休	伊萱村	同　雲南市	此左衛門	木次町字八日市止宿前より、右に制札、右引込一向宗西善寺、字三日市、日井郷村字里方、右松江・左大社追分を歴て式内斐伊神社へ打上、即松江道を測。左畑中に古跡八本杉あり、神代に八岐蛇を此所に葬る印と云、旧の八本杉は寛永年中洪水に流失、その後の新杉也。式内斐伊神社、同斐伊波夜比古神社、社前に打止。又追分より大社道を測（則左斐伊川堤を測、当時日野川と云）。右古城跡字剣崎又名城名樋山、斐伊川又日野川舟渡、中央堺、給下村、大社道・赤名道追分を歴て。赤名道を一ノ宮社へ打上。左日野川・三刀屋川落合、字小原、右山添に給下村字八幡、八幡社、六十六部回国納経所。此より行先赤名道、街道に三刀屋町あり、一宮、一華表、二華表、額に一宮とあり。楼門、雲州一宮式内三刀屋神社社前に打止。又大社道・赤名道追分より大社道を測。右日野川、伊萱村、日野川向草杖村、式内八口神社、八口大明神。又同川向東三城村、式内屋代神社屋多大明神。八口神社は神代八岐蛇の首を埋と。又上ノ郷村枝和田日野川向、上阿宮村に式内阿吾神社。三社共に測遠術にて得る。又川向に古城跡字城ヶ平、字森坂（右川向は下阿宮村也）、上ノ郷村止宿入口を歴て止宿打上。恒星測定	一六二
２６＊	昼休	石塚村字三谷	同　出雲市	久左衛門	上之郷村止宿入口より同村枝船津村、右に丸山権現社あり、右日野川向出西村枝伊保、式内文武神社、伊保大明神と云、右測遠術にて得。石塚村字三谷、右一畑寺道・左大社近道追分、字一本松、右川向出西村、同求院村、左松一本弁天社、松江道・大社道追分、日野川大津橋前を歴て、此より大社道を測。大津村字大津町を歴て、此より宇佐八幡宮へ打上、社前迄測る。又大津町より、左式内阿須理神社（俗曰竜王神社）、用水川土橋、今市村字今市町（駅場）、字本町を歴て、此より式外山王神社へ打上。右に禅宗延命寺、社前に打止、神社の後古城跡。又字本町より止宿前測所を歴て、此より仕越。左一向宗西楽寺、字中村町、右キスキ・左ミサキ道追分を歴てミサキ道を測、塩治村打止。恒星測定	一六二

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
２７＊	昼休	古志町	同　出雲市	石橋屋長右衛門	今市村今市町出立。塩冶村より石州径道追分一里塚、字善行寺輪、字段上松、右畑中に式内阿利神社、字海上輪、字六反輪、字塩冶町、右日蓮宗題目山妙伝寺、左神門弥治右衛門（大旧家のよし）ヤ印を残。此より神門寺並八幡宮へ打上。左に時宗弓原山高勝寺、神門寺仁王門前を歴て、此より本堂迄測る。浄土宗京師浄華院末天応山神門寺、本堂並寺去々未十二月十二日焼失、旧跡空海のいろは石影響石、其外霊宝、御札と披見候。又仁王門前より八幡宮へ打上。左神門寺裏門外塀構、一ノ華表、二ノ華表、三ノ華表、随神門、塩冶八幡宮社前に打止。式内塩冶神社、塩冶彦神社。此より丑方に古城跡、字大迫山。又塩冶町ヤ印より古志村、左森の中に塩冶高貞塚、左に旧跡神門塚、左に古城跡字浄土寺山、字神原輪、字筏津、古志川板橋（夏は舟渡）、此より辰方古志川上旧跡宇比多気山頂に宇比多気大神社あり、字天庭場、字古志町を歴て、此より弘法寺へ打上。二王門楼門本堂迄測る。右に弁天社、嵯峨大覚寺末真言古義金剛頂山弘法寺、本堂弘法大師自作、霊宝一覧す。又古志町より字畑田輪、右旧跡郷と云有、郡司ノ跡、字中町輪を歴て、此より比布智神社へ打上。右山口街道追分三瓶通り石州志学へ至、左に久類須大明神、式内久奈為神社、字中町輪より式内社前迫測る。式内比布智神社、又字中町輪より右浄土宗阿弥陀寺、左知井宮村内古城跡字高城山。芦渡村字油井分輪、字後田輪、沖川土橋、知井宮村内沖村字本坪輪、字高橋輪、右に一向宗願勝寺、神西村内大島村、字横浜輪、左知井宮村に式内知井神社、右に山伏文殊院、字明善輪、右杵築道追分、神西村枝沖村字六反輪、右砂地松原多し、字引船原、左神西湖辺出る、止宿前打止。	一六二
（　１９）	神西村枝沖村字引船原		同　出雲市	一向宗胎泉寺		一六二

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
	昼休	松崎下村	同　出雲市	式外朝山八幡宮 神主朝山熊子	神西沖村止宿前より神西村内指海村、指海川土橋、板津村海辺字板津浜迄測る。それより無測にて引帰、松崎下村朝山八幡宮鳥居前より大社街道を測。右式外朝山八幡宮（又曰新松八幡宮）社前迄測る。鳥居前より大社道を測。高瀬川土橋、荒木村枝中荒木村、高瀬川土橋、枝北荒木村、杵築矢野村、神光寺川土橋、杵築宮内村、日杵築町、字市場町、町中に大除松、右横町（大鳥居へ出町）、字越峠町、鰐渕山道追分埋抗迄測る。右一向宗浄光寺、越峠横町、左横町子年測止宿前手分へ合測。	一六二
28 *	（　20）	杵築町字越峠町	同　出雲市	本陣白枝屋官三郎 杉谷屋平治郎	此より大社へ参詣。大華表より左右桜並木、字祓場、中華表、石橋、右に番所、銅華表（此より外囲荒垣の内に成）、荒垣（南北百十間、東西八十八間）、右脇熊野川向北島国造館、命主社、阿式社、乙見社、涼殿有檀（無社）、出雲井社、祓社。銅華表より外左脇、素鵞川向千家国造館、御歳社、鷺ノ社、湊社、稲佐社、拝殿御供所、門神社、離宮社、拝殿門神社。銅華表内右に手洗井、会所、左神厩、大炊屋、庁舎。拝殿内神楽所、右舞楽台、左神供井。左右荒垣の内長社二ヶ所、一ヶ所十九社宛あり、諸国ノ神社揺拝所。八足門（此より瑞籬ノ内四十間四方也）、左右回廊、右に観祭楼あり、左右門神社祭神豊岩戸命、右に宇賀ノ社、釜ノ社。八足門の外、左に氏社二社、宝庫。武庫（此は書翰奉納所）、楼門二階附、祭礼に為楽所、此より玉垣ノ内となる、左右供祭所、玉垣（北南二十三間、東西十九間）、右に式内天前社祭神伊弉冊尊、御向神社祭神須西利姫命。玉垣の外、左に筑紫神社祭神神魂命、正面大社祭神大巳貴尊、（本社高八丈、六間四方、床高一丈二尺、四方に一間半の縁）、大社後、玉垣外、式内素鷲神社、祭神素戔嗚尊（宮殿と本社同、但小而巳）、素鷲神社の後の山を八雲山、又蛇山と云。荒垣外（東の山を亀山と云、西の山を鶴山と云）、それより観祭楼に登て宝物を一覧。	一六二

【支隊】　石州向測

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
11月7日	（29）	虫所山村	広島県　廿日市市	庄屋儀左衛門	領津田村枝上岩倉虫所山通、石州街道・津田道追分より柾木峠、虫所山村字河茂、虫川土橋、吉和川飛石渡、又吉和川渡、同川を渡りて虫所山村地内に打止。	一七三
8	昼休（30）	吉和村字トン原	同　廿日市市	一向宗専竜寺	虫所山村より吉和川渡、吉和村焼山峠、字トン原、焼山川板橋、字半坂、中津屋、畑川板橋、字花原組、字小福・熊崎人家前、庄屋佐次右衛門門前に打止。	一七三
	（30）	吉和村熊崎	同　廿日市市	上組庄屋佐治右衛門 下組庄屋益右衛門		一七三
9	（12．1）	筒賀村坂原	同　安芸太田町	百姓十右衛門 百姓弁蔵	吉和村熊崎より、河ノ瀬川板橋、此川端熊崎の在所の後に古城山あり、字駄荷、石原西ノ尾峠、筒賀村、筒賀川板橋（論手橋）、字坂原人家中に打止。	一七三
10	（2）	筒賀村本郷	同　安芸太田町	庄屋庄右衛門 組頭文蔵	筒賀村坂原より、字馬越、馬越峠、市間橋、字布原、石堂峠、字大井椿峠、字萩原、坂原川江道橋、筒賀本村本郷、板原川板橋、筒賀村本郷人家下に打止。	一七二
11	昼休	戸河内村字鵜瀬	同　安芸太田町	庄屋忠右衛門	筒賀村本郷より、字中筒賀、才ノ峠、字松原、大田川舟渡、字轟ノ渡。戸河内村枝殿河内字松原、字上殿、字堀、字峠、笹原峠、字鵜渡瀬、又大田川を渡（木坂ノ渡）、加計村、又太田川を渡（中渡）、此川筋広島へ、広島可部より此所迄舟通路あり、加計村本郷加計市人家中に打止。	一六六
	（3）	加計村本郷加計市	同　安芸太田町	佐々木富四郎		一六六
12	昼休	戸谷村枝鵜木	同　北広島町	百姓惣左衛門	加計村本郷加計市より、丁川（丁橋）、字丁、字田ノ原、同内字穴迫、字川登、戸谷村枝鵜木字勝草、字坂森、枝鵜木、鵜木峠、枝小戸谷人家前に打止。	一六六
	（4）	戸谷村枝小戸谷	同　北広島町	百姓武助		一六六
13	（5）	志路原村	同　北広島町	庄屋源三郎 長百姓常右衛門	戸谷村小戸谷より、中原村枝桙谷、志路原村枝鳥越、字大日延、鍛冶屋橋、鍬橋、梅ノ木橋、本郷内大口橋に打止。	一六六
14	（6）	岩戸村	同　北広島町	一向宗明円寺 外百姓佐兵衛	志路原村大口橋より、枝下ヶ原、船峠、新庄村、右に日野山古城、字横路田、新庄本郷追分、広島街道出迄測る。それより本郷内字伊関、字宮ノ庄大川端に至、右広島・左大森追分抗に繋（広島街道重測）。此より石州街道大森道測量。大川土橋（平田橋）、岩戸村字平田、岩戸本郷止宿前に打止。	一六六

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
15	昼休	亀谷村	島根県邑南町	庄左衛門	岩戸村止宿前より、字塚ヶ迫、枝鉄穴原谷、和田橋、字紺屋、清水橋、字清水、谷橋、字柳谷、宮迫村、枝奥岩戸、新庄村飛地枝七間光り、新庄番所、時雨峠、国界、亀谷村、亀谷川、字下亀谷、出羽組淀原村、字道場、出羽村字山田谷、本村出羽市（駅場）、同人家中に打止。此村より左へ引込本庄山古城跡、又並て二ッ岳古城跡。	一六六
	（7）	出羽村出羽市	同　邑南町	庄屋惣蔵		一六六
16	昼休	高見村	同　邑南町	大庄屋片岡清左衛門	出羽村出羽市より、出羽川板橋、三日市村、三日市（駅場）、原村、銀山御料所、原村字原、高見村、安田川土橋、高見川土橋、高見町、又高見川を渡、高見本村、又高見川土橋、枝萩原、御料所八色石村本村、八色石市（駅場）、同村庄屋前に打止。	一六六
	（8）	八色石村八色石市	同　邑南町	庄屋林左衛門		一六六
17	昼休	川本村字皆口	同　川本町	百姓林左衛門	八色石村八色石市より、本村内字上市、大坂峠、川本村枝矢谷、字皆口、矢谷内下長原、字市井原、字谷（此所にて鉄を製、鍋釜その外を鋳る）、大坂峠より此辺矢谷川を数十度渡る、俗に四十八瀬と云、本村川本市（駅場）、左郷ノ川添、此川舟通路海辺郷ノ津に至る、同所人家中に打止。	一六六
	（9）	川本村川本市	同　川本町	米屋惣七		一六六
18	昼休	馬野原村	同　川本町	一向宗極楽寺	川本村川本市より、郷川舟渡、川下村、谷戸川仮橋、又谷戸川土橋、川下本村、材木峠、馬野原本村、字大部屋、祖式村枝猪ノ目、本村庄屋前に打止。	一六六
	（10）	祖式村枝猪ノ目	島根県大田市	庄屋治兵衛		一六六
19	昼休	白坏村枝高津	同　大田市	一向宗常福寺	祖式村より、矢滝川、祖式市（駅場）、石堂峠郡界、白坏村、本村内大工田川端を歴て、此より白坏村三滝八幡宮へ打上、神前迄測る。当社は疱瘡并乳に霊験ありと、遠近より参詣す。それより引帰大工田川端より、白坏村枝高津、福原川、三久須村阿弥陀坂、佐摩村、字原田、馬ノ子峠、字トツコ、右堂原道・左大森道追分碑に繋。此より大森町向て重測。左に石室山羅漢寺（真言宗、右山の麓大岩窟五百羅漢石像あり）、佐摩村内大森町、羅漢町、駒ノ足町、駒足橋土橋銀山川、右雲州街道・左浜田通長州道追分に繋。新町、新町川板橋、中町、稲荷橋（板橋）、下町に打止、重測。	一六五
	（11）	大森町下町	同　大田市	木村屋七郎次		
20	（12）	同	同	同	終日大雨、大森町逗留。	一六五

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
21	昼休	西田町	同　大田市	百姓覚五郎	大森町出立。無測量、佐摩村の内銀山町地内、大江街道の内温泉津道追分碑より温泉津道横切の測。五郎坂（大登難所）、西田村枝矢滝、西田川板橋、西田町（駅場）、老原川、同所へ上印を残。此より式内水上神社（八幡宮）へ打上、神前迄測る。又上印より、湯里村地内字真木沢字山姥崎、字清水、尾ヶ崎峠、温泉津村、湯里・温泉津村界を歴て、字中山、字馬洗場、温泉津（駅場）、海岸より測所打上の印に繋。此より海岸重測。同浦入江奥に出、打止。	一六六
	（13）	温泉津村	同　大田市	御茶屋		一六六
22	昼休	西田町	同　大田市	百姓覚五郎	温泉津出立。無測、湯里・温泉津村界より、湯里村内霹靂神社へ打上。堤峠、西田川、湯里本村、式内霹靂神社迄測る。それより西田村を歴て、山越引帰時大森町着	一六六
	（14）	大森町	同　大田市	木村屋七郎次		一六五
23	昼休	久利村久利市	同　大田市	弥一兵衛	佐摩村内大森町出立。下町より、左御代官役所、城上神社前を歴て神前迄測る。又神社前より大森町内字宮ノ下、佐摩村下組、字小林、郷ノ迫峠、先市原村、銀山川、又同川を渡二度、字細田、字迫、今市原村、亀谷川、又銀山川渡る、又先市原村妻ノ峠、久利村、本村久利市（駅場）、銀山川を渡る、字小山、字畑中、又銀山川を渡（氏宮橋）、式内山辺八代姫神社前を歴て神前迄測る。又神社前より松代村、銀山川を渡、行恒村字岩根、字平、雲州街道内に打止。此より一宮神社へ打上。吉永村、三瓶川板橋、字町場、字家中、式内新具蘇姫命神社前を歴て神前迄測る。川合村高瀬組の内、字新家、同村内一宮神領、御朱印三百石。神領惣測。神領字門前、神領・御領川合町、一宮神前を歴て一宮打上。石見国安濃郡一ノ宮、式内物部神社、	一六五
	（15）	川合町	同　大田市	町年寄常五郎		一六五
24	昼休	大田北町	同　大田市	町年寄備前屋与右衛門	川合町出立。無測、行恒村より、三瓶川仮橋、郡界、吉永村本村下組、大田南村枝城平大田南町（駅場）を歴て此より大田八幡宮へ打上、神前迄測る。大田南町より大田北村、大田北町、右の方古城跡、三瓶川新市橋、大田北町内新市、西行雪見塚、同木像あり。刺賀村枝一井谷、江谷川土橋、枝江谷を歴て此より式内刺賀神社へ打上。江谷川土橋、神前迄測る。俗曰田中大明神、枝江谷より波根西村を歴て此より式内苅田神社へ打上、神前迄測る。枝江谷より、枝大津、湖水測と重測、波根東村、同村内波根町（駅場）を歴て此より寅年の測所一向宗立善寺門前に打止。	一六五
	（16）	波根東村波根町	同　大田市	百姓和三郎 百姓達右衛門		一六五

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
25	昼休	仙山村枝島津屋浦	同　大田市	長四郎	波根東村波根町より、枝溜福、枝田ノ長、枝前谷、中山峠、朝倉村（本村は往来より右方山中に引込村方也、此村中空越山之麓往来より山越に式内朝倉彦命神社あり、山越難所仍而遠測す）、仙山村枝島津屋浦、石州雲州国界を歴て口田儀村、田儀川仮橋、田儀町田印に打止。	一六五
	（17）	口田儀村田儀町	同　出雲市	大田屋伊三郎		一六五
26	（18）	同	同	同	田儀町逗留測。式内多岐芸神社へ打上、昨日打止田印より、田儀川添を測。字鈩（鉄を製）、字中田儀、字中郷、式内神前にて打止。	一六五
27	昼休	小田村小田町	同　出雲市	佐三治	口田儀村田儀町田印より、小田村字餘草、字青野、御茶屋峠、字廻戸、小田町、小田川、多岐村を歴て、此より式内多岐神社へ打上、神前迄測る。多岐村より、字品原、久村、右に西ノ池、式内国村神社前を歴て、此より神社へ打上、神前迄測る。又神社前より、久村町（駅場）に打止。	一六五
	（19）	久村町	同　出雲市	油屋太郎右衛門		一六二
28	（20）	杵築町	同　出雲市	白枝屋友三郎 杉谷屋平治郎	久村町より、大池村、此より先は去寅測と始終重測、沿海の街道を測。三印を残。此より式内弥久賀神社へ打上。又三印より、板津村字板津浜、別手今市街道測量の打止残抗に繋。此より杵築大社道を測。神西村枝指海を歴て、此より式内佐志武神社へ打上、神前迄測る。枝指海より、指海川船渡、神西湖の流、園村枝外園、古志川船渡、杵築宮内村、尻面川、枝赤塚、字大土地、宮内村杵築町、竪小路（去寅の止宿）半三郎門前手分と合測	一六二

【本隊】

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
29	（21）	鰐淵寺	同　出雲市	浮浪山鰐淵寺松本坊	杵築町出立。【後手】杵築宮内村字越峠町より、杵築矢野村、左大社大華表、左禅宗不老山神光寺、神光寺川土橋、字神光寺馬場、字原分、菱根村、古内取川土橋、入南村を歴て、此より式内阿須伎神社へ打上、遙堪村、高浜川、字阿式、神前迄測る。入南村より、遙堪村字川外、此より鰐淵山へ測。高浜川土橋、本村の内鰐淵山登口字坂口に繋。 【先手】遙堪村字坂口より鰐淵寺道を測。上り口、左に地蔵（此より鰐淵寺迄一町毎に地蔵有）、字大寺山、字新左衛門所、左万ヶ丸、右花田山間を登る。眺望能所諸山を測。字鰐淵寺峠、郡界、楯縫郡になる、鰐淵山内、左に地蔵堂、禁制の札、右華表前、右杵築・左奥院滝追分、此より奥院へ行、無測五町計行先に山王ノ社あり、右に行者ノ社あり、奥ノ院に滝あり、蔵王権現ノ社あり、巌窟中に造る。その前に淵あり、此所に往古鰐住む故に鰐淵山と云。又追分より左に風呂屋と云あり、左厳王院、谷川土橋前松江道追分、即止宿前。此より鰐淵寺本堂へ打上。右止宿松本坊、右念仏堂、右浄観院、左是心院、右覚城院、恵門院、和田坊、右本覚坊、左蜜厳坊、左に現城院、比叡山末浮浪山鰐淵寺、本堂前に打止。	一六二
30	（22）	先手昼休 松寄下村	同　出雲市	朝山八幡宮 神主朝山熊子	鰐淵寺松本坊出立。【後手】松本坊門前より、二王門、地蔵堂、伊努峠、郡界、出雲郡西林木村字大沢、式内伊努神魂神社、此社は小社にて西林木村人家後にあり。同所イ印を歴て式内伊努神社へ打上。又イ印より、武志村字鋤崎、大川堤に至。字布田、石塚村、往来引込大川堤の下、式外雲根神社。大川堤端大津橋手町入口に繋。此日見掛村々式内神社遠測。西林木村式内意布伎神社、東林木村内式内都我利神社、同村内式内伊佐波神社、西林木村式内神魂伊豆乃売神社、同村内式内伊努比古佐和気神社。【先手】無測、神門郡松寄下村朝山八幡宮、神主朝山熊子宅にて昼休、同家古書を一覧。八幡宮華表前より、右高瀬川に添内藤川土橋（此土橋に並高瀬川の箱樋あり、跡樋の中を四十石積位の舟は通行するよし、但内藤川と高瀬川此所十文字になる所なり）、白枝村、天神村を歴て、此より式内神社へ打上。高瀬川、赤川、塩冶村、式内阿利神社社前迄測る。又天神村より、渡橋村、塩冶村地先、又渡り橋村、左臨済宗補陀山観音寺、本堂は当四月廿日に焼失。今市村、左大塚村に式内比那神社、今市町字中村町、ミサキ道追分に繋。それより無測。	一六二

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
文化10年閏11月	（1813）					
1	（12．23）	大津町	島根県出雲市	本陣山田屋又左衛門 中山屋彦太郎	雨天逗留	一六二
2	後手昼休	庄原町	同　出雲市	一向宗宗源寺	大津町出立。手分【後手】神門村、石塚村、日野川大津橋手前より松江街道測、日野川大津橋仮橋、中央界、神立村字土手下を歴て、式内出雲神社打上、社前迄測る。右に式内神代神社。又神立村字土手下より松江道を測、右田地の中に出西村式内久武神社。求院村、左に北島村あり、千家村、又求院村、冨村、出雲郡直江村上分、字高明寺輪、右小山上に岩野薬師あり、俗云信仰する人は美婦を得と、依之参詣おおしと云。字岩野原、字下分、字直江町（人家町並、駅場）、小流土橋を歴て、式内御井神社へ打上。字新市輪、右土手山上に髪網八幡宮、字堀切輪、社前迄測る。又小流土橋より松江道測、庄原村上分、字田波輪、字馬役輪、上分下分界、先手初に繋。それより無測昼休庄原町。【先手】出雲郡庄原村上分下分界より、字馬台垣、本村庄原村、石川土橋、学頭村字灘、本村字軍原、意宇郡伊志見村、即郡界湖水端に繋。此より伊志村式内伊甚神社へ打上。又郡界湖水端より、此より寅年測と重測、即湖水添街道を測、字軍田、佐々布村、宍道川土橋、宍道村宍道町、板橋、寅年止宿前に打止。又左湖水端へ一支引出す。恒星測定	一六二
	（　24）	宍道町	同　松江市	本陣古綿屋与右衛門 葉山屋定右衛門 下郡与一右衛門 与頭六郎右衛門 与頭広右衛門		

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
3	後手昼休	面白村	同　松江市	百姓定四郎	宍道町出立。【後手】寅年止宿前より松江道測、十印を歴て、式内宍道神社へ打上、社前迄測る。又十印より、宍道本村人家下湖辺へ出迄測る。此より湖水添の測（子年の重測）。宍道・白石村界重測、白石村、堂土川土橋、社印を歴て、式内神社へ打上、社前迄測る。式内佐為神社、祭神猿田彦命、式内佐為高守神社、祭神天鈿女命、両神一社。又社印より、下来海村西分、見懸遠測、上来海村式内来待神社負。来海川板橋、下来海村東分、枝弘長寺、同鏡林村、枝柳井、字鳥ヶ崎、先手の初に繋。面白村昼休、松江城下着。【先手】意宇郡林村字鳥ヶ崎より松江道測、本村川土橋、根屋川土橋、湯町村、右に真言宗報恩寺、玉造川板橋、右宍道・左岩屋寺道追分を歴て、湯船明神へ打上ケ、玉造川堤を測。玉造村を歴て、玉造八幡宮へ打上、社前測る。又玉造村より堤通を測。右川向土手山の中腹に式内布吾弥神社。字真谷、字湯村、温泉あり、玉造川を真中にして左右町並人家続、字湯村温泉宿屋七十軒、湯壷五ヶ所家内湯なり、その外小湯壷数多し、式内玉造湯神社三社、社前迄測る。又湯町村追分より松江道を測、字湯町宿（駅場、右制札）、面白村字松在坂、布志名村、左に溜池、字二斗垣、字堂ノ原を歴て、式内布自奈大穴持神社へ打上、社前迄測る。右式内布自布神社、又字堂ノ原より松江道測、福富村字大角、福富川土橋、乃木村、右大原道追分、右小山間に式内野白神社。右に時宗善光寺、ノ印を歴て、神社へ打上、社前迄測る。式内野城神社、大穴持神社、大穴持御子神社、三座合殿、野城大明神と号。又ノ印より、左臨済宗円城寺、字本山松江分、市中白潟、横浜町、才賀町、右横町才賀四丁目、左横浜横町、右才賀二丁目横町、広瀬道追分に印を残。立町、左横町大小路、右浄土宗真行寺、左神角屋小路、天神橋渡、天神町、右浄土宗誓願寺、木戸、左天満宮ノ社、別当天台宗松林寺。左横町灘町通、左右横町、左淵町、右本町一向宗妙宗寺、左新屋小路、右観音小路、右伊予屋小路、左榎小路、本町左横町、右横町本町横町、左小谷屋小路、大橋川大橋手前を歴て、白潟大明神へ打上。八軒屋町、和田見町三辻、左横町和田見町、右和田見横町、左右和田見横町、石鳥居前、随神門社前迄測る。式内売布神社二座。又大橋手前より、大橋、中央界、島根郡末次本町、右に制札、右横町新材木町、右横町紙屋町、御子町、左油屋孫左衛門前打止。恒星測定	一六二
	先手昼休	布志名村字堂ノ原	同　松江市	林蔵		一六二
（　２５）		松江城下末次本町	同　松江市	本陣京屋万五郎（京屋世話人京屋喜兵衛）油屋孫左衛門		一五五

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
4	（　２６）	【本隊】昼休 西岩坂村字元田	同　松江市	甚右衛門	同所逗留。江戸江書状を出す。恒星測定	一五五
5 ＊	（　２７）	熊野村	同　松江市	本陣百姓定十 百姓保十	松江城下一同出立。手分。【支隊】米子街道を測。【本隊】松江城下才賀町、津田街道・熊野道追分より熊野道測、松江分、式内売豆紀神社前を歴て、社迄打上。津田村、ミツキ坂、山代村内古志原村を歴て、式内山代神社へ打上。古志原村より、山代村、大庭村、山代村茶臼山、式内山代神社遠測。勝日神社、勝日高守神社、三社合殿。大庭村字大石を歴て、神社へ打上。佐草村字三反田社前迄測る。式外八重垣大明神、末社式内佐久佐神社。又字大石より大庭村式内神魂神社へ打上。又字大石（此所三辻）より、大草村イ印迄測る。大草村式外大所大明神測遠。又大草村イ印より山代村式内真名井神社へ打上。イ印より、島川小流、熊野川仮橋、日吉村目印を歴て式内沼門神社へ打上。目印より、神納森（式内石坂神社旧跡なり）、字上日吉、東岩坂川、東岩坂村、西岩坂村字黒岩、字元田、字大日、字元田、神社遠測・式内磐坂神社。字雲場、熊野村字大石、神社遠測・式内田中神社。熊野川、字大田、字森脇、又熊野川、川端広瀬道追分を歴て、熊野道打上。熊野川、遠測・式内前神社。熊野村止宿測所を歴て、熊野下ノ宮前迄測る。下宮祭神、天照皇太神宮、火出始神社、境内末社（火置神社、火知神社）、能利刀神社、田中神社、末社楯井神社、速玉神社、布吾弥神社、又熊野下ノ宮前より、上ノ宮前迄測る。上ノ宮、祭神、伊弉諾命、伊弉冊命、速玉男命、事解男命。古書あり。恒星測定	一五五

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
5	【支隊】昼休	宇出雲郷町	同　松江市	茂兵衛	【支隊】松江城下白潟才賀町より、立町木戸、左横町字地行場、右小路組屋敷、米子道・広瀬道追分別手の残しに繋。此より米子道を測。津田村西分、左右松並木、左の方に桜馬場あり、左右桜並木、津田村東分、右引込て禅宗鶴林山長源寺有、下印を歴て、式内鷹日神社へ打上。石華表（額高日大明神）、右に末社今宮大明神、随神門、右に神楽堂、社前迄測る。又下印より、馬橋川土橋、山代村矢田分、竹矢村字井奥、左に天神島あり、名所手間ヶ関と云、字手間、八幡村を歴て、八幡八幡宮へ打上、社前迄はかる。又八幡村より、右溜池、左山越引込馬潟村に式内由貴神社あり。右引込国分寺旧跡、又竹矢村字大門、左臨済宗京都南禅寺末宝亀山安国寺。出雲郷村下分、出雲郷川同橋、字市ノ向、左海辺に名所錦ノ浦と云、右引込鎮守足高大明神社、字出雲郷町（駅場）、右に古城跡あり。此山の裾に式内須田神社（俗云白尾大明神）。揖屋村枝西揖屋、左海辺に名所袖師浦あり、右に大内権現社、字揖屋町、右に恵美須社、揖屋川土橋、右引込式内市原神社。揖屋大社華表前打止。此より揖屋大社へ打上、随神門、右末社弁財天、拝殿迄測る。式内揖屋神社（揖屋大明神と号す）、末社三保津姫神社、本社より左末社式内韓国伊太祇神社。	一五五
	【支隊】	揖屋町	同　松江市	油屋甚兵衛		一五五
6 ＊	本隊昼休	東岩坂村字別所	同　松江市	文右衛門	熊野村川端より広瀬道測、西岩坂村、桑次川、字桑次、東岩坂村、東岩坂川、字別所、岩坂川、駒返峠、領界、能義郡祖父谷村、広瀬村、祖父谷川、広瀬町市中入口、清水口清水橋端を歴て、八幡宮へ打上、八幡宮、境内式内勝日神社。清水橋端より、清水橋、清水町測所を歴て、広瀬松平候陣屋大手前打止。児玉宅右衛門を使者にて御挨拶、国産を銘々被贈。恒星測定	一五五
	（　２８）	広瀬清水町	同　安来市	本陣新出屋利助 灰吹屋伊右衛門		

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
6	支隊小休	荒島村字荒島町	同　安来市	ト蔵屋良兵衛	【支隊】揖屋村揖屋町出立。揖屋村揖屋大社華表前より、海辺付の街道昨今寅年の重測飛々にあり、小川土橋、意東村字意東町を歴て、式内神社打上、右に真言宗円通山宗昌寺、華表、随神門、拝殿、神殿迄測る。式内筑陽神社（俗云大森大明神）、合殿（波夜都武自和気神社）。又字意東町より、意東町（町家二百五軒）、前田川又意東川歩行渡、字羽入、羽入川、能儀郡荒島村、渡り川、字荒島町、右月形大明神、石の室殿あり。一里塚、波掛石（石穴の中に地蔵あり）、見返ノ松と名松一本岩石の上にあり、字猪子山、右広瀬道追分、赤川土橋、田頼川竹橋、赤江村東分、右古城跡、字才下、左禅宗法雲寺、右八幡宮ノ社あり、坂田村上分、冨田川仮橋渡、坂田村下分、今津村下分、飯島村、吉田川土橋、安来村、井尻川仮橋、一里塚、木戸川土橋、米子道・母里道追分、安来町（駅場、人家続町並よし）、字市場町、右市場横町、右に下山大明神、米子道打止。	一五五
6	【支隊】	安来町	同　安来市	今市屋三郎兵衛		一五五
7	本隊中飯	飯生村	同　安来市	庄屋田中徳左衛門	【本隊】広瀬町陣屋大手前より、本町を歴て、式内都弁志呂神社へ打上。本町より、鍛治橋、祖父谷川、市中在分界、広瀬村、石原村を歴て、式内市原神社へ打上。石原村より、植田村、中島村、矢田村、冨田川仮橋、遠測神社、東松井村内式内天穂日命神社、合殿、式内野城神社。実松村、飯生村、利弘村、沢村、松江領折坂村、鍵尾峠領界、吉田川、鳥木村、野外村、井尻川を渡、母里道追分別手の残に繋終。此夜領主より使者国産を被贈。恒星測定。【支隊】安来町米子道・母里道追分より母里道を測、左小山上に八幡宮ノ社あり、宮内村、佐久保村、吉岡村、九井村、野外村、左米子道追分を歴て、清井村、清瀬村、母里領清瀬村、北安田村字石蔵を歴て、式内田面神社へ打上、木華表、右に拝殿あり、社前迄測る。又字石蔵より、字二軒茶屋、服部村、母里村枝井戸、枝原代、左引込式内守留布神社。井尻川土橋、母里市中字新町八軒小路三辻、右下町、左上町通り制札前に打止終。	一五五
7	（　２９）	母里下町	同　安来市	本陣宇山屋房右衛門 加納屋吉右衛門		一五五

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
8	【後手】 【先手】昼休	門生村	同　安来市	百姓亀助	母里下町出立。【後手】野外村米子道・母里道追分より米子道を測、一本松峠、門生村を歴て清水観音へ打上、清水村清水観音堂迄測る。清水村天台宗梶井門跡末瑞光山清水寺、十一面観世音菩薩（毘首羯摩作）、阿弥陀仏（春日作）、常行堂、胡摩堂、坊中六坊（大宝坊、杉井坊、見性院、覚善院、松寿院、蓮乗院）。門生村より、字坪坂、門生村、松江・広瀬道追分を歴て、米子道を測（即海辺付の往来なり）。吉佐村、長迫川土橋、口留番所、国界、陰田村、陰田橋、口留番所、目大谷村、町大谷村、大工町、板橋、塩町、米子町分茶町、板橋、日野町、道笑町三ッ辻、左横町灘町に繋。石橋、麹町（又新町）、止宿前測所に打止。【先手】安来町より、右人家後古城跡字鍛冶屋山、三辻を歴て、寅年重測海辺へ打下、西新町、右横町東新町人家の限海辺迄測る。又三辻より米子道を測、字東町（左制札前、右横町井戸町）、左小路、右に領主の茶屋、安来村、和田村、左妙見ノ社、黒鳥村（右に溜池）、細井村字細井坂（右に溜池）、嶋田村、左稲荷明神社、門生村、広瀬道追分、別手の残に繋終、それより無測。	一五五
	（　３０）	米子麹町	鳥取県米子市	高嶋屋彦左衛門		一五五

忠敬さんが歩いた金沢八景（かなざわはっけい）一覧亭（いちらんてい）跡を訪ねて

大沼　晃

令和３年７月伊能忠敬研究会会報94号に投稿された横溝さんの「令和の伊能大図制作」で能見堂（のうけんどう）下から瀬戸橋までの内海について絵図入りの解説で小生と見解の相違があった。（94号70頁参照）小生、昔から金沢八景周辺を何回か散策しており、また神奈川県立金沢文庫の学芸員から得ていた知識や海岸線などについて情報交換を数回重ねた。

その後、11月になり、横溝さんから毎日新聞９月27日付け夕刊の文化欄に連載中の「没後２００年伊能忠敬を歩く-36-金沢文庫松並木の海岸線今は昔」の探訪記事が送られてきた。それを読み大いに刺激を受け、「出かけて伊能図や測量日記に記載されている一覧亭跡を訪ねて見ないか。よかったら文庫の学芸員を紹介するから当時の金沢八景の様子を詳しく伺ったらどうだろうか」と提案。すぐに快諾の返事があり、小生が諸々のお膳立てを、横溝さんが仲間をつのり、特別ゲストとして毎日新聞社の広瀬登記者（「伊能忠敬を歩く」の執筆者）、伊能研から稲葉末明さん、前田幸子さんと我らを含めて総勢５名で12月12日（日曜日）、出かけることとなった。

そんな最中、菱山代表から「金澤八景一覧亭解明」と題したメールが届き、明治14（１８８１）年測量の迅速測図（じんそくそくず）（陸軍が作成した２万分の１の地形図）に※岬の先端に建物らしきものが表されていると知らせを受けた。（図１参照）

図１　迅速測図原図（北：神奈川縣武蔵國久良岐郡町屋村、南：神奈川縣相模國三浦郡横須賀町外五村）国土地理院所蔵

※『新編武蔵風土記稿　巻之七十四』久良岐（くらき）郡に以下の記載があり、これは思い違いのようだ。

（六浦村）四望亭「小名室ノ木（むろのき）にあり。亭とは稱（しょう）すれど亭舎の義にはあらず。（中略）遠くは富岳を眺み（以下略）」

当初、稲葉さんと横溝さんは、忠敬さんのよくある間違いで、「九覧亭（きゅうらんてい）を一覧亭としたと思っていた。九覧亭が伊能図、測量日記に記載がなく、現在一覧亭は忘れられた状態であったためと言い訳をしていた。

がしかし、山島方位記に一覧亭から測量した富士山の方位が「西三分」（２７３度）と記述があり、また測量日記には「六浦の内※三艘（さんぞう）を通り同室木（むろのき）へ出、一覧亭（一に四方亭という）上り測量し室木にて昼食をなし、浦郷村に至り。」と記述がある。

※三艘：この地が鎌倉の外港だったころ唐船（からふね）が三隻接岸したことに由来する地名だが現在はない。

当日は、幸いに風もなく散策に最も適した小春日。遠方から来られる稲葉さんを考慮し、金沢文庫駅10時半出発→※県立金沢文庫で山地学芸員と一時間ほどレクチャーを受けながら和気あいあいと各々意見交換→稱名寺（北条実時が創建、金沢北条氏の菩提寺）→伊藤博文公も通った老舗・鰻松で昼食休憩→伊藤博文公記念館（現別荘跡、ここで明治憲法草案を練る。公はポケットマネーを出して金沢文庫の財政支援をしたとのこと）→野島公園内のジープ山へ。八景の内海を一望できる一覧亭跡と目される小高い山の頂で集合写真（戦後、進駐軍がジープでよく山頂まで駆け上ったので地元で通称そう呼んだそうだ）→夕暮れ前に金沢八景駅に到着、懇親会後解散。程よい疲れを感じながら帰路に就く。（当日の散策ルート　図２参照）

※金沢文庫：今年から始まったＮＨＫ大河ドラマ「鎌倉殿の13人」で登場する北条義時の孫にあたる北条《金沢》実時が創った稱名寺および書庫で、文書や記録・書籍など広範囲にわたって蒐集した。北条氏滅亡後は、稱名寺が金沢文庫の蔵書を管理したそうで、そのようなことで特筆として一つ上げると大量の反故紙（紙が貴重品であったために一度使った紙の裏側を再利用したもの）が文書類の中に混在しており、解読作業を通してパズルゲ

ームのように中世史の解明に役に立っているとのこと。

明治30年（1897）に伊藤博文公の尽力で復興されたが、関東大震災で大きな被害を受けた。その後、昭和5（1930）年神奈川県が県立博物館として復興させ、中世歴史博物館（鎌倉時代・南北朝時代）として貴重な資料の保存や研究および展示のほか、稱名寺本堂内の復元や図書室なども館内にある。

〈横溝さんからの寄せられた後日談〉

山地学芸員から伊能図について「白井崎、君ヶ崎、琵琶島が画かれていない。泥亀（でいき）新田のところは泥亀永島家の屋敷があったところで、泥亀新田は内海全体に元禄年間から明治中期まで広がったり、基の海になったりした」と言われた。

「伊能忠敬が金沢八景を測量したことは知らなかった。測量日記の証拠があり、令和の伊能図とともに、金沢文庫で紹介したい」とありがたい言葉を戴いたとのこと。

横溝さんは「伊能測量の初期段階で、隊員も身内の6名で構成され、費用もほとんどが自分で出した個人事業であったため、実測図として不完全さはあります。もう一図国宝の大図があるのですが、それがどのように描かれているのか、見ていないので分かりません」と山地学芸員へメールをしたそうだ。

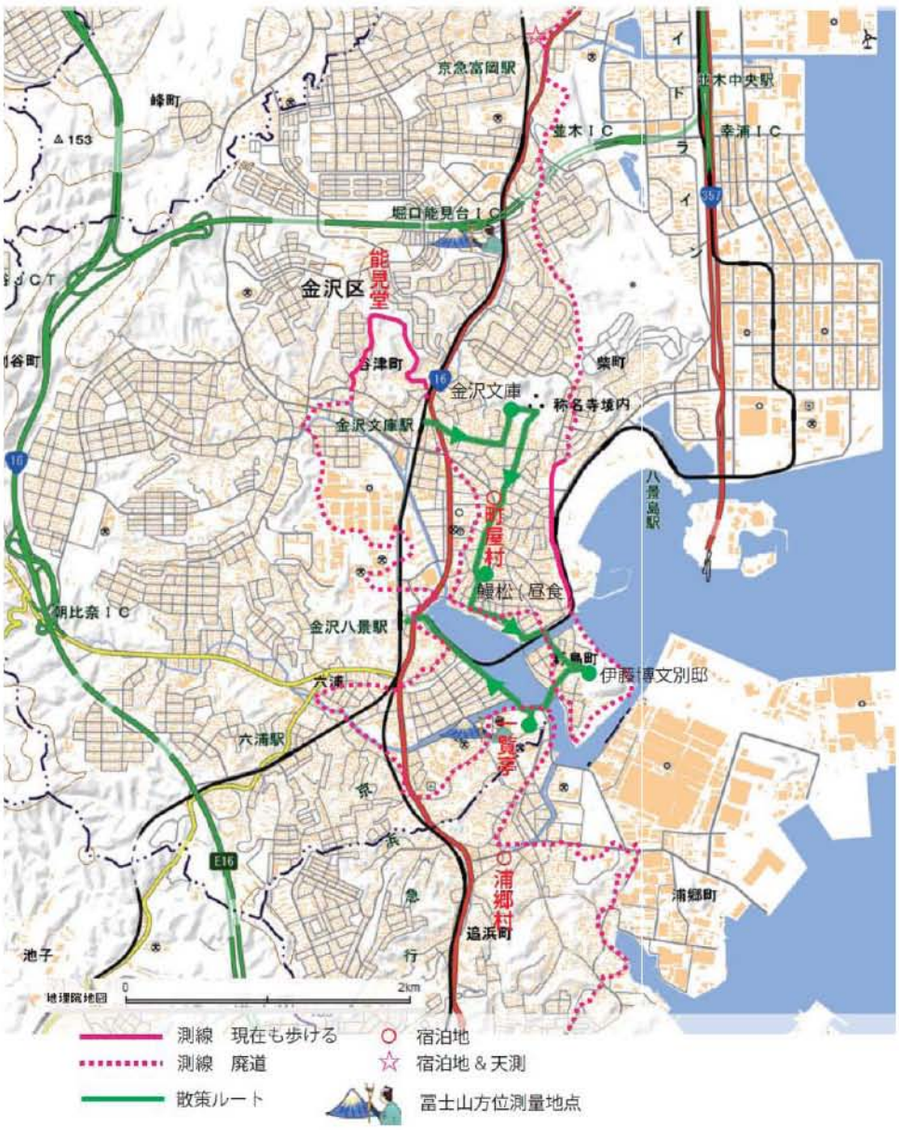


図２　散策ルート（作図　令和の伊能大図をつくる会　横溝高一）

旧伊藤博文金沢別邸

足裏に忠敬の足跡を記憶する

毎日新聞学芸部記者・広瀬　登

実に楽しい一日でした。二〇二一年一二月中旬の日曜日、穏やかな陽光に包まれた金沢八景一帯を、伊能忠敬研究会の方々と歩けたことは、毎日新聞で連載「伊能忠敬を歩く」を執筆している私にとって、記者冥利に尽きます。

連載第三十六回（九月二七日掲載）の執筆のため、私が金沢八景の地を訪れたのは、まだ夏の太陽がジリジリと照りつけているころでした。第二次測量の途上にあった一八〇一年五月二二日（旧暦四月一〇日）付「測量日記」にある「一覧亭」という記載に目が留まり、一度訪ねてみたいと思ったのです。初期の「測量日記」には、宿場名とその間の距離、天候、天測の有無、役人の名前などのほかは、ほとんど固有名詞の記載が見られません。そんな中、わざわざ「一覧亭」と記されているのは、何か忠敬の琴線に触れるものがあったのではないかと考えたのです。

ここで少し、私の連載について書かせてください。振り返れば、二〇一八年三月、忠敬の天測について調べた大西道一さんの記者発表の時だったと思います。渡辺一郎さんとの雑談の中で、忠敬没後二〇〇年が話題に上りました。ちょうど記念の年に何か続き物を書けないか、もやもや頭の中で考えていた私に、渡辺さんは「忠敬のように、まずは一歩踏み出しなさい」と背中を押してくれました。

あまり難しいコンセプトを考えず、ただただ忠敬の生きた足跡をたどろうと、同年五月、千葉・九十九里浜の生家を訪れた第一回を嚆矢に、佐原、江戸・黒江町などを経て、東京・北千住から第一次測量で測量隊が歩いた奥州街道を北へ北へと向かいました。伊能図と「測量日記」を頼りにしながら、往時と二〇〇年後の今の間にある歴史を、連載の行間から浮かび上がらせようとしたのです。紀元二世紀のギリシアの旅行家、パウサニアスの「ギリシア旅行記」をちょっと意識し、街道沿いの旧跡にまつわる歴史や言い伝えなども織り込んでいきました。

盛岡を訪れ、いよいよ北海道・吉岡へ渡ろうとした二〇二〇年春、新型コロナウイルスの感染が拡大、地方出張が一切できなくなりました。何とか連載を続けるために、伊能図の作成方法やシーボルト事件、新たな小図の発見などで1年以上、話題をつなぎました。コロナ禍も一時的に落ち着き、ようやく私が住む東京都の境を越え、忠敬の歩いた道を踏めたのが金沢八景の地だったのです。

九月の取材の際、「デジタル伊能図」で地理院図と伊能図を見比べた私は、京浜急行・金沢八景駅の南約1キロにある「瀬ケ崎本通り」がほぼ江戸時代の海岸線のままであることに注目しました。住宅がひしめき、広重の浮世絵の景色にほど遠いことが残念でしたが、道端にNHK大河ドラマ「鎌倉殿の13人」にも登場する源範頼に関連する碑もあり、うれしい発見でした。ジープ山から野島方向を眺めた時は、忠敬も同じ空を見ていたかもしれないと想像すると、感無量でした（実は、ジープ山に登った後、さらに日産追浜工場の区画にある「烏帽子巌之跡碑」まで歩を進めました。紙幅が限られていたため、記事では触れられませんでした）。

伊能忠敬研究会の方々とご一緒した今回は、九月に歩いたエリアと平潟湾を挟んだ反対側から室木地区を目指しました。まず足を運んだ金沢文庫隣接の称名寺は、横浜支局に在籍していた約二〇年前の新人時代に、境内で開かれた芸術祭を取材した思い出の場所。久しぶりに訪れると、当時展示ブースがひしめいていたはずの参道が狭くて意外でした。続いて寄った伊藤博文ゆかりの名店「鰻松」に掲げられていた扁額には「蘭洞書」との銘を見つけました。昭和の著名な尺八奏者で随筆家、釣りの名手、コメディアン・石橋エータローの父でもあった福田蘭童の筆によるものでしょうか。香ばしいうなぎを口にしながら、思いを巡らせました。昼食後に訪れた旧伊藤博文金沢別邸の木々を揺らす風の音、海からかすかに流れる潮の香りは、コロナ禍で自宅に籠もることが多くなり、鈍りかけていた五感を再び刺激してくれました。

人間には視覚や聴覚による記憶だけでなく、その土地を歩いた足の裏に刻印される記憶もあります。伊能図は見ているだけでも楽しいですが、実際にその地を踏みしめると、足の裏側を通して、令和の世と忠敬が生きた二〇〇年前がつながるように感じます。

コロナ禍で自由に移動できない日々がしばらく続くかもしれません。しかし、必ずや収束すると信じております。そのあかつきには、また忠敬の足跡をたどる旅を再開する予定です。全国の伊能忠敬研究会の会員の皆さま、ぜひ、「うちの近所にはこんな忠敬ゆかりの場所が

ある」「こんな面白い話題を調べている」と教えてください。皆さまとお会いできる日を心待ちにしています。

末筆になりましたが、今回の金沢八景散策をともにしていただいた横溝高一さん、大沼晃さん、稲葉末明さん、前田幸子さんに深く感謝いたします。ありがとうございました。またご一緒させていただければうれしいです。

ジープ山

金沢八景散策紀行
～夕照橋を渡り室ノ木ジープ山から平潟湾と野島を眺望する～

稲葉　末明

「測量日記」に洲崎持ちとある野島は、かつては砂州によって陸続きの陸繋島でしたが、水路の建設などで分断されて島となっています。今は金沢区野島町となって旧伊藤博文金沢別邸があり、野島山（標高４０．１ｍ）下は野島公園となっていて周りには住宅が並びます。

旧伊藤博文金沢別邸から野島公園を過ぎて住宅地を出ると景色が一変しました。

なんと、目の前に平潟湾が広々と展開するのです。舟が行き交い岸辺には釣り船が舳先を並べています。右方向にはかっての「内川入江」へと続いています。

「測量日記」第四巻を既にお読みになった会員諸兄に伺います。

四月九日の記事に、「それより入海通り赤井村、宿村（内に小泉あり）、両村を釜利谷という。村々役人案内。町屋村止宿」とあります。さて、釜利谷を出て対岸の町屋村へはどのような経路をたどったのでしょうか。

また、四月十日の記事「泥亀新田（野田文蔵御代官所）、それより瀬戸明神」では、泥亀新田から対岸の瀬戸明神へはどのような経路をたどったのでしょうか。

その答えは、「洲崎村と瀬戸明神の間の「瀬戸橋」を渡った」です（これは横溝高一さんに教えてもらいました）。測量日記には「瀬戸橋」を渡ったとの記述はないので、洲崎に来て初めて納得できたことです。瀬戸橋は嘉元三年（１３０５）に鎌倉幕府の北条貞顕の命により架けられた海上橋です。かつて瀬戸橋の北側には平潟湾からさらに内側へ続く「内川入江」とよばれた入海が広がり、瀬戸橋の辺りは狭い海峡となっていて、流れも速く渡るのに難儀であったといいます。瀬戸橋は海峡の間に島を築き二つの橋を架けて、瀬戸と洲崎の間を行き来できるようにしたものです。内川入江は江戸時代から既に埋立てが始まり、現在は瀬戸橋の奥に内海が広がる景観を見ることはできません。

閑話休題

さて、平潟湾の対岸には忠敬さんが「測量日記」に六浦の内と説明した室ノ木（むろのき）が見えます。ここから「夕照橋（せきしょうはし）」を渡って平潟湾を横切り室ノ木へ渡ります。野島から室ノ木へ渡る手段であった渡し舟は昭和十九年（１９４４）に「夕照橋」が架かって廃止になりました。現在の「夕照橋」は４代目です。

「夕照橋」の名は、「金沢八景」のひとつ「野島夕照（のじませきしょう）」から採られたものです。「夕照橋」から見る夕暮れ前の野島と平潟湾の景色は、歌川広重が描いた「野島夕照」と絵に添えられた和歌「夕日さす野島の浦にほす網のめならぶ里のあまの家々」そのままの美しさです。野島山、平潟湾に小舟を浮かべて網を引く漁師、渡し舟、野島山下に並ぶ海士小屋を彷彿とさせてくれます。

「測量日記」に忠敬さんは室ノ木の「一覧亭」に上がって測量したと記録しています。

「新編武蔵風土記稿」に一覧亭は「山頂嵩高にして登臨すれば、四方ともにいさゝかもさゝゆべきものなくして甚佳景なり。西は郡中の山々を始めとして遠くは富岳を眺み、北も郡中の山をこえて…羣山畫きたるがごとく、又眼下に野嶋浦および金澤の八景を一望のうちに聚め、もっとも絶勝の地なり」と記載されています。しかし戦後、付近の軍港化による埋め立てのために削られて次第に低くなり、米軍のジープの上り下りが頻繁となって「ジープ山」の名前で呼ばれるようになりました。

「ジープ山」こと一覧亭で富士山を測った記録は「山嶋方位記」第一巻に「西3分」と出ています。これは真北から273度の方向です（これも横溝高一さんに教えてもらいました）。

夕暮れ迫る平潟湾と野島を背景に、富士山と思われる方向に向かって並びパチリと集合写真を撮りました。
後列左から　広瀬、大沼
前列左から　横溝、前田、稲葉

「一覧亭」の今昔を歩いてみた

前田　幸子

伊能図発見！

「一覧亭」を知ったのは今から五年近く前のこと。図書館で寛政年間の江戸近海測量図を見て、「こ、これは伊能図では？」と驚き、「伊能図発見！」と興奮した。しかし確認してみると、その地図はすでに鑑定済みで、「伊能図ではない」とのことであった。落胆したが、その地図の測線や地名、家並みの表現は伊能図によく似ており、『測量日記』の記述とも合致している。特に、岬全体に大きく書かれた「一覧亭」の文字は伊能大図とそっくりで、この地図の出自を物語っているように思われた。「やはりこれは第二次測量の未完成図なのではないか」という思いが「一覧亭」の文字と重なりあって今も残っている。そのようなわけで、毎日新聞の連載「伊能忠敬を歩く-36-」の記事中、野島公園「ジープ山」のくだりを読んだときには心が躍った。以前、私が「一覧亭」の場所を地図で調べてたどり着いたのも、やはり野島公園のところだったからである。これはぜひ見に行かねば、と「金沢八景散歩」のお誘いに一も二もなく手を挙げた。

「一覧亭」の面影

「ジープ山」は戦後、進駐軍の兵士がジープを乗り回していたところなのでこの名がついたという。現在は団地に隣接した野島公園（室ノ木地区）となっており、当日は日曜日ということもあって大勢の親子連れが賑やかに遊ぶ平和な光景が広がっていた。そんな公園の隅にぽっこり盛り上がった高台があり、階段を上ると頂上は柵で囲まれた展望台であった。ここが「一覧亭」の跡なのだろうか。予想以上に小さく人工的であるうえ、そこから見える景色には、江戸近郊第一の景勝と称えられた昔日の姿は全くない。覚悟はしていたが、海岸線の余りの変貌ぶりに呆れてしまった。脱力して柵にもたれると、夕暮れの海風が巻くように吹き過ぎた。その時、景色は様変わりしたが、風や陽光や空の雲は江戸の人々のものと同じで全然変わっていないと気がついた。どんな形にせよ「一覧亭」を偲ばせる遺構が残っていることに安堵し、感謝しながら展望台を後にした。

「一覧亭」の実像

享和元年（1801）の伊能測量当時の「一覧亭」とは実際にどのようなものだったのだろうか。『測量日記』には「一覧亭、一に四方亭という」とあり、「一覧亭」は「四方亭」とも言われていたことがわかる。「四方」には「四つの方角」の意味と「四角形」という意味がある。「四方亭」は「見晴らしがよく」「形が四角い」建造物だったのではないだろうか。いずれ実在していたことは間違いないので浮世絵と文献を手掛かりとして調べてみた。画像①『西湖之八景武之金澤模寫圖』には「一覧亭」として四角い建造物が描かれている。また、画像②『諸国名所記　武陽金澤一覧山』には、見物人の背後に何やら台形の建造物が見える。一方、『新編武蔵風土記稿』（文化7年起稿、文政13年完成）に

は「一覧亭（四方亭）」と思しき「四望亭」について、「小名室ノ木にあり。亭とは称すれど亭舎の義にはあらず、尋常の高山なり。」と記述がある。四望亭は「亭」と言うが建物ではなく、普通の高い山だという。どうやらこの時期にはすでに建造物が失われていたようである。

富士山の方位線

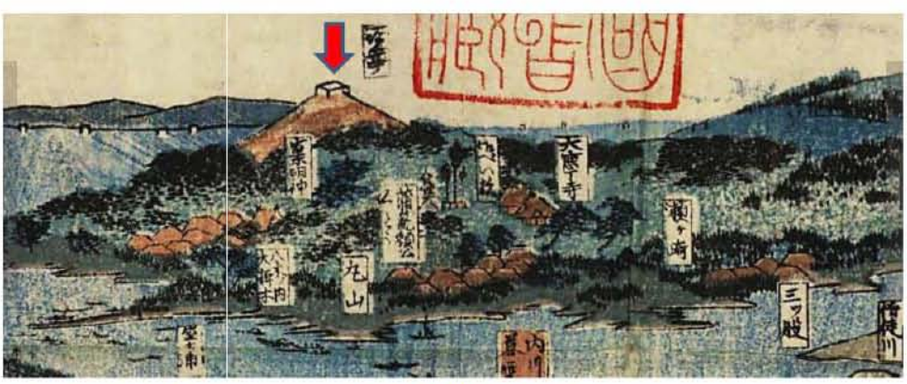
『新編武蔵風土記稿』の「四望亭」の記述はさらに続き、「山頂嵩高にして登臨すれば四方にいさゝかもさゝゆべきものなくして甚佳景なり」とある。画像①でも「一覧亭」の背後には雄大な富士がそびえ、周囲には立木や障害物も見えない。ここが富士山を測るのには絶好の場所だったことがわかる。しかしこの場所から富士山を測り、『山島方位記』にも数値が記録されているのにも関わらず、伊能図には「一覧亭」から富士山への方位線が画かれていない。そもそも室ノ木から「一覧亭」への測線もなぜか画かれていないのである。散策後に湧いてきたこれらの疑問を解くために、再度あの江戸近海測量図を見に行きたいと思っている。

【註】

画像①『西湖之八景　武之金澤模寫圖』北尾重政（1739～1820）国立国会図書館デジタルコレクション

画像②『諸国名所記　武陽金澤一覧山』歌川広重（1797～1858）神奈川県立金沢文庫蔵

画像②（部分拡大図）
※赤い矢印は筆者加筆



画像①（部分拡大図）　※赤い矢印は筆者加筆

画像②（全体図）　※赤い矢印は筆者加筆

画像①（全体図）　※赤い矢印は筆者加筆

「富岡八幡宮奉納目録」
―渡辺一郎さん―

渡辺一郎さんが他界されて、早や二年近くになろうとしています。「手もとにあった資料の行く末を案じていたが、富岡八幡宮に奉納し、資料館で保存していただくことになった。これで一安心。」とうかがっていましたが、他界される直前（一週間足らず）に作製されたという※「富岡八幡宮　奉納目録」のデータを、データの保存を託されていた「令和の伊能図をつくる会」の横溝高一さんからいただきました。富岡八幡宮、および横溝さんのご了解をいただき、誌上で紹介いたします。

資料館は境内、本殿に向かって左側、八幡宮関係資料のほか、郷土資料などを中心に収蔵する施設です。渡辺さんの資料の一部は「伊能図関連資料 奉納 渡辺一郎 貞子御夫妻」として館内で展示もされています。詳しくは富岡八幡宮のホームページから「資料館」を選択してご覧ください。展示コーナーの部分的な写真も見られます。

（鈴木純子）

ご注意下さい!!

資料館への入場（大人３００円・子ども１５０円）は、**事前予約制**となっています。

入場ご希望の方は，**事前に電話での予約をお願いします。**（０３―３６４２―１３１５）

展示されていない資料閲覧のご希望がありましたらその際にご相談下さい。

※次頁に掲載した目録は、掲載にあたり、目録の分類、出版情報の追加などに調整を加えている。

富岡八幡宮 奉納目録　２０２０年５月23日
令和の伊能大図をつくる会 渡辺 一郎 奉納

【書籍】

渡辺一郎監修「伊能図総覧 上・下」河出書房新社（２００６年12月１日）
同右　上刷り出し 監修用一式
渡辺一郎監修「伊能図大全 全７冊」河出書房新社（２０１３年11月29日）
大谷亮吉「伊能忠敬」岩波書店（大正６年）（復刻：昭和54年、名著刊行会）
保柳睦美「伊能忠敬の科学的業績」古今書院（昭和49年）
森 洋久「森幸安の描いた地図」紀伊國屋書店（２０１６年４月）
人物往来社編「女性人物事典」
内田実「広重」岩波書店（昭和53年）
渡辺一郎「伊能測量隊まかりとおる」ＮＴＴ出版（１９９７年９月 初刷 ２００２年８月 ６刷）
渡辺一郎編著「伊能忠敬測量隊」小学館（２００３年８月）
伊能忠敬研究会編「忠敬と伊能図」江戸東京博物館 伊能忠敬展図録（１９９８年）
伊能忠敬研究会、日本地図学会監修「アメリカ大図とフランス中図展図録」（２００４年４月）
渡辺一郎監修 星埜由尚編「完全復元伊能大図」伊能大・中・小図フロア展図録（２００９年４月）
渡辺一郎「伊能忠敬の歩いた日本」ちくま新書（１９９９年）５冊
渡辺一郎「伊能忠敬の地図をよむ」河出書房新社（２０００年11月）

【１枚ものの地図】

渡辺一郎監修「国立国会図書館蔵 東京周辺伊能大図複製」房総より富士山 数枚一式
渡辺一郎監修「令和の伊能大図１００号富士山」複製着色再現 試作 １枚
渡辺一郎監修「江戸（90号）周辺アメリカ大図原寸複製無着色」数枚 発表用 １式
横溝高一「アメリカ大図福岡（１８７号）原寸大着色試作」１枚
武揚堂版 東京国立博物館蔵伊能中図 １／２ 模写８枚 箱入り
同 東京国立博物館蔵伊能中図 原寸複製 切り図１冊 Ａ３ファイル入り
渡辺自費出版「英国にあった伊能小図」３枚縮小模写
伊能小図から制作した英国海図２３４７号 英国にて複写
英国で撮影した伊能小図写真 実物の２／３ 程度
人文社刊「江戸府内図 模写」原寸切り図 箱入り
「忠敬歩測練習の道」永野達代制作 渡辺刊行
伊能測量日程一覧プリント、伊能忠敬肖像ポスター、フランス中図ポスター 江戸周辺シーボルト作 日本図複製 日本地図資料協会版
アメリカ大図 縮小着色図 高知ほか ３枚
大図欠図補充用
伊能大図総覧１枚刷り99号、93号、１００号、１８８号、１８９号、１９０号、１９２号、２０１号 計８枚

【録音・録画資料】

渡辺一郎「伊能測量隊まかりとおる」ＮＴＴ出版全録音テープ 横浜市録画
「伊能忠敬測量日記解読」ＤＶＤ イノペディアをつくる会 発行
「デジタル伊能図」河出書房新社２０１５年11月
伊能大図欠図データ 90号、99号、１３５号
渡辺一郎監修「伊能忠敬ビデオ 学問と情熱７巻」紀伊国屋出版 放映権つき
手作りビデオ「忠敬歩測の道」
手作りビデオ「伊能忠敬」
「測量旅程、人物データベース」ＤＶＤ
渡辺講演「伊能あれこれ」ＤＶＤ
渡辺講演「私の伊能図発見物語」ＤＶＤ

【その他（古書など）】

「越前国三方郡日向村 庄屋文書」の一部
「御行幸の記」寛永３年
「広重画 絵本 江戸土産」表紙、１頁なし
「五三次北斎道中画譜 全」
「朝倉当吾伝」
「伊能忠敬関係文献総目録」イノペディアをつくる会

富岡八幡宮資料館のサイト
http://www.tomiokahachimangu.or.jp/htmls/siryokan/siryokan.html

資料管内の伊能図関係の展示

日本学士院中図の詳細画像の公開

玉造　功

２０２１年６月に日本学士院所蔵資料６６１点が国文学研究資料館の「新日本古典籍総合データベース」で公開され、「伊能忠敬」で検索すると日本学士院所蔵の伊能中図８点の詳細な画像を図１のようにダウンロードできるようになった。

日本学士院所蔵の中図については『会報』２号で故渡辺一郎氏が詳細に解説している。それによると、大谷亮吉が当時の帝国学士院の委嘱により、伊能忠敬伝に取り組み始めたとき、資料として明治42年にこれらの中図を複製したと考えられている。

文政４年に幕府に上呈された正本が明治６年に焼失した後、伊能家より副本が明治政府に献納されたが、関東大震災で焼失した。伊能家副本から複製したこの中図８点は完成度の高い美麗な模写本であり、最終上呈本の姿をうかがえる点でも貴重である。それが図２のように細部の地名まで判明できる詳細な画像で公開されたことは意義深いものである。

「新日本古典籍データベース」では「日本語の歴史的典籍」約30万点を画像データ化しデータベースを構築中だが、「日本語の歴史的典籍」には自然科学系の諸分野にも及んでおり、東京国立天文台所蔵の『星学手簡』（高橋至時、間重富らの書簡を至時の次男渋川景祐が編集）も閲覧できる。このことを菱山剛秀会員にご教示いただき、念のため「伊能忠敬」で検索したところ学士院中図に出会うことが出来た。既にご存じの方も居られるとは思うが、『伊能忠敬の地図作製』巻末の「伊能図関連Ｗｅｂサイト一覧」にも未掲載であることから、全国の会員にお知らせする次第である。

なお、「新日本古典籍総合データベース」の画像を利用する場合は各所蔵先に問い合わせる必要がある。

日本学士院の場合はＨＰの「お問い合わせ」からメールで利用を申込み、メールで送られてきた書類に必要事項を記入して（押印不要）、メールに添付して返送する。利用条件は、日本学士院の所蔵である旨を明記することと、目的以外での利用をしないことの２点である。

https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100319429/

図１　『伊能中図（関東）』　日本学士院所蔵

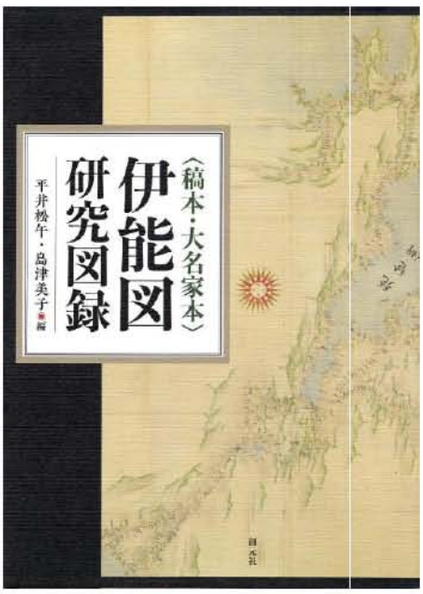
図２　図１の鎌倉・金沢八景を拡大　日本学士院所蔵

【書籍紹介】

平井松午・島津美子編『〈稿本・大名家本〉伊能図研究図録』
平井松午編『伊能忠敬の地図作製　伊能図・シーボルト日本図を検証する』

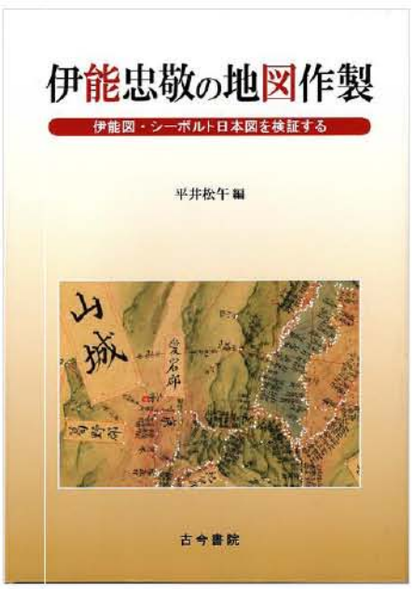
星埜　由尚

このたび徳島大学名誉教授平井松午氏が中心となってまとめられた平井松午・島津美子編『〈稿本・大名家本〉伊能図研究図録』が創元社創業１３０周年記念出版の一環として創元社から上梓された。A4版３４４ページオールカラー印刷の大冊である。



また、同じく平井松午氏が編者となりまとめられた『伊能忠敬の地図作製 伊能図・シーボルト日本図を検証する』が『伊能図研究図録』のいわば姉妹編として古今書院から発刊された。こちらは、B5版２８０ページ、カラー図版８ページである。

これら2部の研究書は、平井松午氏らが平成26～27年度に行った徳島大学付属図書館が所蔵する伊能図についての「伊能図検証プロジェクト」と平成30年度から令和3年度にわたって科学研究費補助金を得て行われた「伊能図の成立過程に関する学際的研究―忠敬没後２００年目の地図学史的検証―」の成果である。



これまで、鈴木純子・渡辺一郎編『最終上呈版伊能図集成』(柏書房)、渡辺一郎監修『伊能大図総覧』(河出書房新社)、渡辺一郎監修『伊能図大全』(河出書房新社)などのほか、博物館展示に伴う図録など、伊能図を収載した図録は、様々なものが出版されてきたが、『伊能図研究図録』は、研究の過程で調査した伊能忠敬記念館ほか全国16の伊能図所蔵機関の伊能図を収録し、それらの調査・研究成果をまとめて図録としたもので、「研究図録」にふさわしい内容となっている。特に、これまでの図録が最終版伊能図を主体としたものであったことと対比して、全国測量過程での中間図を多く収録しており、下図についての分析も加え、伊能図の作製・成立過程に新たな視点から迫ろうとしている。

一方、『伊能忠敬の地図作製』は、平井松午氏を中心とした、伊能図検証のための研究に参加した様々な分野からの研究者の論攷を集成した学術研究書である。「伊能忠敬と測量術」、「伊能図の検証」及び「伊能図の比較分析とシーボルト日本図」の３部構成となっており、伊能忠敬の測量技術の歴史的な位置づけから伊能図の作成過程の様々な問題、主要な伊能図の分析からシーボルト日本図との関連まで、幅広い検討課題を様々な分野の専門家が論じている。

伊能図が完成して２００年が経過し、このような研究書が出版されたことは、極めて喜ばしいことであり、伊能忠敬研究に掲載された論文も引用されており、伊能忠敬及び伊能図の研究に携わる伊能忠敬研究会会員にとっても、熟読して今後の伊能図研究に役立てていくことが大切であると考える。

これまで、伊能忠敬研究会は、伊能忠敬及び伊能図の普及に力を入れ、相当な成果を上げてきたが、伊能図に関する書誌学的研究は別として、伊能図作製の科学技術的側面については、これまでの通説にとらわれ、あまり関心を払ってこなかったのではないか、と自戒を込めて反省するところがある。東京都立大学名誉教授野上道男氏による一連の精力的な研究なども踏まえ、今一度伊能図の科学技術的側面に関する研究の方向について考えてみる必要があろう。

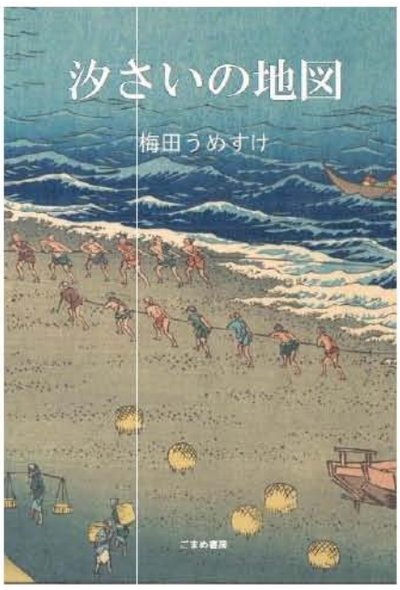
学術研究書は、一般に高価とならざるを得ない。この2冊も高価であるが、関心のある方は、是非手に入れて新たな視点から読んでみていただくことをお勧めする。

梅田うめすけ著『汐さいの地図』

菱山　剛秀

伊能忠敬の測量開始から222年目に当たる6月11日（旧暦閏4月19日）に伊能忠敬の生涯を綴った小説『汐さいの地図』が刊行された。

著者は、千葉県出身の噺家、四代目「桂　右女助」、ペンネーム「梅田うめすけ」である。



内容は、目次にあるように、忠敬の生涯をほぼ10年ごとに区切り、その時々の体験として描いているが、忠敬を取り巻く人物は、皆深い愛情で結ばれているのが印象的である。特に、忠敬を陰で支えた番頭の柏木久兵衛と柏木幸七父子のこと、忠敬の子を残しながら正妻にはならずに世を去った妙諦とその子供たち、長女いねと盛右衛門を勘当した理由など、これまでの忠敬を扱った物語とは異なる視点で描かれている。

また、著者は忠敬が幼少時代を過ごした地域の出身ということもあり、歴史的な背景や地理的描写がリアルである。その一方で、長谷川平蔵、上杉鷹山などを登場させて時代小説として、読者の興味を引き付けることもしている。

なお、本書の執筆に当たっては、伊能忠敬研究会の会誌を参考にしたとのことである。

（梅田うめすけさんからのコメント）

執筆に際しては、極力史実に添った創作を心がけ、郷土史家諸氏の先行研究に加え、貴会が発行されている「伊能忠敬研究」を参考にさせて頂きました。ご報告するとともに心から御礼を申し上げます。

学術面のみならず、例えば長女いねの勘当の顛末云々など創作に役立つ記事が多く、それらに仮説を立て、自分なりに解明することで、これまで語られなかった先生の一面を描けたのではないかと自負しております。

『汐さいの地図』目次

序　章　七歳
第一章　三次郎　十七歳
第二章　佐忠太　二十七歳
第三章　源六　三十八歳
第四章　三郎右衛門　四十九歳
第五章　勘解由　五十七歳
第六章　推歩先生　六十九歳
第七書　東河
終　章

四六判　306ページ
2022年6月11日　ごまめ書房刊行
価格　1650円（税込）

『歴史道』伊能忠敬と江戸を往く

「週刊朝日」のムック本『歴史道』Vol 21で伊能忠敬を特集しており、伊能図と全国測量に関する部分を伊能忠敬研究会で監修した。

巻頭の折り込み地図4ページ分にはゼンリン小図が使われ、各地の拡大図には、国会図書館やアメリカ議会図書館所蔵の明治初期の写本のほか、国立公文書館所蔵の第一次測量による「松前距蝦夷行程測量分図」、山口県文書館所蔵の毛利家に提出された大図、東京国立博物館所蔵の第七次測量で作成された「九州沿海全図」など大名家の要請で作成された伊能隊の手による大図も使われている。裏面には2ページを割いて国会図書館所蔵の富士山の大図が掲載されている。

本文は、映画「大河への道」に出演している中井貴一、松山ケンイチによる対談、忠敬の生涯、測量方法、全国測量等の解説で構成されている。

A4判　96ページ
2022年5月20日　朝日新聞出版発行
価格　930円（税込）

測量の日『くらしと測量・地図展』に出展

6月3日の「測量の日」にちなんだ『くらしと測量・地図展』が例年国土地理院関東測量部と地図関連団体により開催されている。今年は「地図と写真で見る江戸・東京の200年」をテーマに6月1日から3日まで新宿駅西口広場イベントコーナーで開催された。今回、研究会は協力依頼を受け、「伊能忠敬特設コーナー」に御用旗やパネルを出展した。

会場は新宿駅構内とあって入場者が多く、5月20日から上映が開始した映画『大河への道』に関連した解説文をはじめ、各種伊能図、測量風景を描いた絵図、伊能測量の方法など各パネルの前に足を止めて熱心に読む人の姿が多くみられた。伊能忠敬について思いを述べられる方もあり、映画のちらしと研究会のパンフレットは多くの方に持ち帰られた。伊能忠敬研究会が一般の多くの方々に周知された3日間となった。

会員だより

大河ドラマ化の取り組み

木内 信次

伊能忠敬研究会のみなさま、毎年資料を送っていただきありがとうございます。設立以来26年余り、ご苦労さまでした。

また、「大河への道」パンフレットありがとうございました。佐原文化会館にて4月10日、特別に先行上映されました。

忠敬翁の父の実家、横芝光町の神保誠さん2名、忠敬翁の父の娘家、東金市の高宮誠・ヨリ子さん2名、銚子市（研究会員）宮内敏さん夫妻2名、また、多くの署名を集めた方々、推進協議会の方々25名余りの方々が4月10日に見ました。

説明では、南は九州から北は北海道の350を超える映画館で5月20日（金）に全国公開されました。よかったです。

全国公開されることにより、伊能忠敬翁を改めて知っていただくことができ、大変よいと思います。

7月の夏祭り（7月10日以降の金・土・日曜日）、10月の秋祭り（10月第2土曜日を中日とする金・土・日曜日）には山車が出ます。案内しますのでぜひ来てください。

大河ドラマ化の主な過程※

平成23年2月12日
（午前）
伊能忠敬菩提寺「観福寺」墓参り
（午後1時）開花亭
「伊能忠敬研究会十五周年」
「2345点国宝指定」祝賀会
開会前別室
香取市長　宇井成一　木内志郎
東金市長　志賀直温　渡辺一郎
横芝光町長　齋藤　隆　伊能敏雄
九十九里町長川島伸也　木内信次
「伊能忠敬NHK大河ドラマ化」
本日祝賀会にて宣言するに合意
推進協議会発足に関する会則をはじめ行政上の書類作成、整理等を伊能敏雄に委任

平成23年3月11日
未曽有の東日本大震災により中断

平成23年5月下旬
推進協議会設立の準備に着手

平成23年7月17日　佐原中央公民館
（午後1時30分）「伊能忠敬研究会」「推進協議会」合同会議
8月28日「大河ドラマ化協議会」設立総会開会に「研究会」賛同

平成23年8月28日　三菱館
（午前10時）設立総会
「伊能忠敬NHK大河ドラマ化」推進、三万人の署名を集め陳情・請願することを決定（出席者77名）

平成23年10月1日
署名簿を用意し、署名活動に入る

平成23年10月3日　香取市長室
宇井市長より東金市長、九十九里町長、横芝光町長に賛同依頼
出席者　木内志郎　伊能敏雄
渡辺一郎　木内信次

平成24年3月18日
署名、三万人を超える

平成24年3月27日　NHK東京本社
三万人の署名簿を副えて陳情・請願書を提出

※木内信次氏提供資料から抜粋

忠敬を詠ふ

伊能　洋

鳥渡る平戸に出会ふ忠敬図
シーボルト旧居のオタクサ紅濃ゆき
春の星函館山の忠敬碑
松前除幕式
春潮や蝦夷地見据える忠敬像
旧宅書斎
忠敬の日記の嵩や白障子

※会員の皆さんも、短歌・俳句・川柳、エッセイ・近況報告など、気軽にご投稿ください。
投稿先（電子メール添付の場合）
kaiho@inoh-ken.org

歴史講座「伊能忠敬津山を歩く」

（岡山県）赤堀浩一

新たに発見された伊能忠敬が岡山県内を測量した際の史料を解説する。

令和4年7月10日（日）
津山市立図書館　視聴室

事務局からのお知らせ

特別展『地図最前線』のお知らせ

神奈川県立歴史博物館で特別展『地図最前線―紙の地図からデジタルマップへ―』が開催されます。岩橋教章、吉田初三郎、岸敬二郎ら主に近現代の「紙の地図」を作り・使った人たちに焦点をあて、その活動を通して地図と人の歩みを考えます。

なお、本展の〔前期〕には渡辺一郎氏が再発見した『伊豆七島図』が、〔後期〕には館蔵の『自神奈川至小田原東海道図』が展示されます。

会期：2022年7月16日～9月25日
〔前期〕7月16日（土）～8月14日（日）
〔後期〕8月16日（火）～9月25日（日）
※休館：月曜日（7月18日、9月19日は開館）

◆見学会のお知らせ◆

上記の特別展『地図最前線』の見学会を実施します。希望者は左記に従ってお申し込みください。

＊日時：２０２２年７月26日（火）
午後の時間帯で２時間程度を予定しています。※現地集合・現地解散

＊内容：学芸員による特別展の解説、展示の観覧、『伊豆七島図』の閲覧、等を予定。

＊申込：「見学会希望」氏名・連絡先を明記の上、メール（推奨）、電話、ＦＡＸにて申込んでください。
（アドレス・番号は会誌末尾を参照）

＊締切：２０２２年７月16日（土）

＊備考：申込者には追って詳細をお知らせします。

＊研究会のＨＰでもご案内します。

二〇二一（令和四）年度 総会報告（紙上で実施）

令和四年度の総会は新型コロナウイルスの感染が収束しないため、昨年度に続き、会員に総会資料を送付する紙上総会の形で開催しました。

議案については５月31日を期限（必着）として以下の通り、会員の過半数から議決票による回答があり、すべての議案が承認されました。

なお、議決票にご記入いただいた近況やご意見・ご感想を後段に掲載しました。今後の会運営の参考とさせていただきます。

紙上総会結果

回答率58％（無効票を含む）
議決票数
91票／一般会員数１５６人
有効票83（期限内に到着したもの）
無効票８（期限後に到着したもの）

議決

第一号議案　令和３年度事業報告
第二号議案　令和３年度決算報告
第三号議案　令和３年度監査報告
第四号議案　令和４年度事業計画
第五号議案　令和４年度事業予算

いずれの議案も賛成83票、反対０票でした。

議案の概要（事業関係）

二〇二一（令和三）年度　事業報告

1．会員動向（21年４月１日～22年３月31日）

・会員数　名誉会員１、一般会員１５６、購読会員３、特別会員１
（22・４・１現在）

・入会者（一般会員）：５名
田中正子、樋口宗司、本橋修、阿部野剛、石田健治郎

・退会者（一般会員）：15名　大八木照行（逝去）、平川定美（逝去）、座間喜美（逝去）、伊能二三代、石井友夫、高宮宏、秋間実、山本公之、大黒和美、原口光和、岩橋伊津子、菅原佐知子、額賀大康、藤原繁、山根伸洋

2．事業等

総会　紙上総会
21年６月９日～６月25日（必着）

理事会　（※全てメール会議）
臨時①　21年４月７日～９日
第１回　21年６月４日～６日
第２回　21年７月11日～13日
臨時②　22年３月29日～31日

会報発行
第94号　（84頁　６月28日発行）
第95号　（80頁10月20日発行）
第96号　（60頁　２月28日発行）

主催事業

伊能図完成２００年記念事業推進協議会主催「伊能図完成２００年記念の集い」　21年４月16日～18日　江東区文化センター

※当研究会は構成団体の１つとして参画、

内容：記念式典、記念講演会「伊能忠敬測量の日本地図を読む」星埜由尚、記念落語会「大河への道」立川志の輔、展示会、歩測、地図の折り方、他

〈中止〉※コロナ感染拡大のため

伊能忠敬研究会主催「伊能図完成２００年記念講演会」21年７月10日　千代田区図書文化館大ホール

共催事業

日本地図学会主催『大日本沿海輿地全図』幕府上呈２００年記念集会」

テーマ：「伊能図」の現代的価値を考える　21年７月10日

※オンライン集会

発表者：鈴木純子、星埜由尚、菱山剛秀、前田幸子

後援事業

「地図展２０２１　神戸から見る日本の国土と海」開会式

※前田事務局長出席

10月28日　神戸阪急本館９階

報道・番組への対応（主なもの）

21年５月26日取材「朝日小学生新聞」

21年7月号『サライ』「伊能忠敬が見たニッポン」小学館
21年12月17日号『週刊朝日』「伊能忠敬の子孫が語る〔地図人生〕秘話」
21年12月号『男の隠れ家』特別編集「伊能図で旅する城下町」三栄書房
22年1月号『歴史人』特集「伊能忠敬と「大日本沿海輿地全図」の真実」

二〇二二（令和四）年度　事業計画案

総会

定期総会　22年5月（紙上総会）

理事会

第1回　22年5月
（総会準備）（メール）
第2回　22年6月
（総会承認事項等確認）
第3回　22年9月
（事業実施状況検討）
第4回23年2月（次年度準備）

会報発行

97号（6月発行）
98号（10月発行）
99号（2月発行）

主催事業

「伊能忠敬研究第100号」記念事業
(1)研究会誌「伊能忠敬研究」第100号記念事業の検討・準備・実施
〈事業内容〉
・会報第100号（記念号）の発行
(2)講演会・懇親会
コロナ感染が収束した場合に対面で実施できる行事を実施する。

後援・協賛事業等

(1)地図展協議会　地図展への協力等
(2)「測量の日」東京地区実行委員会への協力等
(3)その他　各地域において実施する記念事業への協力等、
上記のほか、要請があった事業について検討のうえ対応する。

会員の近況報告・意見等

◆【近況報告・やりたいこと・やってほしいこと　等々】

（神奈川県）秋沢達雄
本を出版しました。伊能忠敬ではありませんが、明治の終わり、小田原の海岸に流れ着いたベトナム独立のため日本に来たファン・ボイ・チャウ（潘佩珠）を、大きな意志で支援をした日本人医師の話です。日本では医師の墓のある静岡県袋井市以外では知られておりませんが、ベトナム独立の基礎を作った英雄として彼は尊敬されています。日本でも浅羽佐喜太郎医師が尊重されるべきと考えました。

（江戸民具街道）
世界に誇れる「実測日本地図」作成の偉業は、日本全国津々浦々の地元住民に伝わる実話によって裏付けられている。NHK大河ドラマで全国民に改めて周知すべき「日本文化史」である。想定に基づく物語ではなく、多くの証言に基づく実話としてドラマ化するためには偉大な作家を必要とするが、是非とも実現してほしいと祈念している。

（神奈川県）石橋　明

（千葉県）石嶋博行
映画「大河への道」観ました。忠敬死後の地図づくりがよく描かれていて、よかったです。

（埼玉県）伊東　孝
映画「大河への道」に感動しました。

（東京都）伊能　洋
私の夢は「忠敬ライブラリー」の設立です。旧宅内の旧記念館を利用して忠敬関係の全ての出版物が、誰でも見られるようになったら嬉しいのですが・・・。記念館はすでに満杯で、自由に見られる訳でもありません。皆さまのお力添えを期待します。私の蔵書も全て納めたいのです。

（埼玉県）井上　健
新しい切り口である「大河への道」が注目されています。色々な事柄や出会い、周囲の状況が大きく歴史を動かす可能性を教示してくれますよね。!!

（東京都）猪原紘太
映画を見ました。面白かったですね。少しでも多くの人に伊能忠敬のことを知ってもらうきっかけになりそうですね。

（神奈川県）大沼　晃
5／24映画「大河への道」鑑賞。落語家がプロデュースしただけに楽しく面白く、役者の演技により満足度100％。地元相模、金沢八景の地図作成のシーンがクローズアップで出てきた時は心ヒートアップしました。

（石川県）大星正嗣
伊能忠敬研究会石川支部で発刊した「伊能忠敬　加能越を測る―石川・富山足跡探訪―」について、石川県内全域で会員がそれぞれ地元の小学校・中学校・高校その他コミュニティセンター等に配布し、マスコミに大きく取り上げられました。

（兵庫県）加賀尾宏一
今年は、当会（※伊能忠敬笹山領探索の会）の活動も12年になります。目下、ふるさと再発見・歴史街道を学ぶをテーマにして、「伊能忠敬笹山領の道～12年の歩み～」をまとめ中です。（A4、28P）。市の補助金頼みで、折衝中です。

（千葉県）柏木隆雄
足立区千住に第1歩の記念碑を建てましょう。足立区・香取市・研究会

の協同事業として。

（神奈川県）金子和蔵

緯度1度を求めて、忠敬が測量し、歩いた江戸の町（東京）を、残された資料をもとに、二回ほど歩いて見たことがある。地球の大きさを求めて歩いた忠敬の大きなロマンを感じずにはいられなかった。「大河への道」を楽しみに見てみたいと思う。

（静岡県）片寄　啓

大谷亮吉著『伊能忠敬』の解説をどなたかに御願いしたい。

（石川県）河崎倫代

能登半島最北東端の岬で明治16年以来、光を放ち続ける禄剛崎灯台が国の重要文化財に指定される日を待っています。この2年間で10基の明治期灯台が指定されています。伊能測量隊も訪れた岬や島々の灯台めぐりには『測量日記』と伊能図を持参すると楽しみが倍増しますよ。

（兵庫県）神戸利行

映画を見ました。少し不満があります。

（千葉県）木内信次

伊能研究会各位様

平成23年2月12日開花亭にて、伊能研究会15周年、２３４５点の国宝指定の祝賀会以来11年が過ぎました。平成23年8月28日、伊能忠敬大河ドラマ化をめざして推進協議会設立しました。3万の署名を目指してはじめました。研究会の皆様には多くの署名をいただきありがとうございました。お礼申し上げます。

（長野県）嶋田秀樹

伊能忠敬は第八次測量で１８１４年の6月20日、21日に信州須坂を測量しています。その経過については第81号にて研究発表させていただきましたが、今回は、その宿泊先及びその食事、測量隊に対する対応について、新資料を発見しました。また、その御子孫の家系図や古文書の公開から明らかになったこともあり、現在その発表の準備をしているところです。ご期待ください。

（兵庫県）田中正子

スチール写真に測量野帳が写っていたことからも、大いに気になっていた映画『大河への道』、昨日（5／21）早速みてきました。よかったです！

尚、野帳はスケッチブックではなく、（レベルブックでもなく）トラシットブックでした。イメージで小道具に選ばれたのかと推察しますが、現場人間からはツッコミ入りそうですね～（私だけ⁉）ともあれ、感動の映画でした。

（千葉県）田野圭子

山武市雨坪の義経と天狗の絵馬修復記念お披露目会を２０２２．１０．１に行います。来年、地域の絵馬展として東金の城西国際大学水田美術館で開催したいと思っています。忠敬の伊能家の先祖は義経を助けたとして源頼朝に職を奪われています。義経と伊能家は関係があったのですね。

（北海道）中塚徹朗

『山島方位記』に選ばれた山や島に、選ばれた理由が解らないものがあります。例えば私の町の「福島丸山」は対岸青森から9回もされていますが、３００ｍほどの低い山です。まわりには高い山（７００～１０００ｍ）があるのです。選ばれた理由を知る企画を御願いいたします。

（神奈川県）永野達代

病明け最初は渡辺さんの思い出を書かせていただきます。

（茨城県）中村泰子

役員の皆様、お世話になります。「大河への道」公開初日、コロナ対策万全にして行って来ました。測量計算や地図作成の手順を追う作業シーンが印象的で、コンパスローズが浮き立つ感じが「鳥肌」で何とも言い難く、とても面白く鑑賞させていただきました。

（佐賀県）馬場良平

「伊能忠敬研究会」総会出席は上京する唯一の楽しみです。会員一同が会する機会が訪れること、実現することを切望しています。

匿名希望

１００号記念号の発行へ大変な作業が始まるでしょう。多くの会員を引きずり込む形の内容になると楽しいのでは？

（千葉県）樋口宗司

6月中旬に拙著『伊能忠敬と四人の妻』をアマゾンおよび丸善ジュンク堂よりＰＯＤ（オンデマンド出版）の予定です。謎の多い忠敬前半生の物語ですが、執筆に当たっては本研究会の会報に掲載された資料を参考にさせて頂きました。感謝、感謝です！

（茨城県）堀野正勝

映画「大河への道」が無事公開となりホッとしました。是非皆様ご覧下さい。

（長崎県）松尾卓次

当・島原は島原城・島原城下町築城・開基４００周年を迎えます。さらに未来へとその思いを続けていくために未来キャンパス講座を取組中。勿論伊能測量・島原領地図作製も取上げ語り続けようと思っています。

（兵庫県）三木敏明

忠敬の播磨での宿泊所を探求していたが、休止していた処、同じ事を始めた人が尋ねて来た。資料を提供し、出来るなら一緒にやり遂げたく思っている。

（岡山県）水田清志

私は岡山県の瀬戸内市立図書館でボランティア活動をしています。本年度は伊能忠敬の顕彰事業を行っていきます。先日も瀬戸内市に宿泊した村を歩き、歩測で距離を測るゲームを行いました。今、瀬戸内市の図書館で伊能忠敬の講演会を計画しています。講演会の講師を紹介してもらえないでしょうか？交通費、謝礼も用意しています。

（北海道）安川義巳

・立川志の輔落語と映画のＤＶＤは発売してもらえないでしょうか。（コロナ禍にあって、個人的に楽しみたいと思います。）

・伊能図完成２００年記念講演会等も拝聴できず残念でした。

・会員の高齢化対策も大事になりましたが、あらためて伊能忠敬先生の充実した人生に感激しています。

匿名希望（ユメバアー）

私が入会する前には、忠敬の誕生した土地をめぐるツアーがあったとか聞きました。どのようなことをされたのか分かりませんが、縁があるところをめぐってみたいです。

◆【ご意見等】

（神奈川県）石橋　明

会の運営、誠にお疲れ様です。コロナ禍が長引く中で何かとご苦労が多いことと存じます！引き続き宜しくお願い致します。

（三重県）岩本　敏

総会は今後もコロナ対策を施した上で開催を御願いします。議事のみならず、交流の機会として大切だと思います。

（神奈川県）狼芳　明

対面での総会開催を期待しています。

（神奈川県）大沼　晃

会報１００号記念誌楽しみにしております。

（兵庫県）加賀尾宏一

平素は何かとご高配を賜り、ありがたく厚くお礼申しあげます。

（千葉県）香取禧良

理事の皆様に深く感謝申しあげます。過日「大河への道」ひとしお感慨深く鑑賞して参りました。本会の益々のご発展を祈念申しあげます。

（神奈川県）金子和蔵

早くコロナが終息することを願っています。そして、学習会など開催してもらうと、ありがたいです。

（静岡県）片寄　啓

もう少し大きな字で印字してほしかった。老齢で目が弱くなってしまったので。

（兵庫県）神戸利行

関西で行事を行ってほしい。

（千葉県）木内信次

総会資料を送っていただきありがとうございます。伊能研究会の皆様は今日も忠敬翁の業績を後世に伝えていただきご苦労様です。

（長野県）嶋田秀樹

様々な困難な状況下にあり。理事、役員の方の配慮に感謝致します。次なる１００年のための活動の方向性が明確になると、一層、会の存在の意味も明確になるかと思います。よろしくお願い致します。

（東京都）清水靖夫

いつも御苦労様です。ありがとうございます。

（東京都）鈴木純子

運営に当たる皆様ご苦労様です。どうぞよろしくお願いいたします。

（千葉県）高宮　勲

大変遅くなり申し訳ございません。今後ともよろしくお願い致します。

（千葉県）高宮リヨ子

回答が遅くなってしまい大変申し訳ございません。今後ともよろしくお願い致します。

（鳥取県）田中精夫

特になし。大河への道、放映おめでとうございます。

（大阪府）田中正子

お疲れ様です。

（佐賀県）馬場良平

先輩諸氏の御逝去による退会や高齢などの事情での退会者が増加しており、寂しい限りです。このままでは「伊能忠敬研究会」の存続が危ぶまれます。会員増加をどうするか！喫緊の課題と思われます。

（福島県）松宮輝明

大変お世話になっております。よろしくお願い致します。

（新潟県）山浦佐智代

「伊能でＧＯ！」をバージョンアップしてもらいたい。画面に測量隊が出て来るところがあったり、伊能忠敬が出て来るところがあるとか、その場所の風景が見えるとか・・・どうでしょうか・・・。

訃　報

兵庫県神戸市の大西道一さんが令和２年11月に逝去され、令和３年８月に奥様から多額の遺贈寄付をいただきました。

また、佐賀県嬉野市の会員松尾紀成さんが令和３年８月に、長崎県佐世保市の平川定美さんと埼玉県所沢市の座間喜美さんが令和４年２月に逝去されました。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

『伊能忠敬研究』投稿要領

①原稿の長さ
論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。
＊刷り上がり一頁に入る文字数は約2000字（704字×三段または480字×四段）です。長い原稿の場合は連載として分割していただくこともあります。

②原稿のかたち
・本文（テキスト）　原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。
・写真　一般的なJPEG形式またはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350ppi程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。
＊印刷サイズが100mm×75mmで350ppiのカラー写真の場合、1MB前後のファイルになります。通常のデジタルカメラやスマートフォンによって5Mモード以上で撮影された画像ファイルで問題ありません。
デジタルカメラのデータ仕様がわからない場合は、L判（127mm×89mm）程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。
・図　写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキャナで撮った電子ファイル（JPEG形式またはTIFF形式）にしてください。

③原稿の送り方
左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものを郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷上り見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。（詳しくは**ホームページ**　http://www.inoh-ken.org/　を参照）

送り先
・電子メール添付の場合　kaiho@inoh-ken.org
・郵送の場合　〒153-0042　東京都目黒区青葉台4-9-6日本地図センター2階
伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

④注意事項
・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。
・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って会誌及びホームページ掲載の許可を取っておいてください。
・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。
・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があった場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。
・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとっておいてください。本誌に掲載された記事の著作権は、伊能忠敬研究会に帰属することとします。他誌等へ転載する場合は、事務局に連絡して許可をとってください

次号（第98号）は2022年10月発行、原稿締切は8月31日です。皆様の投稿をお待ちしております。

伊能忠敬研究会入会の御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。
①会報の発行　研究成果・会員活動情報など　原則として年三回発行
②例会・見学会の開催
③忠敬関連イベントの主催または共催
④その他付帯する事業

三、入会方法等
入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、年会費五千円を左記にお送り下さい。
会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、伊能忠敬研究会事務局所在地
〒153-0042　東京都目黒区青葉台4-9-6　日本地図センター2F
電話・FAX　03-3466-9752
（留守の場合は録音テープに吹込んでください。）
事務局メール　mail@inoh-ken.org
郵便振替口座　〇〇一五〇-六-〇七二八六一〇
ホームページ　http://www.inoh-ken.org/

編集後記　◇コロナウィルスの感染が拡大したため、撮影が遅れた映画「大河への道」が5月20日から全国公開されて話題を呼んでいる。◇伊能忠敬研究会も協力者としてエンドロールに名前が流れ、国土地理院長から感謝状をいただいた。◇26年前にスタートした多くの会員の活動は人それぞれに異なる。◇ある人は、埋もれていた伊能図を見つけ出し、だれでも見られるように公開した。◇ある人は古文書を解読して、一般の人にも史料をわかりやすく伝えられるようにした。◇ある人は伊能忠敬の歩いた道を実際に歩いて、測量の大変さを伝えた。◇ある人は当時の測量や天文の技術を追求し、忠敬の測量を再現して見せた。◇ある人は自分の住む地域で忠敬の業績を伝える活動をした。◇そうした会員一人ひとりの活動が結実し始めている。◇伊能忠敬研究会の会則には「伊能図と伊能忠敬事跡の調査研究を行い、伊能忠敬の実像を普及」することが掲げられている。◇会報で発信した研究会の成果は、自ら発信するだけでなく、雑誌やマスメディアのほか、小説や映画、演芸など幅広い媒体を通してさらに多くの人たちに伝えられ始めていることを感じる。H

「伊能忠敬研究」第97号© 2022年6月20日発行　編集　髙安克己　発行　菱山剛秀
〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6　日本地図センター2F　伊能忠敬研究会　TEL&FAX 03-3465-9752